秋田県文化財調査報告書第470集

# 黒 沼 下 堤 下 館 跡

－一般国道13号河辺拡幅事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１１・７

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろざか）遺跡出土の
「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7㎝、凝灰岩。

# 黒沼下堤下館跡（くろぬましもつつみしたたてあと）

－一般国道13号河辺拡幅事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１１・７

秋田県教育委員会

# 序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、秋田自動車道・日本海沿岸東北自動車道や、これに接続するアクセス道・国道等の交通体系整備は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これらの地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道13号河辺拡幅事業に先立って平成22年に秋田市河辺において実施した黒沼下堤下館跡の発掘調査についてまとめたものであります。

調査の結果、平安時代の竪穴建物跡や江戸時代の墓、縄文土器や土師器なども見つかり、遺跡が縄文時代と平安時代に利用されていたことが明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助になることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所、秋田市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成23年７月

秋田県教育委員会

教育長　米　田　　進

# 例　　言

1　本書は一般国道13号河辺拡幅整備事業に係る黒沼下堤下館跡の発掘調査報告書である。

2　調査内容については、一部が『秋田県埋蔵文化財センター年報』等によって公表されているが本書を正式なものとする。

3　本書に使用した地図は、国土交通省秋田河川事務所提供の工事路線計画図1,000分の１（第１図）、国土地理院発行の25,000分の１「羽後和田」「秋田東部」（第３図）をもとに作成した。

4　土層断面図等の土色表記は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、小山正忠・竹原秀夫編著、1998年21版）に拠った。表記にあたり、基本層序はローマ数字（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ‥）を、遺構堆積土は算用数字（１、２、３‥）を用いた。また、Ｍは盛土層を示す。

5　発掘調査から報告書作成にあたり、以下の業務は委託により実施した。

遺跡周辺地形図作成：秋田県土地改良事業団体連合会

航空写真撮影：株式会社シン技術コンサル

土壌のテフラ検出・鉱物分析〔第５章第１節〕：株式会社パレオ・ラボ（藤根 久）

骨同定・炭素窒素同位体分析〔第５章第２節〕：パリノ・サーヴェイ株式会社

6　発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の法人・団体・個人から御指導・御助言を賜った。記して感謝申し上げる次第である（順不同、敬称略）。

宗教法人陽田寺、秋田市役所都市計画課・資産税課・生活総務課、秋田市河辺北野田高屋生産森林組合、上和田町内会、鈴木琢也（北海道開拓記念館）、豊田宏良（千歳市埋蔵文化財センター）、佐藤智生・平山明寿（青森県埋蔵文化財調査センター）、岡本康嗣・今野沙貴子（弘前市教育委員会）、安田忠市・神田和彦（秋田市教育委員会文化振興室）、伊藤武士（秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所）、吉川耕太郎（秋田県立博物館）

7　本書の執筆・編集は、佐々木尚人の協力のもと、高橋 学が行った。

# 凡　　例

1　本書に掲載した平面図の方位は、世界測地系平面直角座標第Ｘ系による座標北を示す。

2　遺構番号は種類ごとに略記号を付し、種別を問わず検出順に連番とした。また、遺物番号は遺構内外・種別を問わず出土順に連番とした。遺構・遺物の略記号は下記のとおりである。

ＳＡ：柱列　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＤ：溝跡　ＳＩ：竪穴建物跡　ＳＫ：土坑

ＳＮ：焼土遺構　ＳＱ：配石遺構　ＳＺ：テラス状遺構　ＳＫＰ：柱穴様ピット

ＲＰ：土器　ＲＱ：石器・剥片　ＲＭ：金属製品・鉄滓　ＲＷ：木製品　Ｓ：礫

3　遺構実測図および遺物実測図には、それぞれスケールを付して表示した。

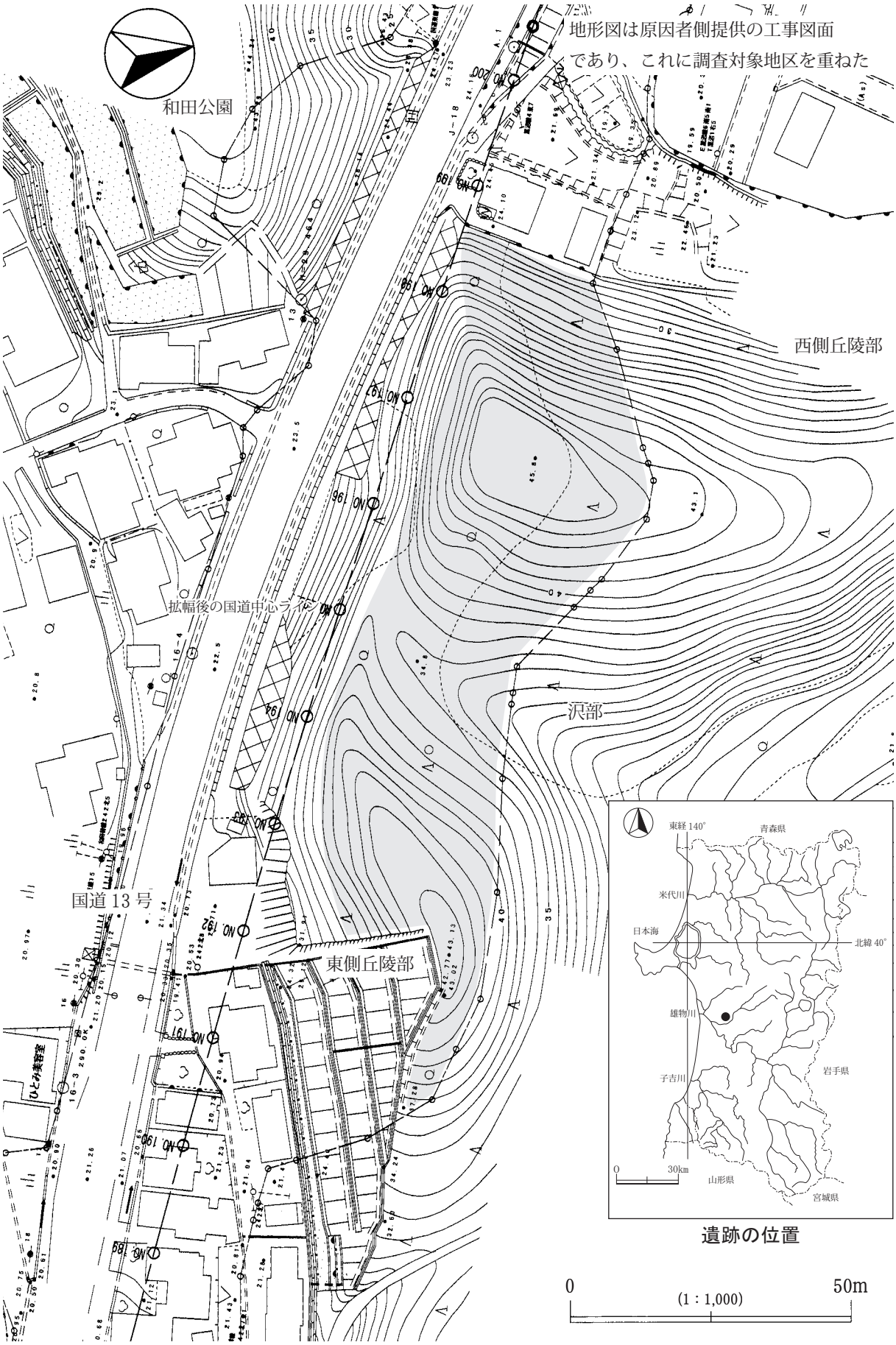
# 目　　次

序
例言・凡例 …… ii
目次 …… iii

第１章　はじめに
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査要項 …… 1
第２章　遺跡の環境
　第１節　遺跡の位置と立地 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　発掘調査の概要
　第１節　遺跡の概観 …… 11
　第２節　調査の方法 …… 13
　第３節　調査の経過 …… 13
第４章　調査の記録
　第１節　基本層序 …… 15
　第２節　検出遺構と出土遺物 …… 15
第５章　自然科学的分析
　第１節　土壌のテフラ検出と鉱物分析
　　－ＳＩ04竪穴建物跡カマド袖部掘形から検出された試料をもとに－ …… 44
　第２節　骨同定・炭素窒素同位体分析 …… 47
第６章　総括 …… 53
報告書抄録
付図　黒沼下堤下館跡地形図

# 挿図目次

第１図　遺跡の位置と調査対象地区 …… iv
第２図　遺跡周辺の地形分類・表層地質図 …… 3
第３図　黒沼下堤下館跡と周辺遺跡図 …… 6
第４図　遺跡範囲図 …… 10
第５図　西側丘陵部全域の段築と調査区 …… 12
第６図　西側丘陵部調査区周辺の段築と遺構配置図 …… 16
第７図　西側丘陵部調査区周辺の段築エレベーション図 …… 17
第８図　遺跡基本土層図・西側丘陵部東向き斜面部（Ｃ区）の段築部土層図 …… 18
第９図　西側丘陵部西向き斜面部（Ｂ区）の段築部土層図 …… 19
第10図　西側丘陵部頂部平坦面（Ａ区）南側の遺構配置図 …… 21
第11図　ＳＩ02竪穴建物跡と周辺の遺構群 …… 23
第12図　ＳＩ04竪穴建物跡 …… 24
第13図　ＳＩ04竪穴建物跡出土の棒状礫 …… 25
第14図　Ａ・Ｃ・Ｆ区の土坑・配石遺構 …… 28
第15図　ＳＮ05Ａ・Ｂ焼土遺構、ＳＩ05Ｃ竪穴建物跡 …… 30
第16図　Ａ・Ｃ区出土遺物（土師器） …… 32
第17図　東側丘陵部～沢部（Ｄ～Ｆ区）の遺構配置図 …… 33
第18図　東側丘陵部西向き斜面部（Ｅ区）の遺構配置図 …… 35
第19図　ＳＺ14テラス状遺構 …… 36
第20図　Ｄ・Ｅ区の掘立柱建物跡・柱列・土坑 …… 37
第21図　近世の土坑墓 …… 39
第22図　Ｄ・Ｅ区出土遺物（縄文土器・石器・剥片） …… 42
第23図　和田丘陵部北東側に残る段築 …… 43
第24図　発掘調査後に行われた工事で露頭した地層 …… 43
第25図　Ａ・Ｃ区（Ｃ１段）遺構変遷図 …… 54
第26図　「鋳銭座跡」標柱 …… 59
第27図　半合羽とボタン …… 59




第1図　遺跡の位置と調査対象地区

# 第１章　はじめに

## 第１節　調査に至る経過

一般国道13号は福島市を起点として米沢市、山形市、新庄市、横手市等を縦貫して秋田市を終点とする全長341.2㎞の主要幹線道路である。道路の整備事業は、国土交通省が示しているように、「ゆとりある交通」「効率的交通体系の確立」「地域活性化の支援」「生活環境の改善」をめざして進められている。

秋田市河辺地区を対象とした一般国道13号河辺拡幅事業（河辺神内－上北手古野間、延長6.6㎞）もその一環で計画され、平成３年度に事業着手している。当該事業は、現状の２車線を４車線化することにより、①渋滞の解消でスムーズな走行、②産業活動経済の活性化、③緊急医療への迅速対応、④冬期の安全で円滑な交通確保、⑤騒音、$CO_2$の減少が予測、という将来的な効果が期待され、平成６年度に工事開始、平成11年11月には一部４車線供用が開始されている。

拡幅事業主体である国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所は、平成20年に事業区域の中央部に位置する北野田高屋・和田地区を対象とした埋蔵文化財包蔵地の有無についての照会を秋田県教育委員会に行った。担当する教育庁文化財保護室では同年11月に遺跡分布調査を実施し、新発見の遺跡として黒沼下堤下館跡を確認し、遺跡登録を行った。これを受けて平成21年10月には秋田県埋蔵文化財センターが確認調査を実施した。調査の結果、階段状の地形（段築）が保存良好な状態で確認され、時期は不明確ながらも土坑・溝跡等が検出され、遺物には古代と近世以降の土器・陶磁器類が出土した。調査結果による遺跡の範囲と工事区域の関係調整が計られ、最終的に工事区内のうち4,650㎡の発掘調査が必要であることが確定した（第１図）。以上の経緯に基づき、調査担当である秋田県埋蔵文化財センターが下記により、発掘調査を実施するに至ったものである。

## 第２節　調査要項

| | |
|---|---|
| 遺　跡　名 | 黒沼下堤下館跡（くろぬましもつつみしたたてあと）（遺跡略記号：５ＫＮＳＴＳＴ） |
| 所　在　地 | 秋田県秋田市河辺北野田高屋字黒沼下堤下68-7･14、76、81 ～ 83、93、94、96 |
| 調査期間 | 平成22年６月14日～ 10月15日 |
| 調査面積 | 4,650㎡ |
| 調査主体者 | 秋田県教育委員会 |
| 調査担当者 | 高橋　　学　秋田県埋蔵文化財センター調査班主任学芸主事 |
| | 佐々木尚人　秋田県埋蔵文化財センター調査班学芸主事 |
| 総務担当者 | 久米　　保　秋田県埋蔵文化財センター総務班副主幹 |
| | 高村智恵子　秋田県埋蔵文化財センター総務班主任（平成22年度） |
| | 小松　正典　秋田県埋蔵文化財センター総務班主査（平成23年度） |
| 調査協力機関 | 国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所・秋田市教育委員会 |

# 第２章　遺跡の環境

## 第１節　遺跡の位置と立地

黒沼下堤下館跡の所在する秋田市河辺地区（旧河辺郡河辺町）は、秋田県のほぼ中央にあり、雄物川の支流である岩見川流域に位置する。河辺地区は現在の秋田市域からみればその南東部にあたる。秋田市北東部に位置する霊峰太平山（1,171m）の南東側山地を水源とする岩見川は、岩見、三内、赤平、大張野、諸井、和田、戸島、豊成（以上、旧河辺町域）などの諸集落を通り、秋田市四ツ小屋で雄物川に合流する。

遺跡は、ＪＲ奥羽本線和田駅の北東約400m、秋田空港の北約４㎞、日本海汀線から東に約14㎞、西流する岩見川右岸（北岸）の丘陵最南端部に立地する。本丘陵は出羽丘陵のひとつである和田丘陵地と称され、遺跡はその東側にあたる。和田丘陵地東側は、北方向の山地から南の岩見川に向かって細長く延びるが、その西端は岩見川の支流である梵字川による矮小な谷底平野によって区切られている。従って遺跡は、岩見川と梵字川に挟まれた和田丘陵地東側部の最南端に位置することになる。遺跡調査区での標高は46m（最高位）であり、沖積地（岩見川低地）との比高は24mである。

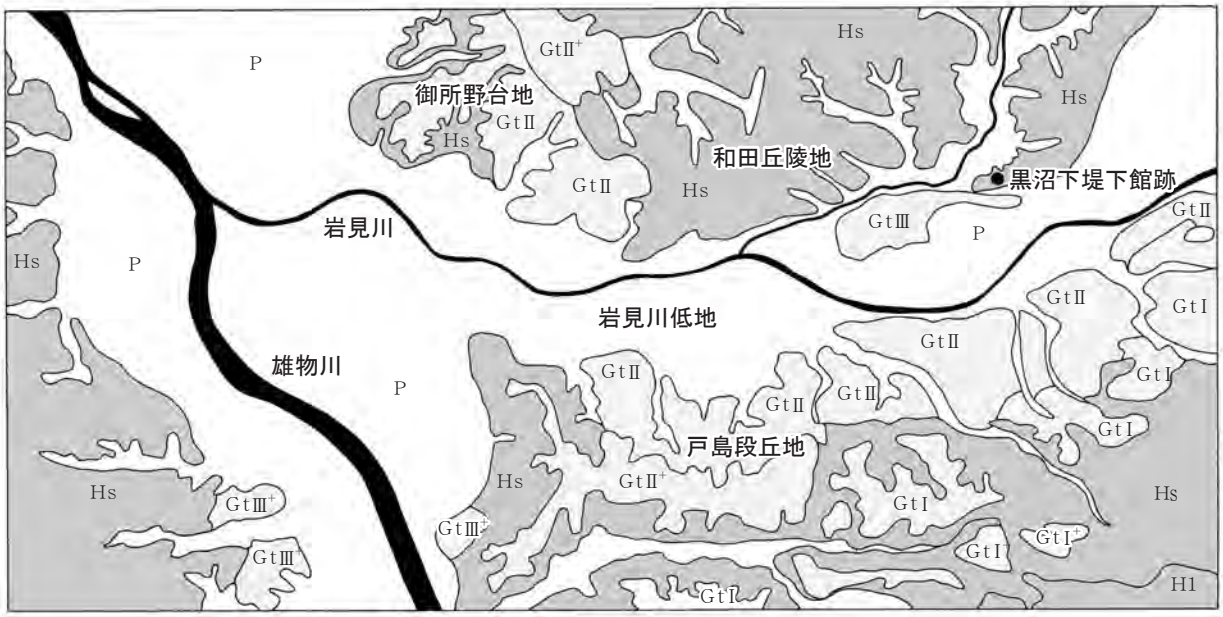
遺跡の立地する和田丘陵地は、地質的には新第三紀鮮新世の笹岡層を構成する砂岩（Sss）を基底とする、一部では同じ笹岡層の酸性凝灰岩ないし凝灰質砂岩（Stf）が下位に貫入する（第２図）。実際に、調査区の西側丘陵部の基底には、本調査後の工事により凝灰質砂岩の分布が確認された。

## 第２節　歴史的環境

黒沼下堤下館跡周辺の歴史的環境について、第３図幅中の遺跡を中心に概述する。図幅は秋田市南部（旧河辺町・雄和町を含む）の南北約11.7㎞、東西約8.5㎞のエリアであり、ここに117遺跡が周知されている。内訳は、旧石器時代13遺跡、縄文時代90遺跡、弥生時代24遺跡、飛鳥･奈良時代１遺跡、平安時代43遺跡、中世16遺跡、近世以降７遺跡である。

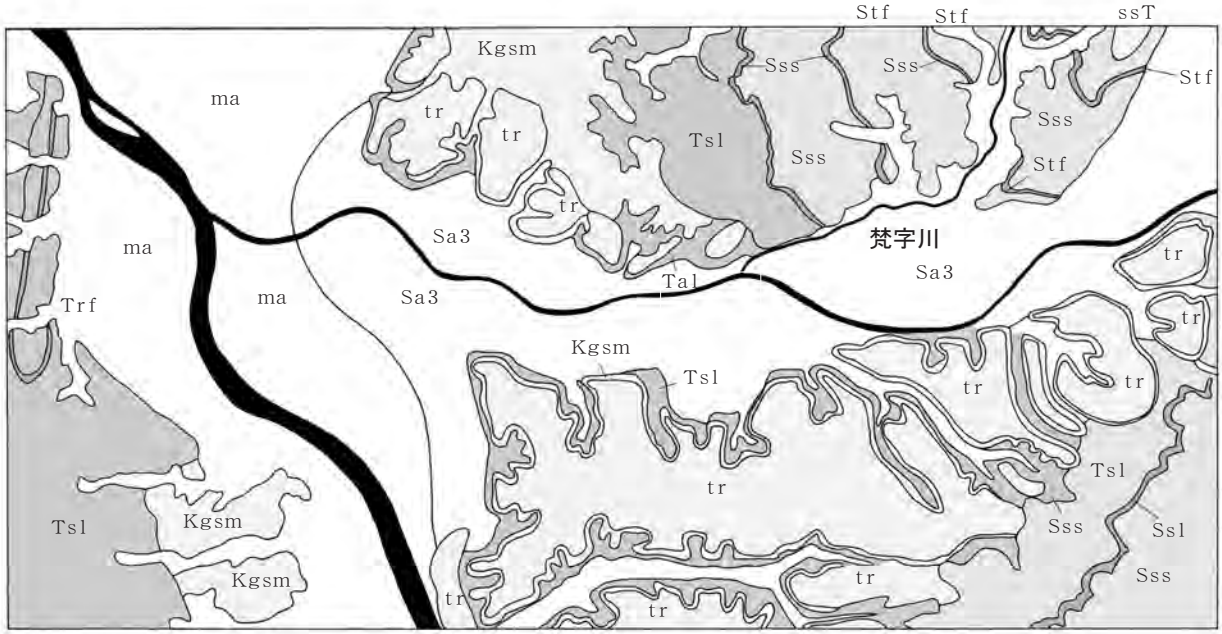
当該地域の発掘調査は、和田丘陵地の西側に接続する御所野台地（末戸台台地）や岩見川左岸の戸島段丘地で数多く実施され、68遺跡の調査報告がなされている。御所野台地では、秋田新都市開発整備事業関係の調査（昭和56年～平成５年、31遺跡、第１表の調査原因参照、以下同）が秋田市教育委員会により行われた。戸島段丘地では、秋田空港に隣接する県立中央公園スポーツゾーン造成(昭和56年、４遺跡)、七曲工業団地造成（昭和58･59年、11遺跡)、七曲工業団地アクセス道路建設（平成元年、３遺跡)、秋田自動車道（昭和60年･平成６年、７遺跡)、日本海沿岸自動車道（平成９～13年、５遺跡)、秋田空港アクセス道（平成10・16年、２遺跡）等に係る調査が秋田県教育委員会により実施された。

旧石器時代の遺跡は、御所野台地７遺跡、戸島段丘地５遺跡、和田丘陵地で１遺跡が確認されている。風無台Ⅱ遺跡・松木台Ⅱ遺跡・地蔵田遺跡・狸崎Ｂ遺跡では台形様石器が出土しており、これらは県内では最も古い段階（後期旧石器時代前半期）の石器群に位置づけられる。なお、下堤Ｇ遺跡で

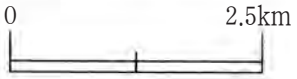



**地形分類図**

Hl：丘陵地Ⅰ（起伏量200～100m）、Hs：丘陵地Ⅱ（起伏量100m未満）、Gt：砂礫段丘（高位段丘GtⅠ+→GtⅠ→GtⅡ+→GtⅡ→GtⅢ+→GtⅢ低位段丘）、P：谷底平野（河原、旧河道、自然堤防など低地を一括する）




**表層地質図**




未固結堆積物＝Sa3：砂がち堆積物３・ma：泥がち堆積物（沖積低地堆積物）、tr：礫・砂および泥（段丘堆積物）、Kgsm：礫・砂および泥（潟西層）、半固結堆積物＝ssT：砂岩（礫および泥炭を伴う、高岡層）、Sss：砂岩(笹岡層)、Ssl：シルト岩（笹岡層）、Stf：酸性凝灰岩（笹岡層）、固結堆積物＝Tsl：シルト岩（天徳寺層）、Tal：シルト岩・砂岩および酸性凝灰岩（天徳寺層）、Ttf：酸性凝灰岩（天徳寺層）

上図は、秋田湾大規模工業開発地域『土地分類基本調査　羽後和田』（秋田県1975）所収の「地形分類図」と「表層地質図」を一部改変後再トレースしたものである。

**第2図　遺跡周辺の地形分類・表層地質図**

当該期の土坑３基が礫群を伴って確認されている。

縄文時代に入ると多くの遺跡が認められるようになる。ただし草創期段階の遺跡は未確認であり、早期中葉の上祭沢遺跡の土器群が初出のようである。次いで、前期初頭～前葉の土器が石坂台Ⅰ遺跡で確認され、前期末葉には御所野台地部で小集落が形成されはじめる。下堤Ｆ遺跡・狸崎Ａ遺跡で各１棟の竪穴建物跡が検出された。下堤Ｄ遺跡では前期末～中期初頭の竪穴建物跡が４棟確認された。中期には集落が大規模化する。松木台Ⅲ遺跡は中期中葉～後葉の集落跡であり、墓域を含む中央広場の外側に竪穴建物跡が環状に配置される。中期後葉の下堤Ｂ遺跡では竪穴建物跡が45棟発見されている。後期には集落数が激減し、湯ノ沢Ｄ遺跡・風無台Ⅰ遺跡・石坂台Ⅷ遺跡で各１棟の竪穴建物跡が確認されているにすぎない。３棟とも後期初頭から前葉にかけての構築であり、後期末までの集落は認められない。晩期には再び集落が散見されるようになり、墓地も確認される。地方遺跡では竪穴建物跡、掘立柱建物跡と共に土坑墓が559基検出された。掘立柱建物は死者を葬送する際に用いられた施設と想定される。晩期の土坑墓は、狸崎Ａ遺跡でもまとまって検出されている。

弥生時代では御所野台地の地蔵田遺跡が特筆される。遺跡は周溝をもつ円形の建物（住居）で構成される。集落の外周には長径64m、短径47mの楕円状の木柵が巡り、その外側には墓域も形成される。時期的には弥生時代の最初期とみられる。その他に、弥生時代の集落跡には坂ノ上Ｆ遺跡、湯ノ沢Ａ遺跡、狸崎Ａ遺跡、地蔵田Ａ遺跡がある。

古墳時代～飛鳥時代の遺構・遺物は当該図幅中では確認できない。これ以降、いわゆる古代における遺跡は、奈良時代末～平安時代初頭にあたる８世紀後半～末に構築された御所野台地西端部の小阿地古墳が古段階の遺跡として挙げられる。遺構は古墳の周溝？、遺物では青銅鏡（花卉双蝶八花鏡）、金銅装大刀、蕨手刀や勾玉・管玉・丸玉が見られる。遺物は明治・大正期の採集品であり、古墳としての詳細な情報は乏しい。なお、古墳の可能性のある円形周溝は、御所野台地北端部に立地する大杉沢遺跡でも検出されている。

平安時代には多くの集落遺跡が御所野台地、戸島段丘地に形成される。その多くは９世紀後半～10世紀前半代の構築である。下堤Ｃ遺跡では31棟の竪穴建物跡が検出され、戸島上野Ⅰ遺跡では集落の外周に柵列による区画が認められる。御所野台地南端部に立地する湯ノ沢Ｆ遺跡では、９世紀後半代の土坑墓40基が確認され、豊富な副葬品等から秋田城と密接な関係をもつ集団の墓域とみられている。生産遺跡では野形遺跡において土師器（赤褐色土器）焼成遺構が18基検出されている。和田丘陵地の諏訪ノ沢遺跡では、９世紀後半～10世紀代の竪穴建物跡と共に２基の製鉄炉が確認された。製鉄炉は坂ノ上Ｅ遺跡でも炭窯跡とセットで検出され、これらは９世紀代の構築と報告されたが、遺構の形態から13世紀代の見解も示されている。御所野台地最南東端に位置する虚空蔵大台滝遺跡は、11世紀後半代の居館跡である。土塁・空堀・切岸の配置や規模は中世城館を想起させるものがあり、山城の成立を考える上で重要な遺跡である。

中世では調査例が少なく城館などの様相は不明瞭である。上祭沢遺跡では中世初期とみられる塚（墳墓あるいは経塚か）が２基調査され、須恵器系陶器壺が周溝内から出土している。須恵器系陶器は遺構外ではあるが大杉沢遺跡でも出土している。15世紀代の土坑墓は虚空蔵大台滝遺跡で検出されている。下堤Ｃ遺跡では、近世羽州街道に先行する可能性のある中世道路（側溝）が検出され、路面下に地鎮とみられる銭貨72点が一括埋納されていた。

近世以降の様相はさらに不明瞭であり、井戸尻台Ⅰ遺跡では地境の盛土とみられる塚２基、石坂台Ⅳ遺跡・石坂台Ⅶ遺跡・滝ノ沢Ⅱ遺跡では炭窯（伏焼窯・白炭窯）が調査されている。松木台Ⅲ遺跡では近代の焼土遺構（墓か）が陶磁器・銭貨と共に確認されている。

【文献】第１表の文献番号に対応　（秋田市教委→秋田市教育委員会、秋田県教委→秋田県教育委員会）


1　秋田市教委『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書－改訂版－』、2002年。
2　秋田県教委『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集、1981年。
3　秋田市『秋田市史 第六巻 考古 史料編』、2002年。
4　秋田市教委『秋田市諏訪ノ沢遺跡』、1993年。
5　秋田市教委『小阿地 下堤遺跡坂ノ上遺跡発掘調査報告書』、1976年。
6　秋田市教委『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤Ａ遺跡・下堤Ｂ遺跡』、1988年。
7　秋田市教委『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤Ｃ遺跡』、1987年。
8　高橋 学「中世道路と銭貨－秋田市下堤Ｃ遺跡出土の緡銭が語るもの－」『秋田考古学』第54号、2010年。
9　秋田県教委『大杉沢遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第151集、1987年。
　秋田市教委『秋田市大杉沢遺跡』、1997年。
10　秋田市教委『秋田市下堤Ｄ遺跡発掘調査報告書』、1982年。
11　秋田市教委『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 地方遺跡・台Ｂ遺跡』、1987年。
12　秋田市教委『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 地蔵田Ｂ遺跡・台Ａ遺跡・湯ノ沢Ⅰ遺跡・湯ノ沢Ｆ遺跡』、1986年。
13　秋田市教委『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 坂ノ上Ｅ遺跡・湯ノ沢Ａ遺跡・湯ノ沢Ｃ遺跡・湯ノ沢Ｅ遺跡・湯ノ沢Ｆ遺跡・湯ノ沢Ｈ遺跡・野形遺跡』、1984年。
14　秋田市教委『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤Ｅ遺跡・下堤Ｆ遺跡・坂ノ上Ｆ遺跡・狸崎Ａ遺跡・湯ノ沢Ｄ遺跡・深田沢遺跡』、1985年。
15　秋田市教委『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤Ｇ遺跡・野畑遺跡・湯ノ沢Ｂ遺跡』、1983年。
16　秋田市教委『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 地蔵田Ａ遺跡』、1994年。
17　秋田市『秋田市史 第七巻 古代 史料編』、2001年。
18　秋田市教委『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 狸崎Ｂ遺跡・地蔵田Ａ遺跡』、1993年。
19　秋田市教委『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 狸崎Ｂ遺跡・秋大農場南遺跡』、1992年。
20　秋田県教委「古野遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅨ』秋田県文化財調査報告書第253集、1995年。
21　秋田市教委『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書－追補版－』、2010年。
22　秋田県教委『七曲台遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第125集、1985年。
23　秋田県教委『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第116集、1984年。
24　秋田県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第150集、1986年。
25　秋田県教委『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第126集、1985年。
26　秋田県教委『松木台Ⅲ遺跡』秋田県文化財調査報告書第326集、2001年。
27　秋田県教委『高速交通関連道路整備事業(和田御所野)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第195集、1990年。
28　秋田県教委『上野遺跡』秋田県文化財調査報告書第295集、2000年。
29　秋田県教委『井戸尻台Ⅰ遺跡』秋田県文化財調査報告書第313集、2001年。
30　秋田県教委『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第270集、1997年。
31　秋田県教委『岱Ⅰ遺跡・岱Ⅱ遺跡・岱Ⅲ遺跡』秋田県文化財調査報告書第314集、2001年。
32　秋田県教委『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第308集、2000年。
33　秋田県教委『虚空蔵大台滝遺跡』秋田県文化財調査報告書第416集、2007年。
34　秋田県教委『出羽丘陵総合開発事業地域内遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第55集、1978年。
35　秋田県教委『奥椿岱遺跡』秋田県文化財調査報告書第305集、2000年。
36　秋田県教委『秋田県立中央公園・スポーツゾーン地域内遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第92集、1982年。
37　秋田県教委『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第380集、2004年。
38　秋田考古学協会『野形遺跡(昭和51年度)』、1977年。

第3図　黒沼下堤下館跡と周辺遺跡図

## 第1表　黒沼下堤下館跡周辺遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 種別 | 時期 | 遺構・遺物 | 調査原因 | 備考 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 514 | 黒沼下堤下館 | 河辺北野田高屋字黒沼下堤下、河辺和田字和田 | 遺物包含地 集落跡　館跡 墓地 | 縄文・古代・近世 | 本書参照 | 国道 13 号拡幅 | | |
| 258 | 前　田　面 | 下北手柳館字前田面 | 遺物包含地 | 古代 | 須恵器　赤褐色土器 | － | | 1 |
| 259 | 桜　谷　地 | 下北手桜字桜谷地 | 遺物包含地 | 古代 | 赤褐色土器 | － | | 1 |
| 260 | 和　田 | 下北手柳館字和田 | 遺物包含地 | 古代 | 赤褐色土器 | － | | 1 |
| 261 | 黒　川　館 | 下北手黒川字黒川、寺田 | 館跡 | 中世 | 郭　空堀　土塁　須恵器系陶器 | － | | 2 |
| 262 | 寺　田 | 下北手黒川字寺田 | 遺物包含地 | 古代 | 須恵器　赤褐色土器 | － | | 1 |
| 263 | 宝　川　館 | 下北手宝川字古館の下 | 館跡 | 中世 | 主郭　郭　帯郭　土塁　空堀　竪堀 | － | | 2 |
| 268 | 前　田 | 上北手荒巻字前田 | 遺物包含地 | 縄文・古代 | 縄文土器（前期）　須恵器　剥片 | － | | 3 |
| 269 | 諏　訪　ノ　沢 | 山手台二丁目、三丁目 | 鉄生産　遺物包含地 | 縄文・古代 | 土坑　Ｔピット　竪穴建物跡（古代）製鉄炉　溝　縄文土器　石器　須恵器　赤褐色土器　鉄滓　剥片 | 宅地開発 | | 4 |
| 270 | 堀　内　館 | 桜ヶ丘三丁目、四丁目、大平台一丁目、三丁目 | 館跡 | 中世 | 主郭　郭　帯郭　空堀 | － | | 2 |
| 271 | 館　ノ　下　館 | 上北手猿田字館ノ下 | 遺物包含地 | 縄文・古代 | 縄文土器・岩偶（前期）　須恵器　鉄滓　石器　剥片 | － | | 3 |
| 272 | 弥　生　館 | 上北手猿田字弥生館 | 遺物包含地 館跡 | 古代・中世 | 主郭　帯郭　腰郭　土師器 | － | | 2 |
| 273 | 猿　田　沢 | 上北手猿田字猿田沢 | 遺物包含地 | 古代 | 土師器　赤褐色土器　剥片 | － | | 1 |
| 274 | 大　平　沢 | 上北手大山田字大平沢 | 遺物包含地 | 古代 | 赤褐色土器 | － | | 1 |
| 282 | 下　堤　B | 御所野下堤五丁目 | 集落跡 | 縄文・古代 | 竪穴建物跡（縄文中期末・古代）　フラスコ状土坑　土坑　縄文土器　石器　須恵器　赤褐色土器 | 新都市開発 | | 5･6 |
| 283 | 下　堤　A | 御所野下堤五丁目 | 集落跡 | 縄文・古代 | 竪穴建物跡（縄文中期中葉　古代）　フラスコ状土坑　土坑　縄文土器　石器　土製品　土師器 | 新都市開発 | | 5･6 |
| 284 | 下　堤　C | 御所野下堤五丁目 | 集落跡　遺物包含地 | 縄文・弥生・古代・中世 | 竪穴建物跡（古代）　竪穴状遺構　土坑（縄文　弥生　古代）　道路跡（中世か）　縄文土器　土師器　須恵器　赤褐色土器　銭貨 | 新都市開発 | | 5･7･8 |
| 285 | 大　杉　沢 | 四ツ小屋小阿地字大杉沢 | 集落跡　遺物包含地 | 縄文・弥生・古代・中世 | 竪穴建物跡（古代）　土坑　溝状遺構　縄文土器　弥生土器　土師器　須恵器　石器　須恵器系陶器 | 国道 13 号拡幅、携帯電話基地 | | 9 |
| 286 | 下　堤　D | 御所野下堤三丁目 | 集落跡　遺物包含地 | 旧石器・縄文・古代 | 旧石器　縄文土器　土師器　赤褐色土器 | 新都市開発 | | 10 |
| 287 | 地　方 | 上北手猿田字堤ノ沢 | 集落跡　土坑墓群 | 縄文 | 竪穴建物跡（中・晩期）　掘立柱建物跡　土坑墓　縄文土器　石器　土製品 | 新都市開発 | | 11 |
| 288 | 台　B | 上北手猿田字堤ノ沢 | 集落跡　遺物包含地 | 縄文 | 竪穴建物跡（中期末）　土坑墓　縄文土器　石器 | 新都市開発 | | 11 |
| 289 | 篠　田　台 | 上北手猿田字篠田台 | 遺物包含地 | 縄文 | 石器　剥片 | － | | 1 |
| 290 | 台　A | 上北手古野字台 | 集落跡 | 縄文 | 竪穴建物跡（中期末）　土坑　縄文土器　石器　土製品 | 新都市開発 | | 12 |
| 291 | 坂　ノ　上　A | 四ツ小屋小阿地字坂ノ上 | 集落跡 | 縄文 | 竪穴建物跡（中期）　土坑　配石　縄文土器　石器　土製品（土偶　耳飾等） | 学術調査 | | 5 |
| 292 | 坂　ノ　上　B | 四ツ小屋小阿地字坂ノ上 | 遺物包含地 祭祀跡 | 縄文・弥生・古代 | 祭祀遺構（縄文中期）　縄文土器（前・中期）　弥生土器（土器棺）　石棒　土製品 | 学術調査 | | 3・5 |
| 293 | 坂　ノ　上　E | 御所野地蔵田二丁目 | 集落跡　鉄生産 | 縄文・古代 | 竪穴建物跡（縄文中期末）　製鉄炉跡　炭窯　縄文土器　土製品　石製品　須恵器　炉壁　鉄滓 | 新都市開発 | | 13 |
| 294 | 坂　ノ　上　F | 御所野地蔵田四丁目 | 集落跡 | 旧石器・縄文・弥生・古代 | 竪穴建物跡（縄文中期　弥生　古代）土坑　掘立柱建物跡　土器埋設遺構　炉　柱列　旧石器　縄文土器　石器　土製品　弥生土器　赤褐色土器　土師器　須恵器 | 新都市開発 | | 14 |
| 295 | 坂　ノ　上　D | 御所野地蔵田二丁目 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器　石器　土製品　土師器 | 新都市開発 | | 15 |
| 296 | 坂　ノ　上　C | 御所野地蔵田二丁目 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器　石器 | 新都市開発 | | 15 |
| 297 | 下　堤　F | 御所野地蔵田一丁目、下堤一丁目 | 集落跡 | 縄文 | 竪穴建物跡（縄文前期　中期末）　土坑　縄文土器　土製品　石器等 | 新都市開発 | | 14 |
| 298 | 下　堤　E | 御所野下堤一丁目 | 集落跡 | 縄文 | 竪穴建物跡（縄文中期）　竪穴状遺構　土坑等　縄文土器　石器等 | 新都市開発 | | 14 |
| 299 | 下　堤　G | 御所野地蔵田一丁目 | 遺物包含地 集落跡 | 旧石器・縄文 | 竪穴建物跡（縄文前期末～中期）　土坑　焼土遺構　旧石器　縄文土器　石器 | 新都市開発 | | 15 |
| 300 | 湯　ノ　沢　D | 御所野地蔵田一丁目、元町一丁目、二丁目、下堤一丁目 | 集落跡 | 縄文 | 竪穴建物跡（中期）　フラスコ状土坑　炭焼窯跡　縄文土器　石器　石製品等 | 新都市開発 | | 14 |
| 301 | 深　田　沢 | 御所野湯本一丁目 | 遺物包含地 集落跡 | 弥生・古代 | 掘立柱建物跡　竪穴建物跡　竪穴・掘立柱併用建物　土坑　弥生土器　石器　土師器　須恵器　赤褐色土器 | 新都市開発 | | 14 |
| 302 | 野　形 | 御所野湯本一丁目 | 集落跡　窯跡 | 古代 | 竪穴建物跡　窯跡　土坑　土師器　須恵器　赤褐色土器　土錘 | 新都市開発 | | 13･38 |
| 303 | 坂　ノ　下　館 | 四ツ小屋小阿地字坂ノ下 | 館跡 | 中世 | | － | | 2 |
| 304 | 小阿地古墳 | 四ツ小屋小阿地字坂ノ下 | 古墳 | 飛鳥～奈良 | 花弁双蝶八花鏡　直刀　蕨手刀　鉄斧　轡　勾玉　須恵器等 | － | | 17 |

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 種別 | 時期 | 遺構・遺物 | 調査原因 | 備考 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 305 | 坂ノ下Ⅰ | 四ツ小屋小阿地字坂ノ下 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器（後期）　石器 | － | | 1 |
| 306 | 坂ノ下Ⅱ | 四ツ小屋小阿地字坂ノ下 | 遺物包含地 | 縄文・古代 | 縄文土器　石器　土師器　須恵器 | － | | 1 |
| 307 | 狸崎Ａ | 御所野地蔵田四丁目、五丁目 | 集落跡　土坑墓群 | 縄文・弥生 | 竪穴建物跡（縄文前期　晩期　弥生）土坑　焼土遺構　掘立柱建物跡（時期不明）縄文土器　土製品　石器　弥生土器 | 新都市開発 | | 14 |
| 308 | 狸崎Ｂ | 御所野地蔵田五丁目 | 遺物包含地集落跡 | 旧石器・縄文・弥生 | 竪穴建物跡（縄文中期）土坑（縄文前期　中期　晩期）旧石器　縄文土器　土製品　石器　石製品　弥生土器 | 新都市開発 | | 18･19 |
| 309 | 秋大農場南 | 御所野地蔵田五丁目 | 遺物包含地集落跡 | 旧石器・縄文・古代 | 竪穴建物跡（縄文中期　古代）土坑　溝状土坑　土器埋設遺構　焼土遺構　旧石器　縄文土器　石器　赤褐色土器 | 新都市開発 | | 19 |
| 310 | 地蔵田Ａ | 御所野地蔵田五丁目 | 遺物包含地集落跡 | 旧石器・縄文・弥生・古代 | 竪穴建物跡（縄文中期　弥生　古代）掘立柱建物跡　旧石器　縄文土器　弥生土器　須恵器　赤褐色土器 | 新都市開発 | | 16･18 |
| 311 | 地蔵田 | 御所野地蔵田三丁目 | 遺物包含地集落跡　墓跡 | 旧石器・縄文・弥生 | 竪穴建物跡（縄文中期末　弥生）土坑墓　土器棺墓　土坑　木柵跡　掘立柱建物跡　旧石器　縄文土器　石器　弥生土器 | 新都市開発 | 旧遺跡名：地蔵田Ｂ、国史跡 | 12 |
| 312 | 湯ノ沢Ｃ | 御所野元町七丁目 | 集落跡 | 縄文 | 竪穴建物跡（中期）土坑（中期　晩期）縄文土器　石器　石製品 | 新都市開発 | | 13 |
| 313 | 湯ノ沢Ａ | 御所野元町七丁目 | 集落跡 | 縄文・弥生 | 竪穴建物跡（縄文中期　弥生中期）土坑（縄文中期　弥生中期）土器埋設遺構　縄文土器　石器　弥生土器　土製品 | 新都市開発 | | 13 |
| 314 | 湯ノ沢Ｂ | 御所野湯本三丁目 | 集落跡 | 縄文・古代 | 竪穴建物跡（縄文中期　古代）土坑（縄文）縄文土器　土師器　須恵器　赤褐色土器 | 新都市開発 | | 15 |
| 315 | 野畑 | 御所野元町五丁目 | 集落跡 | 縄文 | 竪穴建物跡　土坑 | 新都市開発 | | 15 |
| 316 | 湯ノ沢Ⅰ | 御所野湯本四丁目 | 遺物包含地 | 弥生・古代 | 土坑　弥生土器　土師器　土錘 | 新都市開発 | | 12 |
| 317 | 湯ノ沢Ｅ | 御所野湯本六丁目 | 遺物包含地 | 縄文 | 土坑　組石遺構（後期）縄文土器（後・晩期）石器 | 新都市開発 | | 13 |
| 318 | 湯ノ沢Ｆ | 御所野湯本六丁目 | 墓跡 | 弥生・古代 | 土坑（弥生）土坑墓（古代）弥生土器　土師器　須恵器　赤褐色土器　鉄製品（馬具）鍔帯金具　隆平永宝　漆皮箱 | 新都市開発 | | 12･13 |
| 319 | 湯ノ沢Ｈ | 御所野湯本六丁目 | 遺物包含地集落跡 | 縄文・弥生 | 竪穴建物跡（縄文中期）竪穴状遺構　土坑　縄文土器　弥生土器　石器 | 新都市開発 | | 13 |
| 320 | 湯ノ沢Ｇ | 御所野湯本五丁目 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器（後期）石器 | 新都市開発 | | 13 |
| 321 | 古野館 | 上北手古野四枚田 | 館跡 | 中世 | 帯郭　空堀 | － | | 2 |
| 350 | 宝竜崎 | 上北手猿田字宝竜崎 | 遺物包含地 | 縄文・古代 | 縄文土器（前期）須恵器　石器 | － | | 3 |
| 363 | 古野 | 上北手古野字向老方 | 集落跡　遺物包含地 | 旧石器・縄文・弥生・古代・中世・近世 | 竪穴建物跡（縄文中期）土坑　掘立柱建物跡　旧石器　縄文土器　弥生土器　土師器　須恵器　中世陶器　近世陶磁器 | 秋田自動車道 | | 20 |
| 387 | 堂平 | 河辺諸井字山根 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器（中・後期）石斧　石匙　石棒 | － | 旧33-12 | 21 |
| 388 | 野田 | 河辺諸井字中道 | 遺物包含地 | 古代 | 土師器　須恵器　勾玉　管玉　石斧 | － | 旧33-13 | 21 |
| 389 | 和田城 | 河辺和田字岡村 | 館跡 | 中世 | 帯郭 | － | 旧33-14 | 21 |
| 390 | 堂ノ前 | 河辺北野田高屋畑ノ沢 | 遺物包含地 | 古代 | 須恵器（椀　壺） | － | 旧33-15 | 21 |
| 391 | 豊島館 | 河辺戸島字戸島 | 館跡 | 中世 | 空堀　帯郭　土塁　陶片　刀　人骨 | （県指定史跡） | 旧33-16 | 21 |
| 392 | 畑谷館 | 河辺畑谷字蟹沢 | 館跡 | 縄文・中世 | 空堀　土塁　縄文土器　石鏃 | － | 旧33-17 | 21 |
| 393 | 風無台Ⅰ | 河辺松渕字風無台 | 集落跡 | 旧石器・縄文・弥生 | 竪穴建物跡（縄文中期）掘立柱建物跡　土坑　Ｔピット　旧石器　縄文土器（前期　中期　後期　晩期）弥生土器 | 七曲工業団地 | 旧33-18 | 22 |
| 394 | 風無台Ⅱ | 河辺松渕字風無台 | 集落跡 | 旧石器・縄文・弥生 | 土坑（縄文晩期）竪穴建物跡（縄文弥生）土器埋設遺構　旧石器　縄文土器（晩期）弥生土器　石鏃　石匙等 | 七曲工業団地 | 旧33-19 | 22 |
| 395 | 風無台Ⅲ | 河辺松渕字風無台 | 遺物包含地 | 縄文 | フラスコ状土坑　剥片 | 七曲工業団地 | 旧33-20 | 22 |
| 396 | 風無台Ⅴ | 河辺松渕字風無台 | 遺物包含地 | 縄文 | 土坑　縄文土器（中期） | 七曲工業団地 | 旧33-21 | 22 |
| 397 | 石坂台Ⅰ | 河辺戸島字石坂台 | 集落跡 | 縄文 | 竪穴建物跡（中期）フラスコ状土坑　土坑　Ｔピット　土器埋設遺構　縄文土器（前期　中期　後期　晩期）石鏃　石斧　石匙　トランシェ様石器 | 七曲工業団地 | 旧33-22 | 22 |
| 398 | 石坂台Ⅱ | 河辺戸島字石坂台 | 集落跡 | 縄文 | 竪穴建物跡（中期）土坑　縄文土器　箆状石器 | 七曲工業団地 | 旧33-23 | 22 |
| 399 | 石坂台Ⅲ | 河辺戸島字石坂台 | 遺物包含地 | 縄文 | 土坑　Ｔピット　埋設土器　縄文土器（中期　後期　晩期）石鏃　石匙等 | 七曲工業団地 | 旧33-24 | 22 |
| 400 | 河辺松木台Ⅰ | 河辺松渕字松木台 | 遺物包含地 | 縄文・弥生 | 縄文土器（中期　後期）弥生土器　石鏃　石錐　石匙等 | 七曲工業団地 | 旧33-25 | 22 |
| 401 | 河辺松木台Ⅱ | 河辺松渕字松木台 | 遺物包含地 | 旧石器・縄文・古代 | 土坑（縄文　古代）石囲炉　埋設土器　配石　竪穴状遺構（古代）旧石器　縄文土器（晩期）須恵器　石鏃　石錘　石匙　石斧 | 七曲工業団地 | 旧33-26 | 22 |
| 402 | 餅田沢Ⅰ | 河辺松渕字餅田沢 | 遺物包含地 | 縄文 | 土坑　縄文土器　凹石　剥片等 | 七曲工業団地 | 旧33-27 | 22 |
| 403 | 餅田沢Ⅱ | 河辺松渕字餅田沢 | 集落跡 | 縄文 | 竪穴建物跡（中期）フラスコ状土坑　土坑　縄文土器（中～晩期） | 七曲工業団地 | 旧33-28 | 22 |

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 種別 | 時期 | 遺構・遺物 | 調査原因 | 備考 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 412 | 風無台Ⅳ | 河辺松渕字風無台 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器（中期）　剥片 | － | 旧 33-37 | 23 |
| 413 | 石坂台Ⅳ | 河辺戸島字七曲石坂台 | 遺物包含地 | 縄文・近代 | 土坑　Ｔピット　焼土遺構　縄文土器（前期　中期）等　炭窯（近代か） | 秋田自動車道 | 旧 33-38 | 24 |
| 414 | 石坂台Ⅴ | 河辺戸島字七曲石坂台 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器 | － | 旧 33-39 | 25 |
| 415 | 石坂台Ⅵ | 河辺戸島字七曲石坂台 | 遺物包含地 | 縄文・弥生 | 土坑　縄文土器（後期　晩期）　弥生土器　石鏃　石斧等 | 秋田自動車道 | 旧 33-40 | 24 |
| 416 | 石坂台Ⅶ | 河辺戸島字七曲石坂台 | 遺物包含地 | 縄文・近代 | 土坑　縄文土器（前期　後期　晩期）　石鏃等　炭窯（近代） | 秋田自動車道 | 旧 33-41 | 24 |
| 417 | 石坂台Ⅷ | 河辺戸島字七曲石坂台 | 集落跡 | 縄文・弥生 | 竪穴建物跡（縄文中期　後期）　土坑　焼土遺構　縄文土器（前期～晩期）　弥生土器等 | 秋田自動車道 | 旧 33-42 | 24 |
| 418 | 石坂台Ⅸ | 河辺戸島字七曲石坂台 | 集落跡 | 縄文 | 竪穴建物跡（中期）　土坑　縄文土器（中期～晩期）　石匙　石斧等 | 秋田自動車道 | 旧 33-43 | 24 |
| 419 | 河辺松木台Ⅲ | 河辺松渕字松木台 | 集落跡 | 旧石器・縄文・古代・近代 | 土坑墓群（縄文晩期）　竪穴建物跡（古代）　旧石器　縄文土器（前期～晩期）　土師器　須恵器　焼土遺構（近代） | 秋田自動車道・沿岸自動車道 | 旧 33-44 | 24･26 |
| 420 | 駒坂台Ⅰ | 河辺戸島字駒坂台 | 遺物包含地 | 縄文 | 土坑（時期不明）　縄文土器（前期　後期）　剥片等 | 七曲工業団地アクセス道路 | 旧 33-45 | 27 |
| 421 | 駒坂台Ⅱ | 河辺戸島字駒坂台 | 遺物包含地 | 縄文 | 土器埋設石組炉（後期）　組石遺構　縄文土器（前期～後期）　石鏃等 | 七曲工業団地アクセス道路 | 旧 33-46 | 27 |
| 422 | 上祭沢 | 河辺戸島字上祭沢 | 集落跡・塚 | 縄文・弥生・中世 | 竪穴建物跡（縄文中期）　塚（中世）等　縄文土器（早期　中期　後期）　弥生土器　石鏃等 | 七曲工業団地アクセス道路 | 旧 33-47 | 27 |
| 423 | 戸島上野Ⅰ | 河辺戸島字上野 | 集落跡 | 縄文・弥生・古代 | 竪穴建物跡（縄文後期　弥生　古代）　掘立柱建物跡等　縄文土器（後期）　弥生土器　土師器坏　甕　須恵器壺等 | 沿岸自動車道 | 旧 33-48 | 28 |
| 424 | 井戸尻台Ⅰ | 河辺戸島字井戸尻台 | 集落跡・塚 | 縄文・弥生・近世 | 竪穴建物跡（縄文中期）掘立柱建物跡（縄文後期）　塚（近世以降か）　縄文土器（中期～晩期）　土偶　弥生土器 | 沿岸自動車道 | 旧 33-49 | 29 |
| 425 | 井戸尻台Ⅱ | 河辺戸島字井戸尻台 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器　石匙 | － | 旧 33-50 | 30 |
| 426 | 岱Ⅰ | 河辺畑谷字岱 | 遺物包含地 | 縄文 | Ｔピット　土坑　縄文土器（中期）等 | 沿岸自動車道 | 旧 33-51 | 31 |
| 427 | 岱Ⅱ | 河辺畑谷字岱 | 集落跡 | 縄文 | 竪穴建物跡（中期）等　縄文土器（前期～後期）　石鏃　石斧　石匙 | 沿岸自動車道 | 旧 33-52 | 31 |
| 428 | 岱Ⅲ | 河辺畑谷字岱 | 集落跡 | 縄文・弥生・古代 | 竪穴建物跡（縄文　古代）　縄文土器（前～晩期）　弥生土器　土師器　環状石斧 | 沿岸自動車道 | 旧 33-53 | 31 |
| 429 | 蟹沢Ⅰ | 河辺畑谷字蟹沢 | 遺物包含地 | 縄文・古代 | 土坑　焼土遺構　縄文土器　土師器 | － | 旧 33-54 | 32 |
| 430 | 戸島上野Ⅱ | 河辺戸島字上野 | 遺物包含地 | 縄文 | 土坑　縄文土器 | － | 旧 33-55 | 30 |
| 431 | 大堤山 | 河辺戸島字大堤山 | 遺物包含地 | 古代 | 溝跡　土師器 | － | 旧 33-56 | 30 |
| 433 | 虚空蔵大台滝 | 河辺豊成字虚空蔵大台滝 | 居館跡　墓地 | 縄文・古代・中世 | 土塁　堀跡　溝跡　柵跡　切岸　掘立柱建物跡　竪穴建物跡（以上古代）　土坑墓（中世）　縄文土器　土師器　かわらけ | 空港アクセス道路 | 旧 33-58 | 33 |
| 434 | 薬師沢 | 河辺北野田高屋字薬師沢 | 遺物包含地 | 中世 | 中世陶器 | － | 旧 33-59 | 21 |
| 435 | 七曲台 | 河辺戸島字七曲 | 遺物包含地 | 縄文・弥生 | 縄文土器　弥生土器 | － | 旧 33-60 | 21 |
| 436 | 東沢Ⅰ | 河辺松渕字東沢 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器 | － | 旧 33-61 | 21 |
| 437 | 東沢Ⅱ | 河辺松渕字東沢 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器 | － | 旧 33-62 | 21 |
| 438 | 和田上野 | 河辺和田字上野 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器 | － | 旧 33-63 | 21 |
| 444 | 山崎山 | 雄和田草川字山崎山 | 遺物包含地 | 古代 | 須恵器 | － | 旧 34-1 | 21 |
| 445 | 長者屋敷 | 雄和椿川字長者屋敷 | 遺物包含地 | 縄文・古代 | 縄文土器　石器　須恵器 | － | 旧 34-2 | 21 |
| 448 | つばき川館 | 雄和椿川字館の下 | 館跡 | 縄文 | 縄文土器　石器 | － | 旧 34-5 | 21 |
| 449 | 地張山 | 雄和椿川字地張山 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器　石器 | － | 旧 34-6 | 34 |
| 450 | 関田 | 雄和椿川字関田 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器 | － | 旧 34-7 | 34 |
| 451 | 堤根 | 雄和椿川字堤根 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器 | － | 旧 34-8 | 34 |
| 475 | 奥椿岱 | 雄和椿川字奥椿岱 | 集落跡 | 縄文 | 竪穴建物跡（中期）　土坑　焼土遺構　Ｔピット　集石遺構　柱穴　縄文土器（中～晩期） | 空港アクセス道路 | 旧 34-32 | 35 |
| 476 | 滝の沢Ⅰ | 雄和椿川字滝の沢 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器（前期　晩期）　石鏃　石箆　石錐 | 県立中央公園 | 旧 34-33 | 36 |
| 477 | 滝の沢Ⅱ | 雄和椿川字滝の沢 | 遺物包含地 | 縄文・近代 | 縄文土器（後期）　石箆　炭窯（近代） | 県立中央公園 | 旧 34-34 | 36 |
| 478 | 駒坂袋Ⅰ | 雄和椿川字駒坂袋 | 集落跡　遺物包含地 | 旧石器・縄文 | 旧石器　竪穴建物跡（縄文中期）　土坑　縄文土器 | 県立中央公園 | 旧 34-35 | 36 |
| 479 | 駒坂袋Ⅱ | 雄和椿川字駒坂袋 | 集落跡 | 縄文 | 竪穴建物跡　土坑　縄文土器（晩期） | 県立中央公園 | 旧 34-36 | 36 |
| 480 | 軽井沢Ａ | 雄和椿川字軽井沢 | 遺物包含地 | | | － | 旧 34-37 | 25 |
| 481 | 軽井沢Ｂ | 雄和椿川字軽井沢 | 遺物包含地 | 縄文 | 石器 | － | 旧 34-38 | 25 |
| 482 | 軽井沢Ｃ | 雄和椿川字軽井沢 | 遺物包含地 | 縄文 | Ｔピット　縄文土器 | － | 旧 34-39 | 25 |
| 484 | 大又 | 雄和田草川字大又 | 遺物包含地 | 古代 | 土師器 | － | 旧 34-41 | 21 |
| 485 | 船ヶ沢 | 雄和田草川字船ヶ沢 | 遺物包含地 | 古代・中世 | 土師器　中世陶器 | － | 旧 34-42 | 21 |
| 486 | 鹿野戸谷地 | 雄和椿川字鹿野戸谷地 | 遺物包含地 | 縄文・古代 | 縄文土器　土師器 | － | 旧 34-43 | 37 |
| 499 | 山崎山Ⅱ | 雄和田草川字山崎山 | 遺物包含地 | 縄文 | 縄文土器　掻器　剥片 | － | 旧 34-56 | 32 |

番号は秋田市の遺跡登録番号に対応する。台帳上では冒頭に 1- が付き、514 は 1-514 である。
網掛けは、発掘調査（分布・確認調査を除く）が実施された遺跡を指す。
備考の数字は、旧河辺町・旧雄和町の遺跡番号を示す。33 は河辺町、34 は雄和町。

和田村
20.13
わだ
宝川古道
梵字川
網掛け部は上図を基に作成した遺跡推定範囲
下図は上図の範囲をそのまま現在の地形図に合成作図
(熊野神社)
(陽田寺)
和田公園
20.2
国道 13 号
近世羽州街道
奥羽本線
和田駅
わだ
1/25,000「和田」を 400％拡大（上図：大日本帝国陸地測量部 大正元年測量、同 3 年発行。下図：国土地理院平成 8 年改測）
0
250m

第4図　遺跡範囲図

# 第３章　発掘調査の概要

## 第１節　遺跡の概観

黒沼下堤下館跡の位置する和田丘陵地東側は、岩見川とその支流梵字川に挟まれており、両河川の流下方向である西～南西側に丘陵南端部が細く収束する地勢を示す。遺跡は西～南西を向く丘陵末端部に立地する。

平成20年の分布調査、翌年の確認調査と本調査時に実施した地形観察と測量によって、遺跡は丘陵端部の約50,800㎡の広がりをもつことが推測された。それは確認調査時の成果と丘陵斜面部で確認された階段状の人工地形（段築＝帯曲輪状の狭い平坦面・削平地）の観察された範囲、及び現況地形から線引きしたものである。規模は東西約430m、南北130 ～ 200mである。遺跡の中央には現在国道13号が東西に貫通しているが、これは昭和38年に遺跡丘陵地を開削して建設されたものである。

国道の南側は旧河辺町和田公園として利用され、桜の名所としても知られる。和田公園側にも段築が北・西・南側斜面で観察されるが、公園や神社・公共施設（旧河辺町中央児童館）・宅地造成等に伴い大規模な土地改変を受けている。頂部平坦面の南側縁辺部には一部に土塁状の高まりが認められるが、複数の聞き取り調査によって、これは公園造成に伴い削土を免れた箇所であることが判明した。土塁状の高まりは1.6m程であることから、現況の頂部平坦面での標高45mは、あくまでも土地改変後の数値であることを念頭におく必要がある。なお、和田公園側最西端部にも明瞭な段築がみられるが、段築下の低地を挟んだ西側にも小さな独立丘状の地形（現在墓地として利用、付図に「独立丘」として表示）が観察される。低地部が堀であった可能性も考えられる。

国道の北側は今回の調査区（4,650㎡）を含む箇所であり、面積は約20,000㎡である。ここは、和田公園側から連続する西側丘陵部と沢を挟んだ東側丘陵部からなる。西側丘陵部は東向き斜面と西向き斜面に段築が明瞭に観察され、一方の東側丘陵部では段築は全く認められない。現況は西側丘陵部頂部が雑種地（旧畑地）、その他は赤松が混在する山林（杉林）あるいは原野である。

調査対象区は東西丘陵部（頂部平坦面と斜面部）と間の沢部が含まれる。以下、遺構と遺物の報告にあたり、便宜的に調査区をＡ～Ｆ区に分けて記述する。

Ａ区：西側丘陵頂部平坦面、標高45 ～ 46m。

Ｂ区：西側丘陵西向き斜面部、標高30 ～ 45m。段築は上位からＢ１・Ｂ２・Ｂ３段･･･とする。

Ｃ区：西側丘陵東向き斜面部、標高35 ～ 45m。段築は上位からＣ１・Ｃ２・Ｃ３段･･･とする。

Ｄ区：東側丘陵頂部平坦面、標高42 ～ 43m。

Ｅ区：東側丘陵西向き斜面部、標高35 ～ 42m。

Ｆ区：Ｃ・Ｅ区に挟まれた沢部、標高32 ～ 35m。

なお、調査は工事による削平箇所全域（4,650㎡）を対象としているが、Ｂ区については急傾斜地であること、一部に大規模な地滑りの痕跡が観察され、作業の安全確保の観点から掘り下げを伴う地区は限定された。すなわち、段築部の平面観察と地形図作成後の掘り下げを伴う地区は、Ｂ１段全域とＢ２～Ｂ４段部については１本のトレンチを設定して実施した。

第5図　西側丘陵部全域の段築と調査区

## 第２節　調査の方法

### １　発掘調査

発掘調査は対象地区内にグリッドを設定して実施した。基点は西側丘陵頂部平坦面（Ａ区）南端に設置されていた道路工事用境界杭（Ｂ-17）をグリッド原点とした。原点には国家座標（世界測地系平面直角座標第Ｘ系、Ｘ＝－38248.410、Ｙ＝－52551.686）が与えられていたので、これを利用し、原点を通る座標系の南北方向に南北基線と、これに直交する東西基線を設定した。両基線に平行する４ｍ毎の線の交点には方眼杭を打設して４ｍ×４ｍのグリッドを組んだ。原点を通る南北線をＭＡ、東西線を50とし、南北線はアルファベット２文字の符号を東から西に昇順となるように（ＭＡ、ＭＢ、ＭＣ･･･)、東西線は２桁数字で南から北に昇順となるように（50、51、52･･･）それぞれ付した。グリッドの呼称は、各グリッドの南東隅の方眼杭の記号（原点はＭＡ50グリッド）を用いた。方眼杭のうち５本には遺跡付近の水準点から標高を移動した。なお、これら一連の作業は委託業務で実施した。

遺構は検出順に種別を示す記号と通し番号を付した。精査の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。遺構精査は、遺構プラン確認時の観察と写真撮影後、二分法あるいは四分法により掘り下げを行った。土層観察が可能となった段階で写真撮影と断面図作成、土層注記を行い、完掘した。なお、径の小さい柱穴等はプラン確認面での観察と土層注記後に完掘したものもある。完掘後には写真撮影と平面図を作成した。図面は原則として1/20縮尺で作図し、平面図はグリッド杭を基準とした簡易遣り方測量により作成した。

出土遺物は、原則として種別・遺構内外を問わず一連の番号を付して平面位置、レベルを計測し、グリッド・層位・出土年月日を記入して取り上げた。

写真撮影は、アナログカメラ（35㎜モノクロ･リバーサルフィルム）とデジタルカメラを使用した。前者はデータの長期保存、後者はデータの保存と共に報告書掲載・一般公開用を意識して撮影を行った。航空写真は、ラジコン・ヘリコプター（ヤンマー製）に搭載した６×７判アナログカメラ（モノクロ）と2100万画素のデジタルカメラで撮影を行った。これは委託業務で実施した。

### ２　室内整理

野外調査で作成した図面を第１原図として、平面図と断面図の整合及び遺物の平面・垂直分布の描出を行った調製図を第２原図とした。本書に掲載した挿図は、この第２原図をトレースしたものである。

遺物は、洗浄・注記、接合、個別観察を行った後、報告書に記載する遺物の選別を行い、拓本・実測を行った。遺物の写真撮影は、デジタルカメラで実施した。

竪穴建物跡内（SI04）から採取した土壌試料と近世墓出土の人骨については、委託業務により分析を行い、これは第５章にまとめて報告する。

## 第３節　調査の経過

本調査は、６月14日から10月15日の実働81日をかけて実施した。以下は発掘調査日誌からの抜粋である。なお、日誌記載後に判明した事項については〔　　〕内に追記した。

６月14日、調査開始。作業員休憩棟（プレハブ）の整備後に西側丘陵頂部から下草刈り・除去作業に入る。15日、頂部の下草刈りを終了し、調査前写真撮影。16日、作業員の安全確保の観点から調査区内に木製の仮設階段を設置。21日、Ａ・Ｂ区より粗掘り開始。Ａ区北側で現代の畑畝跡あり。22日、Ａ区表土は浅く、15㎝程で地山に達する箇所あり。23日、粗掘り、Ａ区、Ｃ区１段目に入る。25日、Ａ・Ｂ区ジョレンがけ遺構検出作業。28日、Ｃ区で人頭大の礫４個が一定間隔で配置、平坦面ではなく、緩斜面部で検出。表土直下であり、意図的な配置とみられるが時期も不明〔→SQ01〕。29日、Ｃ区SQ01配石平面図（1/10）作成。30日、Ｅ区南東側、沢部との交点付近で鉄滓１点出土。

７月１日、Ｃ区３段目と４段目の法面（第Ⅱ層盛土層）から椀形鍛冶滓（半割）と土師器甕出土。２日、焼土遺構検出（SN02）周辺から炭化物・鉄滓出土→南側で壁の立ち上がり、鍛冶工房か〔→SI02〕。Ａ区中央部に新たな焼土遺構（SN04）あり〔→SI04カマド〕。６日、SN04は、周囲から竪穴南東コーナーを検出。SN02同様に単なる焼土遺構ではなく、鍛冶関連工房となる竪穴建物跡であったと判断。ここから土師器甕片が出土しており、古代（10世紀代）の構築か。７日、SI04の南側に別の遺構あり、プラン不鮮明〔→SI04の掘立柱建物部〕。８日、SI04竪穴コーナー部に長さ５～６㎝程の細長い10数点の川原石あり、規格性が強く意図的に集めたものか。９日、SI04カマド精査。14日、D・E区粗掘りに入る。15日、Ｃ区最上段南側で竪穴状の遺構あり、SI05とする〔→SI05Ｃ〕。16日、SI05精査開始、土師器出土。20日、SI05精査、フイゴ羽口出土。21日、SK08はフラスコ状を呈する。22日、Ａ区遺構精査、図面作成。23日、Ｅ・Ｆ区第Ⅱ層以下掘り下げ。26日、SK06 掘り下げ、土層図・写真。SK08完掘・写真・平面図。SI04周辺精査。27日、SI05完掘。SI04内・周辺精査、SK06完掘・写真・平面図。

８月２日、Ａ・Ｃ区完掘写真撮影、のち補足調査。SI04南側に竪穴らしきプランはあるが、いまだ不明瞭。３日、SI05平面図作成。４日、Ｃ区最上段、柱穴列精査〔→SA13〕。５日、Ａ区平面図完了、精査完了。Ｃ－１区精査完了。18日、SQ01の配石が南側でも１個確認され、２間×１間となる可能性もある。19日、Ｃ－６区の段築は、近代以降の盛土整地か。24日、Ｅ区斜面中位、第Ⅱ層（黒褐色土）下より縄文土器数点出土、後期か。

９月３日、Ｅ区掘り下げ継続、石匙（縦形）出土。10日、Ｄ・Ｅ区遺構検出作業。22日、埋蔵文化財センター職員研修会を本遺跡で開催。24日、SI04カマド周辺土から炭化米が出土していることが判明。27日、Ｄ・Ｅ区遺構検出作業、ベルトコンベアー撤収。30日、Ｄ・Ｅ区遺構検出作業、Ｆ区掘り下げ、Ｅ区遺構掘り下げ。

10月１日、遺跡の空中写真撮影。SK16・17・19は近世墓であることが判明。SK16では頭蓋骨とワッシャー状の無文銭〔→銭ではない〕出土。２日、遺跡現地見学会開催、120名来跡。４日、Ｃ区の段築1/100平面図作成。６日、SK19は銭貨なく人骨と鉄釘２点のみ。SK16 底面から曲物底板とその上から銭貨出土。SK15底面から銭貨５枚出土。７日、SK21・22遺物出土状況写真、SK21・24完掘写真、SK16・17・19完掘写真、Ｄ・Ｅ区ピット群平面図。Ｃ区南辺、基本土層作成のため、地山面まで掘り下げを開始。Ｂ区、幅２ｍの東西トレンチを設定し掘り下げ開始。12日、Ａ～Ｃ区基本土層図作成。Ｂ区トレンチ掘り下げ。13日、Ｂ区トレンチ掘り下げ完了。14日、Ｂ区トレンチ土層図作成。撤収作業、仮設階段撤去、機材を回収。15日、撤収作業、本日で野外調査終了。

# 第４章　調査の記録

## 第１節　基本層序

遺跡の基本層序は、Ａ区南端での土層観察をもとに表示する。観察地点は第10図を、基本土層図は第８図に掲載した。

第Ⅰ層　にぶい黄褐色（10YR4/3）表土、旧耕作層。層厚５～10㎝。

第Ⅱ層　暗褐色（10YR3/3）シルト質土。層厚10㎝前後。

第Ⅲ層　黒褐色（10YR2/3）シルト質土層。層厚５～10㎝。

第Ⅳ層　暗褐色（10YR3/4）シルト質土と砂質粘土の混合層、地山漸移層。層厚５～10㎝。

第Ⅴ層　黄褐色（10YR5/6～5/8）砂質粘土層、地山。深掘り箇所での観察では、同層中には小礫の混入が多く認められる（Ⅴa層：にぶい黄褐色10YR5/3)、砂質土の混入割合が比較的低く土色が黄褐色を呈する（Ⅴb層:黄褐色10YR5/6～5/8､調査区内で広く分布､基本層序第Ⅴ層を代表して表示)、砂質土の混入割合が比較的高く灰色かがる（Ⅴc層：灰黄褐色10YR5/2～6/2)。また、同層中には鉄分を多く含む細い帯状の堆積層（Ｆ）も観察される。

基本土層は、Ａ区以外でもほぼ同様の堆積状況を示すが、調査箇所によっては第Ⅱ層あるいは第Ⅲ層が欠落するところもある。また、Ｂ・Ｃ区の段築部では第Ⅱ～Ⅳ層が削土されており、第Ⅲ～Ⅴ層上には盛土層（Ｍ）が観察される。

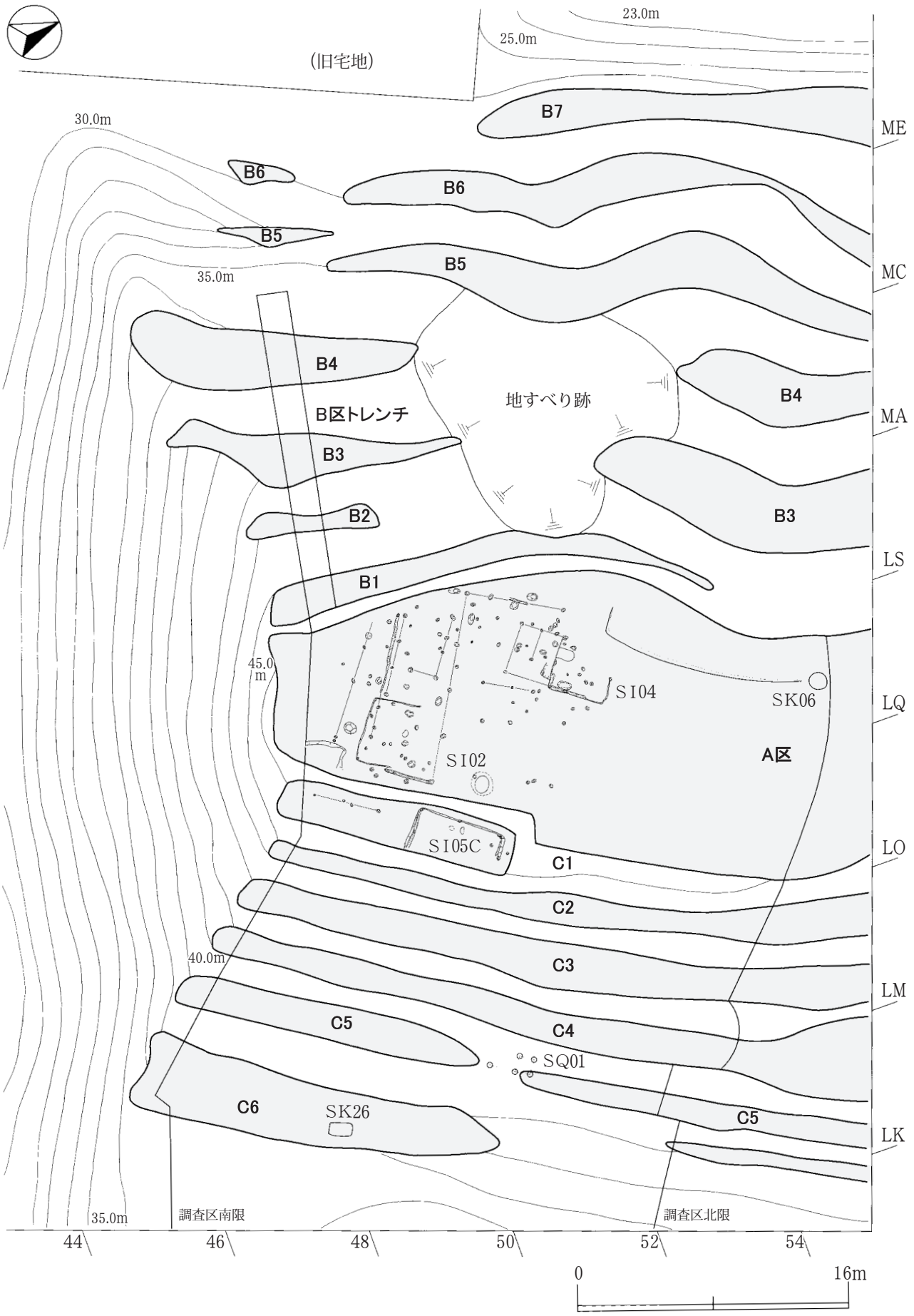
## 第２節　検出遺構と出土遺物

調査の結果、検出及び精査された遺構は、段築10か所（Ｂ・Ｃ区)、竪穴建物跡３棟、掘立柱建物跡１棟、柱列10条、テラス状遺構１基、焼土遺構２基、土坑15基、配石遺構１基の計43遺構である。その他に掘立柱建物跡や柱列として把握のできなかった柱穴群がある。なお、Ａ区のほぼ全域、Ｃ２・Ｃ３段の北側では表土直下層から畑畝跡（畝間幅50㎝前後、溝の幅20～30㎝）が検出されたが、出土遺物や聞き取り調査から、これらは昭和30年代まで耕作が行われていた畑であったことが判明した。その報告は省略する。

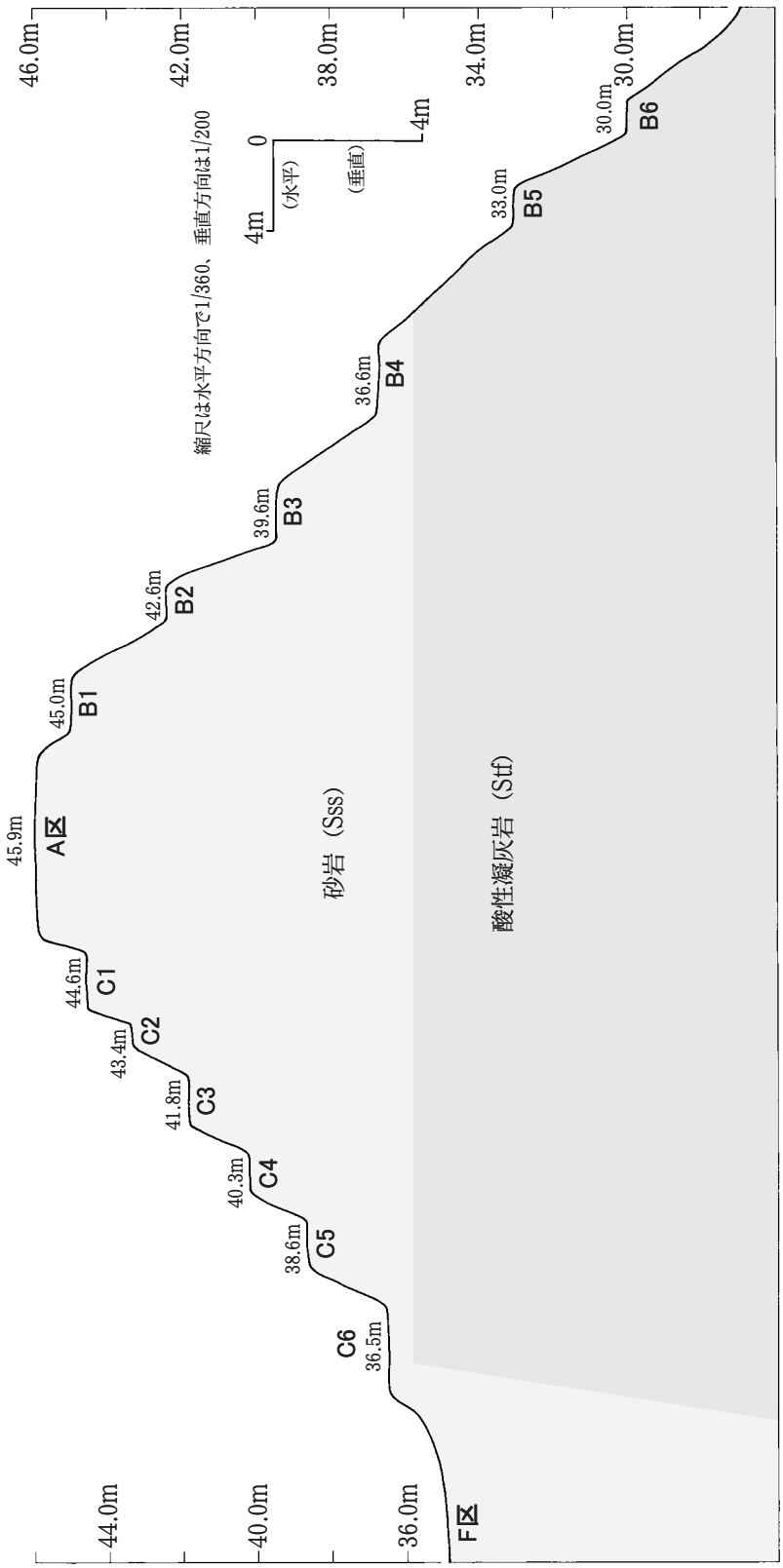
出土遺物は、縄文土器・石器・剥片、土師器・羽口・鉄製品・鉄滓、陶磁器・青銅製品・銭貨（寛永通寶等)・人骨等、近代以降の陶磁器類である。

構築時期の明確な遺構は検出状況と出土遺物等から、竪穴建物跡が古代、土坑のうち６基は近世墓（江戸時代）であり、土坑１基（Ａ区SK03）と配石遺構は近代以降である。その他の遺構は不明確であるが、Ａ・Ｃ区の柱列、焼土遺構は古代の構築である可能性が高い。また、遺物は認められないものの、土坑のうち少なくとも１基（Ａ区SK08）は縄文時代の構築と推測される。

段築については構築時期を特定することはできなかったが、Ａ区に隣接するC1段は古代における削平とみられ、同最下位のC6段は現代の畑地造成に伴う盛土であることが確かめられた。

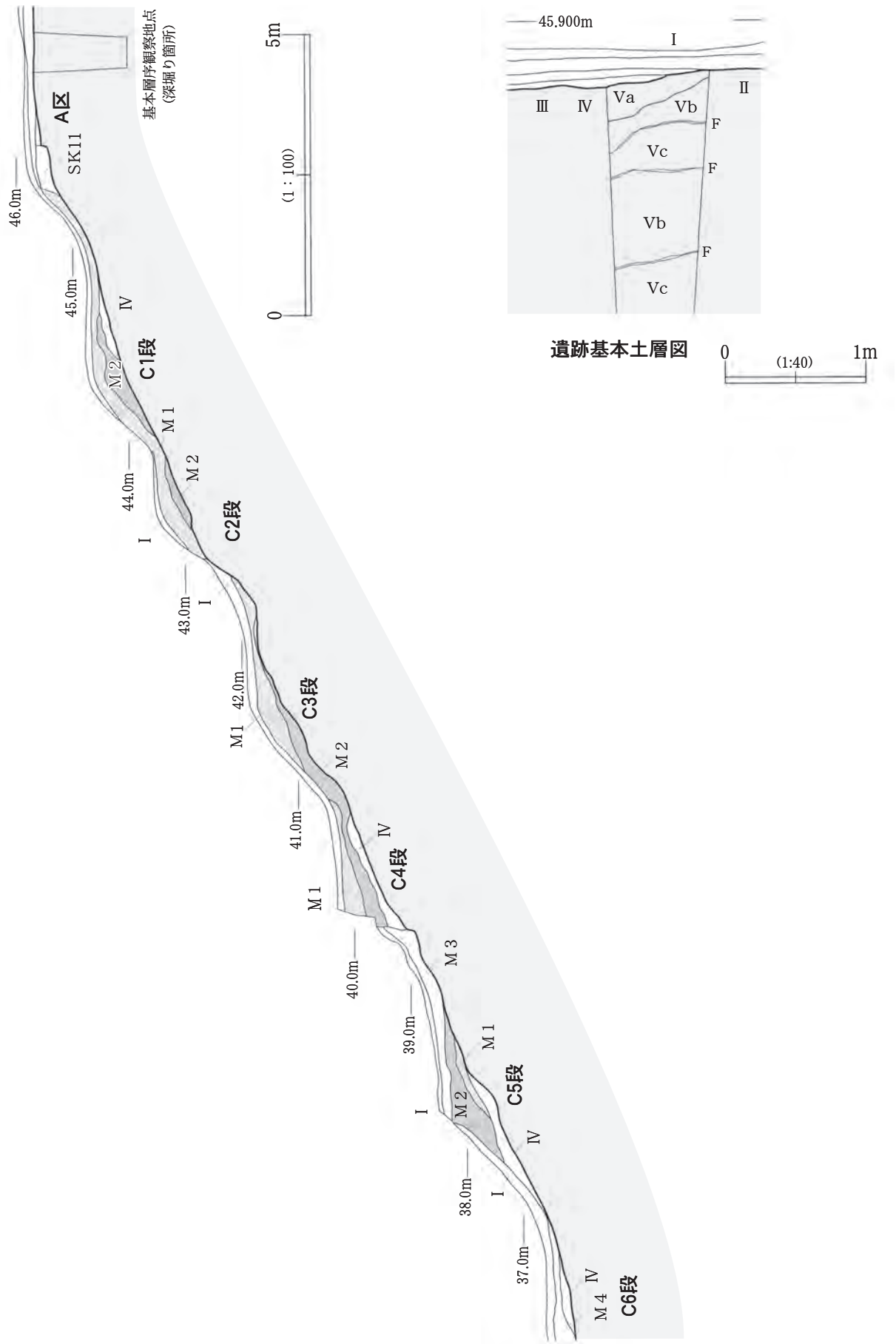



第6図　西側丘陵部調査区周辺の段築と遺構配置図

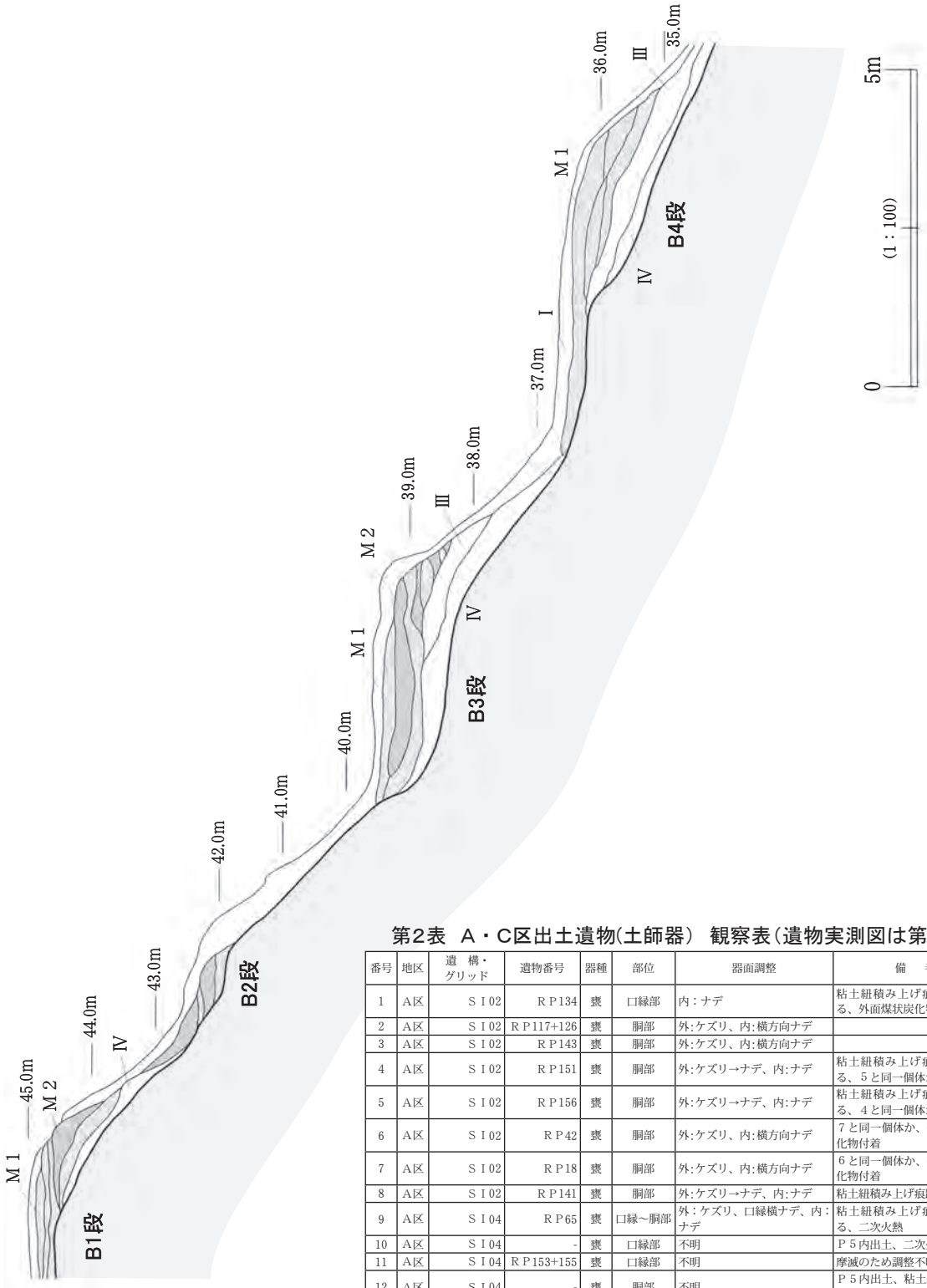



第７図　西側丘陵部調査区周辺の段築エレベーション図

【地質図補足】発掘調査後に実施された道路工事により、調査区が大規模に削平されたが、これによって現れた露頭を観察することで次のことが明らかとなった（第 24 図写真参照）。基盤である笹岡層の酸性凝灰岩（Ｓｔｆ）の分布は、西側丘陵部の標高役 35m ライン以下で明瞭に確認された。それ以外では同じ笹岡層の砂岩（Ｓｓｓ）が広域に認められた。上図には分布の状況を模式的に図示した。




第8図　遺跡基本土層図・西側丘陵部東向き斜面部（C区）の段築部土層図




第９図　西側丘陵部西向き斜面部（Ｂ区）の段築部土層図

第２表　Ａ・Ｃ区出土遺物(土師器)　観察表（遺物実測図は第16図）

| 番号 | 地区 | 遺　構・グリッド | 遺物番号 | 器種 | 部位 | 器面調整 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | Ａ区 | ＳＩ02 | ＲＰ134 | 甕 | 口縁部 | 内：ナデ | 粘土紐積み上げ痕跡明瞭に残る、外面煤状炭化物付着 |
| 2 | Ａ区 | ＳＩ02 | ＲＰ117+126 | 甕 | 胴部 | 外:ケズリ、内:横方向ナデ | |
| 3 | Ａ区 | ＳＩ02 | ＲＰ143 | 甕 | 胴部 | 外:ケズリ、内:横方向ナデ | |
| 4 | Ａ区 | ＳＩ02 | ＲＰ151 | 甕 | 胴部 | 外:ケズリ→ナデ、内:ナデ | 粘土紐積み上げ痕跡明瞭に残る、５と同一個体か |
| 5 | Ａ区 | ＳＩ02 | ＲＰ156 | 甕 | 胴部 | 外:ケズリ→ナデ、内:ナデ | 粘土紐積み上げ痕跡明瞭に残る、４と同一個体か |
| 6 | Ａ区 | ＳＩ02 | ＲＰ42 | 甕 | 胴部 | 外:ケズリ、内:横方向ナデ | ７と同一個体か、外面に煤状炭化物付着 |
| 7 | Ａ区 | ＳＩ02 | ＲＰ18 | 甕 | 胴部 | 外:ケズリ、内:横方向ナデ | ６と同一個体か、外面に煤状炭化物付着 |
| 8 | Ａ区 | ＳＩ02 | ＲＰ141 | 甕 | 胴部 | 外:ケズリ→ナデ、内:ナデ | 粘土紐積み上げ痕跡あり |
| 9 | Ａ区 | ＳＩ04 | ＲＰ65 | 甕 | 口縁～胴部 | 外：ケズリ、口縁横ナデ、内：ナデ | 粘土紐積み上げ痕跡明瞭に残る、二次火熱 |
| 10 | Ａ区 | ＳＩ04 | - | 甕 | 口縁部 | 不明 | Ｐ５内出土、二次火熱 |
| 11 | Ａ区 | ＳＩ04 | ＲＰ153+155 | 甕 | 口縁部 | 不明 | 摩滅のため調整不明 |
| 12 | Ａ区 | ＳＩ04 | - | 甕 | 胴部 | 不明 | Ｐ５内出土、粘土紐積み上げ痕跡明瞭に残る、二次火熱 |
| 13 | Ａ区 | ＳＩ04 | - | 甕 | 底部 | 外:ケズリ→ナデ、内:ナデ | カマド東側床面出土 |
| 14 | Ａ区 | ＳＮ05Ａ・Ｂ | ＲＰ119 | 甕 | 口縁部 | 不明 | 二次火熱を受け、器面調整不明 |
| 15 | Ｃ区 | ＬＬ51 | ＲＰ163 | 坏 | 体部 | 外:ナデ、内:ナデ→黒色処理 | |
| 16 | Ｃ区 | ＬＯ54 | - | 甕 | 口縁部 | 外:ナデ、内:ナデ | |
| 17 | Ａ区 | ＬＲ55 | ＲＰ100 | 甕 | 口縁部 | 外:ナデ、内:ナデ | 折り返し口縁 |
| 18 | Ｃ区 | ＬＭ51 | ＲＰ158 | 甕 | 口縁部 | 外:ケズリ→ナデ、内:ナデ | 二次火熱 |
| 19 | Ｃ区 | ＬＭ51 | ＲＰ158 | 甕 | 胴部 | 外:ケズリ→ナデ、内:ナデ | 18と同一個体か |
| 20 | Ａ区 | ＬＯ54 | ＲＰ108 | 甕 | 胴部 | 外:ケズリ→ナデ、内:ナデ | |
| 21 | Ｃ区 | ＬＰ48 | - | 甕 | 胴部 | 外:ケズリ→ナデ、内:ナデ | |
| 22 | Ｃ区 | Ｃ３段 | 確認調査 | 甕 | 胴部 | 外:ケズリ→ナデ、内:ナデ | 平成21年の確認調査時に出土 |
| 23 | Ｃ区 | ＬＱ48 | - | 甕 | 胴部 | 外:ケズリ→ナデ、内:ナデ | |
| 24 | Ｃ区 | ＬＱ49 | ＲＰ140 | 甕 | 胴部 | 外:ケズリ→ナデ、内:ナデ | |
| 25 | Ｃ区 | 表採 | - | 甕 | 胴部 | 外:ケズリ→ナデ、内:ナデ | |
| 26 | Ｃ区 | ＬＯ52 | - | 甕 | 底部 | 外:ケズリ→ナデ、内:ナデ | 二次火熱 |

１　段築部（Ｂ・Ｃ区）の様相

（１）西側丘陵西向き斜面部（Ｂ区）

Ｂ区では６～７段の段築が観察されたが、調査対象区内には大規模な地滑り地形も認められること、宅地造成に付帯する庭木等の植林に伴う地形改変が部分的に認められ、段築形成時と様相が異なる可能性も高い。各段築の調査前における規模・段差は次のとおりである。

Ｂ１段：平坦面の幅1.8～2.0m、上位面（Ａ区）との段差0.9m。

Ｂ２段：平坦面の幅1.0～1.6m、上位面（Ｂ１段）との段差2.4m。

Ｂ３段：平坦面の幅1.6～3.2m、上位面（Ｂ２段）との段差3.0m。

Ｂ４段：平坦面の幅2.4～3.8m、上位面（Ｂ３段）との段差4.5m。

Ｂ５段：平坦面の幅3.0m前後、上位面（Ｂ４段）との段差3.6m。平面観察と地形図作成のみ。

Ｂ６段：平坦面の幅2.2～2.8m、上位面（Ｂ５段）との段差3.0m。平面観察と地形図作成のみ。

段築の土層堆積状況を確認するためにＢ１段からＢ４段にかけて、幅２m、長さ19.2mのトレンチを東西に設定した。トレンチ南面壁（国道寄り）での観察により、段築を構成する盛土は、大きく地山粘土を主とする黄褐色系盛土（Ｍ１）とシルト質土を主とする黒褐色系盛土（Ｍ２）の２種類に分けられる。Ｂ４段ではＭ２の上位にＭ１を積み上げているが、Ｂ１～Ｂ３段ではＭ１とＭ２を互層に積み上げ、平坦面を造りだしている（図版４参照）。

（２）西側丘陵東向き斜面部（Ｃ区）

Ｃ区では６段の明瞭な段築（Ｃ１～Ｃ６段）が確認された。各段築の調査前における規模・段差は次のとおりである。

Ｃ１段：平坦面の幅1.8～2.3m、上位面（Ａ区）との段差1.05m。

Ｃ２段：平坦面の幅1.5～1.6m、上位面（Ｃ１段）との段差1.25m。

Ｃ３段：平坦面の幅2.0～2.3m、上位面（Ｃ２段）との段差1.65m。

Ｃ４段：平坦面の幅1.5～2.6m、上位面（Ｃ３段）との段差1.55m。

Ｃ５段：平坦面の幅2.0～2.3m、上位面（Ｃ４段）との段差1.70m。

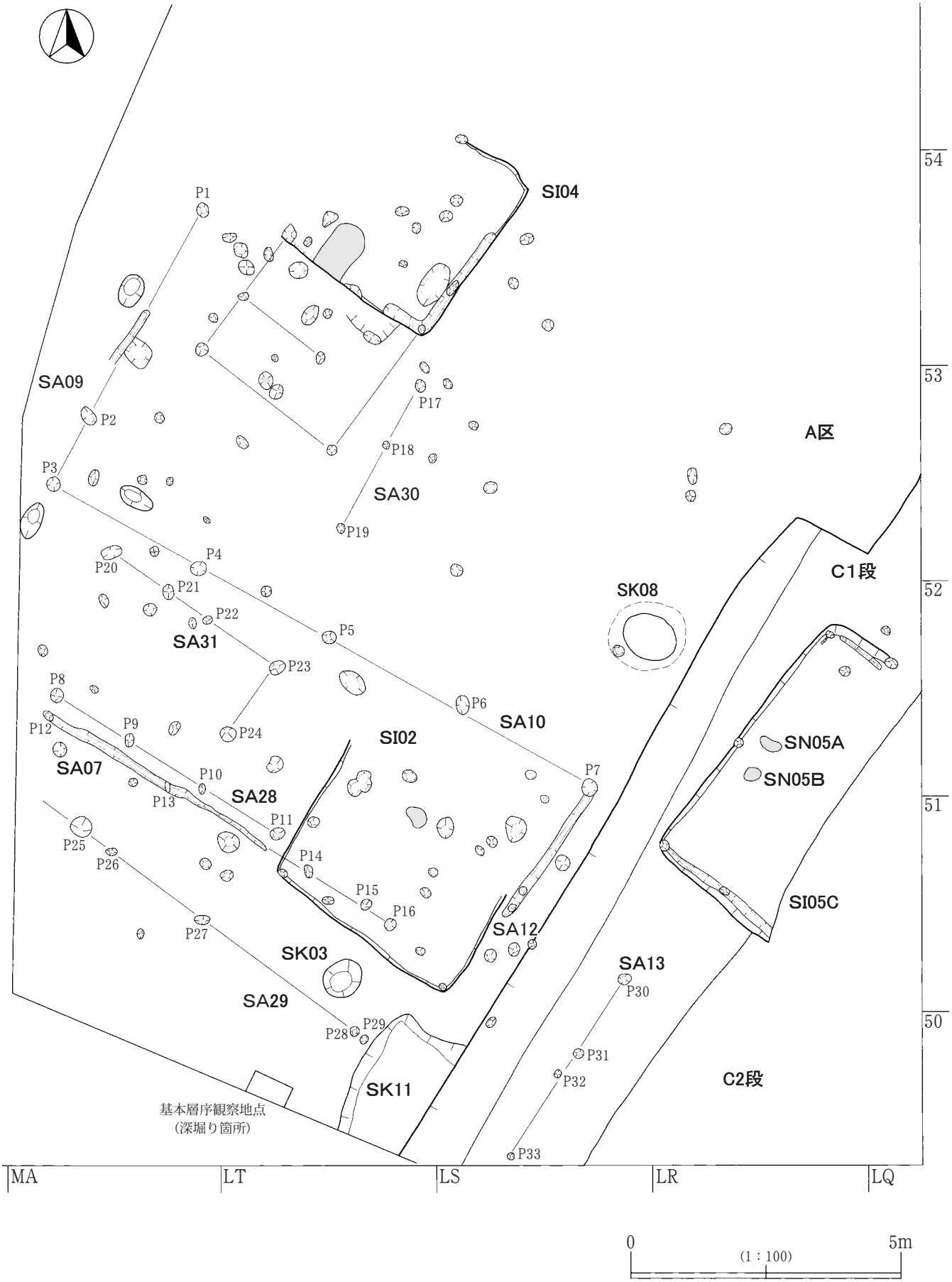
Ｃ６段：平坦面の幅3.0～4.2m、上位面（Ｃ５段）との段差1.85m。

段築の断ち割り箇所（Ｃ区南端、国道寄り、北西－南東方向）での観察により、段築を構成する盛土は、Ｃ１～Ｃ４段についてはシルト質土を主とする黒褐色系盛土（Ｍ２）の上位に地山粘土を主とする黄褐色系盛土（Ｍ１）を積み上げている。これはＢ区（Ｂ１～Ｂ３段）のように２種の盛土（Ｍ１・２）を互層に積み上げる手法とは異なる。盛土の厚は、0.5～0.7m程度である。Ｃ５段は盛土Ｍ１の上位にＭ２が積み上げられ、Ｃ１～Ｃ４段とは逆の盛土手法となる。さらに、Ｃ５段にはＭ２上部にＭ３盛土が認められるが、これは現代の畑耕作に伴い、上位のＣ４段盛土層を削土したものとみられる。また、Ｃ６段は断ち割りを含む精査の結果、畑地造成に伴い現代において形成されたことが判明し、いわゆるＣ１～Ｃ５段と同格に扱うことはできない。

２　西側丘陵部（Ａ～Ｃ区）の遺構と遺物

（１）西側丘陵頂部平坦面（Ａ区）

西側丘陵頂部平坦面は、現況で北東－南西方向の長さ約35m、幅約８～14mの略長方形を呈する。




第10図　西側丘陵部頂部平坦面（A区）南側の遺構配置図

この面は和田公園側に細長く連続していたが、国道建設により失われている。調査前における標高は南西端部で45.9m、対する北東端部では44.8mであり、ほぼ平坦ではあるものの北東方向に傾斜をもつ。ここでは竪穴建物跡２棟、柱列８条、土坑４基、掘立柱建物跡あるいは柱列として把握のできなかった柱穴群が検出された。

**①SI02竪穴建物跡**（第11図、第16図１～８、図版５）

Ａ区南東部で検出された。掘り込みは北東側壁面を除く３面を確認した。ＳＡ07柱列（P24～P26）と重複し、これに切り込まれている。規模は、北西－南東方向で3.9m、直交する北東－南西方向は北西側壁面の現況での長さ2.8mである。堆積土は炭化物をやや多く含む褐色（10YR4/6）を呈する砂質粘土で人為的に埋められている。確認面から床面までの深さは0.2mである。

床面上には焼土面、小土坑（Ｐ１）、柱穴が認められるが、壁溝はない。焼土は現存する床面中央よりやや北東側に位置し、長さ0.45m、幅0.35mの規模である。焼土下の地山面が赤変しており、同所での火の使用は明確である。

Ｐ１は焼土の北西側約１mにあり、長さ0.6m、幅0.2～0.3mの不整楕円形を呈する。深さは0.1mである。柱穴は竪穴壁寄りで６本（Ｐ２～Ｐ７）確認した。Ｐ２・３は隅部に位置し、径0.2m前後、深さはＰ２で0.16m、Ｐ３で0.47mである。

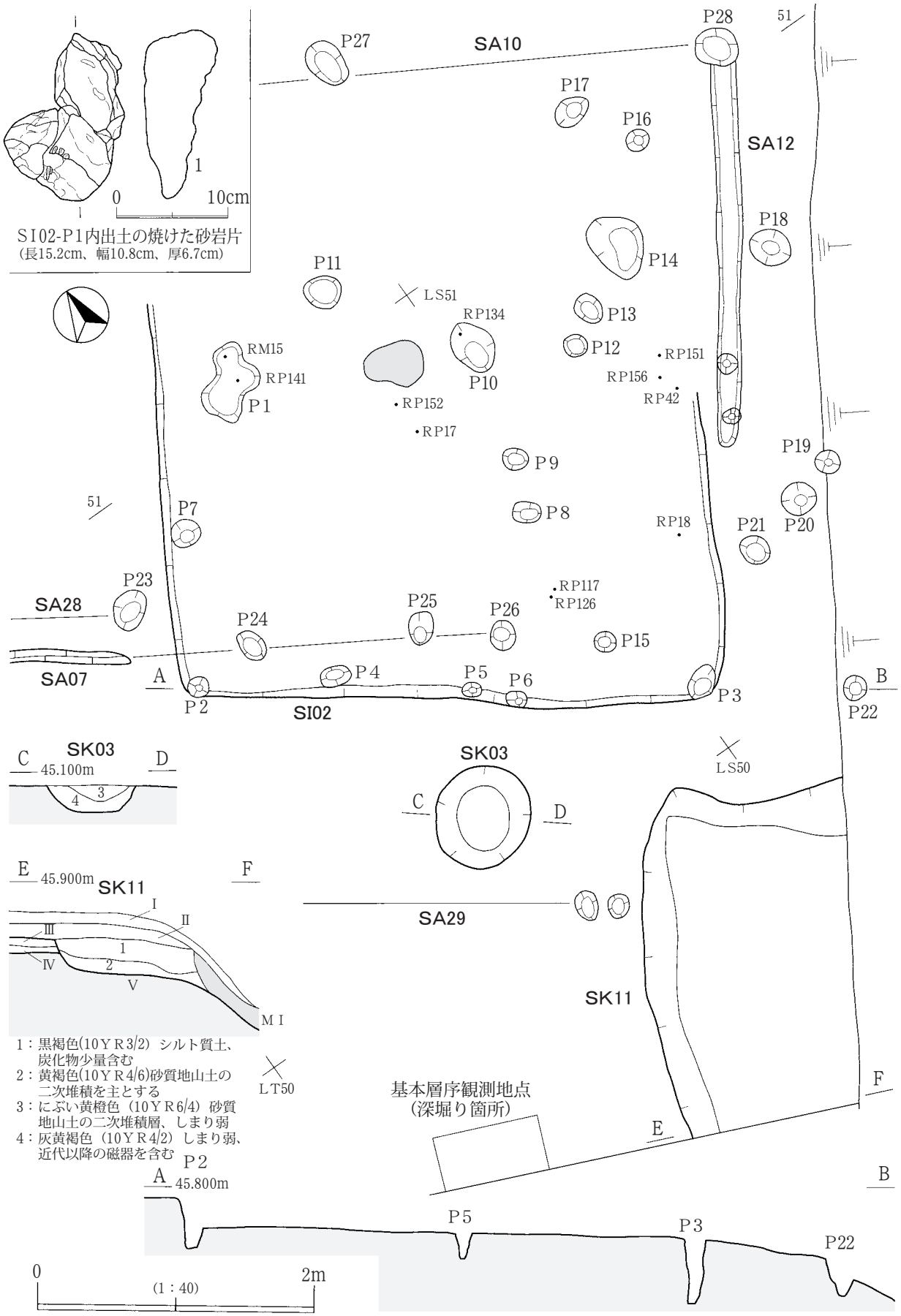
出土遺物は、土師器甕20点（552g）、鉄滓４点（67g）である。甕破片の胎土には径３～５㎜の砂粒を多く含むものの､焼成良好な個体が目立つ。図示している資料では８のみが焼成やや不良であり、器厚20㎜の底部片である。色調は１・４・５が浅黄橙色、２・３が橙色、６～８はにぶい褐・にぶい暗褐色である。鉄滓は、いずれもＰ１内出土（ＲＭ15）であり、ここからは土師器甕（８）と共に加工痕跡があり二次火熱を受けている砂岩片（440g、第11図左上に図示）と木炭片、少量の炭化米も確認された。炭化米は、Ｐ１と焼土面間の床面直上からも少量確認された。

**②SI04竪穴建物跡**（第12・13図、第16図９～13、図版６・７）

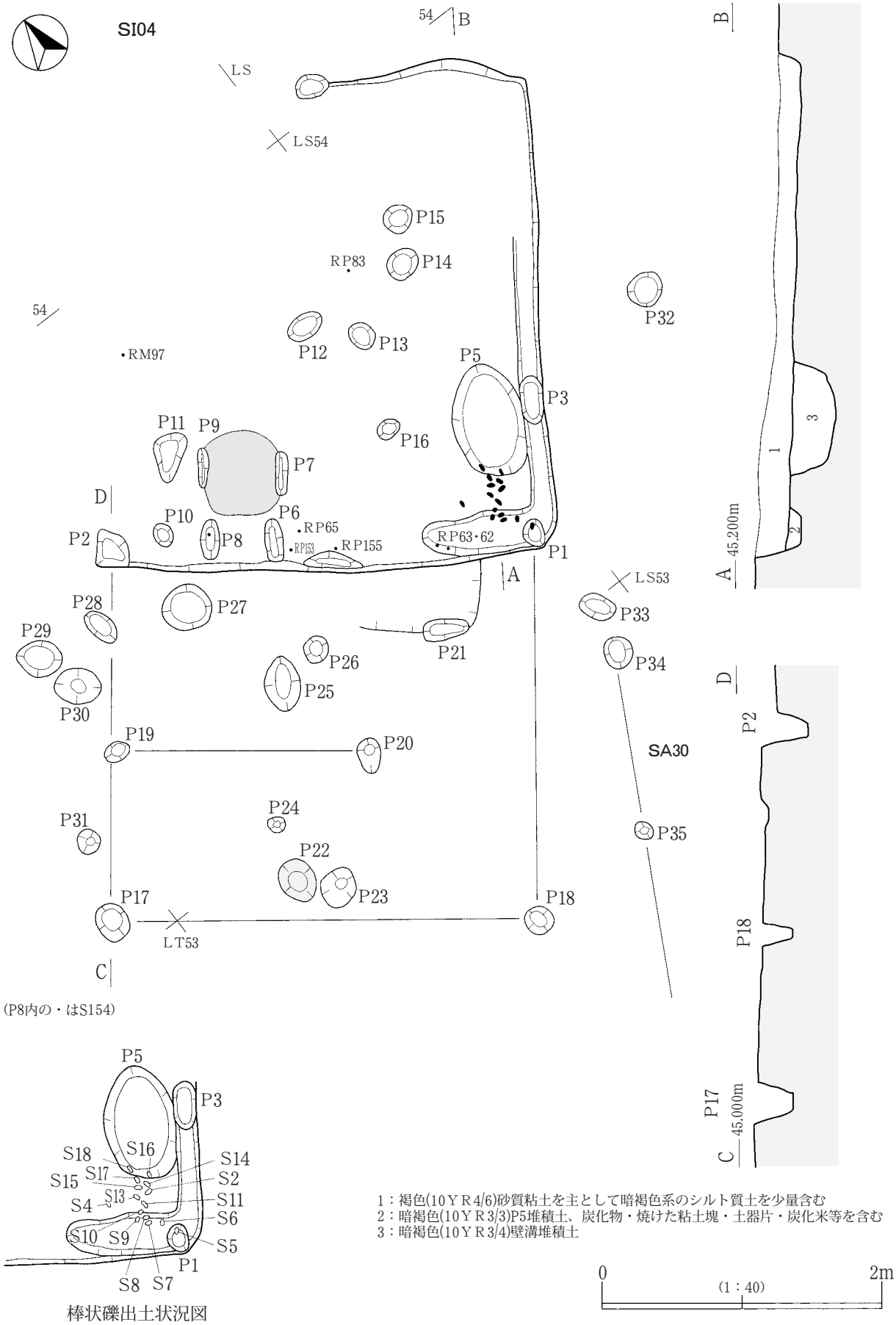
Ａ区中央西側で検出された｡竪穴建物と掘立柱建物が並列して一体となる構造をもつ建物跡である。規模は長軸の長さ（北東－南西）6.1m、短軸の幅3.3mの長方形を呈する。うち、竪穴部では北西側と北東側の壁面の一部を欠くものの、長軸3.5m、短軸3.3mの方形を呈し、掘立柱部は長軸方向１～２間、2.6m×短軸１間、3.05mである。建物はカマドが設置された南西壁面に接続する。

【竪穴部】堆積土は地山土を主とし、炭化物をやや多く含む褐色粘質土（10YR4/4～4/6）で人為的に埋められており、SI02と近似した土質を呈する。確認面から床面までの深さは0.25mである。床面上にはカマド、小土坑、壁溝、柱穴を確認した。

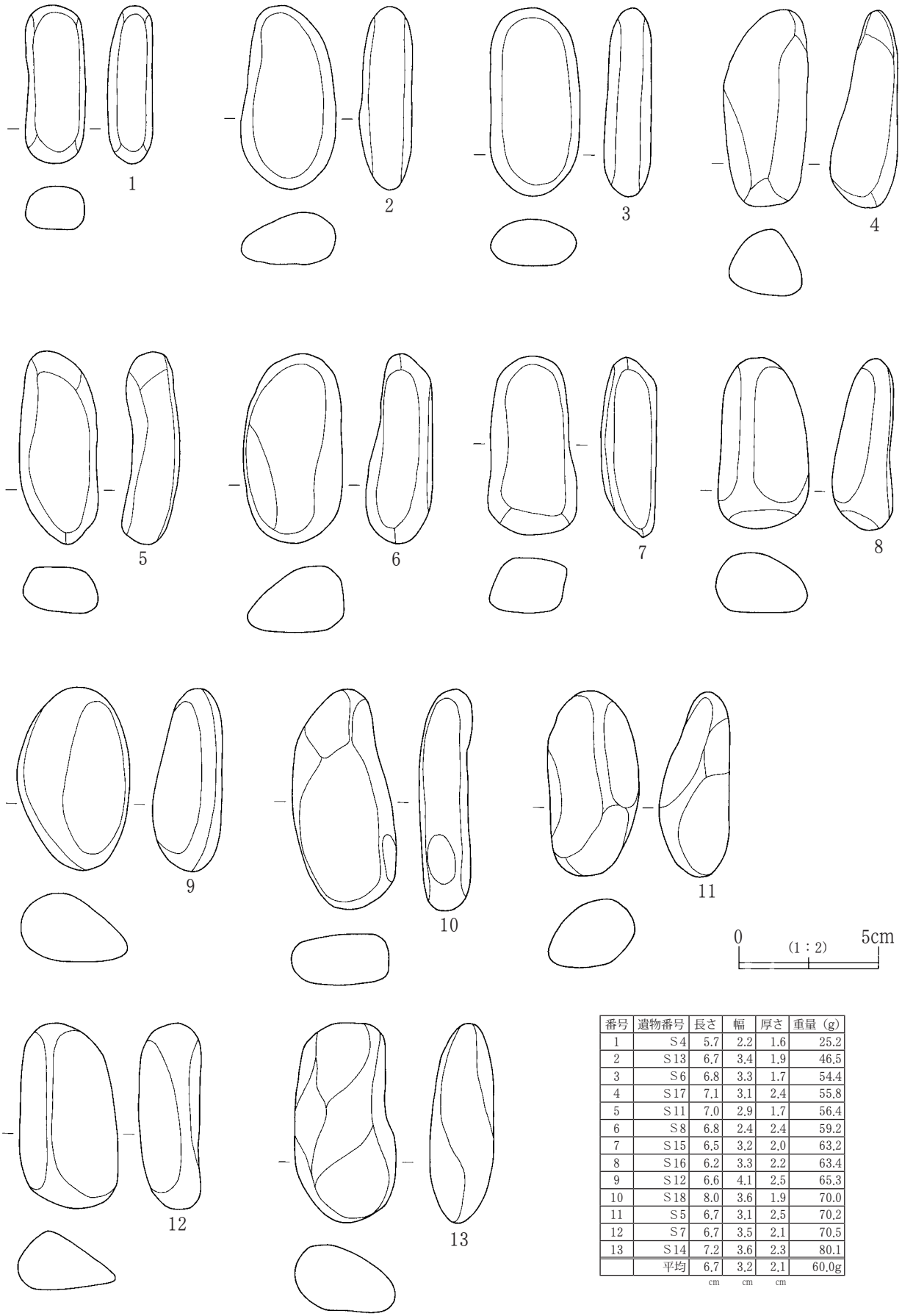
カマドは南西側壁面の中央から北西寄りに設置される。燃焼部下の火床面のみの確認であり、竪穴が埋め戻される段階でカマド本体は意図的に破壊あるいは撤去された可能性が考えられる。火床面は長さ0.6m、幅0.45mであり、本体（袖部）下にあたる部分には楕円状の小さな掘り込みが片側２列、計４か所（Ｐ６～Ｐ９）確認された。その位置を考慮すれば石組あるいは石芯カマドの抜き取り痕跡と類推される。Ｐ６・７内には白色系の砂質土（浅黄色５Ｙ7/3～7/4）が少量含まれていた。これはカマド本体構築土の一部であり、火山灰の可能性があることから分析を行ったが、結果的には基盤層（笹岡層）に含まれる凝灰質砂岩粒であることが明らかとなった。詳細は第５章第１節を参照いただきたい。また、Ｐ８内に焼けた砂岩片（Ｓ154）が認められ、これもカマド構築材の一部と類推さ




第11図　SI02竪穴建物跡と周辺の遺構群




第12図　SI04竪穴建物跡




| 番号 | 遺物番号 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量（g） |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S4 | 5.7 | 2.2 | 1.6 | 25.2 |
| 2 | S13 | 6.7 | 3.4 | 1.9 | 46.5 |
| 3 | S6 | 6.8 | 3.3 | 1.7 | 54.4 |
| 4 | S17 | 7.1 | 3.1 | 2.4 | 55.8 |
| 5 | S11 | 7.0 | 2.9 | 1.7 | 56.4 |
| 6 | S8 | 6.8 | 2.4 | 2.4 | 59.2 |
| 7 | S15 | 6.5 | 3.2 | 2.0 | 63.2 |
| 8 | S16 | 6.2 | 3.3 | 2.2 | 63.4 |
| 9 | S12 | 6.6 | 4.1 | 2.5 | 65.3 |
| 10 | S18 | 8.0 | 3.6 | 1.9 | 70.0 |
| 11 | S5 | 6.7 | 3.1 | 2.5 | 70.2 |
| 12 | S7 | 6.7 | 3.5 | 2.1 | 70.5 |
| 13 | S14 | 7.2 | 3.6 | 2.3 | 80.1 |
| | 平均 | 6.7 cm | 3.2 cm | 2.1 cm | 60.0g |

第13図　SI04竪穴建物跡出土の棒状礫

れる。火床面は床面下９㎝の深さまで赤変しており、一定期間のカマド利用がなされていたと考えられる。

小土坑（Ｐ５）は、南東壁面寄りの床面上から掘り込まれている。長さ0.8m、幅0.5mの楕円形を呈する。堆積土内には多くの炭化物と土師器小片、少量の炭化米が認められた。

壁溝は南東壁と南西壁の一部で確認された。幅0.15 ～ 0.3m、深さ0.1m前後である。

柱穴は、竪穴壁の隅部で４本（Ｐ１～Ｐ４）検出された。うち２本（Ｐ１・３）は壁溝内から掘り込まれている。規模は径あるいは一辺0.2 ～ 0.25m、深さ0.23 ～ 0.32mである。その他床面上にも柱穴（Ｐ10 ～Ｐ16）がみられるが、配置は不明である。

【掘立柱部】基本的に１間×１間の構成であるが、柱穴配置をみれば内部に仕切（Ｐ19－Ｐ20間）をもつ構造であった可能性もある。Ｐ21の周辺は矩形状にわずかに窪んでおり、検出位置を考慮すればここが竪穴部との出入り口施設であったとみられる。また、建物内に位置するＰ22（長さ0.32m、幅0.25m、深さ0.24m）内には焼土粒子が多量に含まれており、これは柱穴ではなく鍛冶炉等の下部施設の可能性も想定される。

なお、掘立柱部の範囲は、その柱穴を確認する前段階において周辺部との土色の違いが不鮮明ながら観察され、当初ＳＩ04とは別の竪穴建物等の存在を予測していた箇所であった。このことから、明確に図示はできなかったが、掘立柱部も浅い掘り込みを有する施設であったのかもしれない。

遺物は、竪穴部出土の土師器甕13点（290g）と鉄製品１点（３g）である。カマド周辺の床面直上からは少量の炭化米も抽出された。甕は胎土・焼成から３タイプに分けられる。①径３～５㎜の砂粒を多く含む。焼成は不良であり、色調はにぶい褐色を示す。２点（第16図９）。②径１㎜未満の細砂粒を多く、径２㎜前後の砂粒を少量含む。砂粒には赤褐色を呈するものが一定量含まれる。器面は砂っぽい質感を呈し、指に器表の胎土が付着する。焼成は不良であり、色調はにぶい橙色を示す。10 点（同10 ～ 12）。③径２～３㎜程度の砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は②に近似する。１点（同13）のみであり、底部の器厚は18㎜である。鉄製品（ＲＭ97）は、一辺３㎜角の細い棒状を呈する。

その他として、竪穴南東隅部の床面上から小さな棒状の自然礫（河原石、石質は砂岩か）が13点まとまって出土した（第12図左下に出土状況図、第13図Ｓ１～13、図版７下）。これは北海道の擦文文化期あるいはアイヌ文化期の竪穴建物内等で多くの出土例がある“もじり編み”に使用した錘石である「棒状礫」と称される遺物の可能性がある。第６章で詳述する。

**③SA07・SA09・SA10・SA12・SA28・SA29・SA30・SA31柱列**（第10図）

Ａ区南側、ＳＩ02・ＳＩ04周辺では８条の柱列が検出された。一部で溝跡としても確認されているが、溝は柱材を埋設する布掘り溝跡とみて柱列として分類した。８条は軸線方向からａ～ｃの３グループに分けられる。

ａ：軸線方向が座標北から東に36°あるいは126°振れるグループ

**SA29**は、柱穴３本以上（Ｐ25 ～Ｐ29）で構成される。Ｐ25-Ｐ28間の距離は6.2m、Ｐ25-Ｐ27間2.7m、Ｐ27-Ｐ28間3.5mである。柱穴はＰ25で径0.35m、深さ0.24m、Ｐ27で長径0.3m、深さ0.17mである。

**SA31**は、柱穴５本（Ｐ20 ～Ｐ24）で構成される。うち、Ｐ20 ～Ｐ23の軸線方向は、ＳＩ04の掘立柱部南西柱列（第12図Ｐ17-Ｐ18）と同一であり、両者間の距離は3.9mである。Ｐ20-Ｐ24間の距離は5.1m、Ｐ20-Ｐ21間1.2m、Ｐ21-Ｐ22間0.9m、Ｐ22-Ｐ23間1.5m、Ｐ23-Ｐ24間1.5mである。柱

列を構成する柱穴堆積土は、SA29・31とも暗褐色（10ＹＲ3/3 ～ 3/4）系のシルト質土である。

以上、本グループの柱列は柱穴の配列と軸線方向からSI04と同時期の併存が予測される。

ｂ：軸線方向が座標北から東に32°あるいは122°振れるグループ

SA07は、柱穴５本（Ｐ12 ～Ｐ16）と一部溝で構成される。Ｐ14 ～Ｐ16は明らかにSI02堆積土を切り込んでいる。また、Ｐ12・13は溝底面に掘り込まれる柱穴である。Ｐ12-Ｐ16間は7.5mである。各柱穴（Ｐ14 ～Ｐ16）は、径0.25m前後、深さは0.35 ～ 0.4mである。溝内から掘り込まれるＰ13は、長径0.2m、短径0.05m程の長楕円形を示しており、板状の柱を埋設していたと判断される。

SA28は、SA07の北約0.4mに近接して位置する。柱穴４本（Ｐ８～ P11）で構成される。その距離は4.7m、Ｐ８-Ｐ９間1.5m、Ｐ９-Ｐ10間1.6m、Ｐ10-Ｐ11間1.6mである。柱列を構成する柱穴堆積土は、SA07・28とも黒褐色（10ＹＲ2/2 ～ 2/3）系のシルト質土であり、ａグループとは識別が容易である。

ｃ：軸線方向が座標北から東に30°あるいは120°振れるグループ

SA09は、柱穴３本（Ｐ１～Ｐ３）と一部溝で構成される。Ｐ１-Ｐ３間の距離は、5.8mである。柱穴は径0.25m前後、深さは、Ｐ１で0.13m、Ｐ２で0.1m、Ｐ３で0.17mである。溝は幅0.12m、深さ0.1m前後、長さ1.2mである。

SA10は、SA09のＰ３を起点として南東方向に延び、柱穴５本（Ｐ３～Ｐ７）で構成される。Ｐ３-Ｐ７間は11.4m、Ｐ３-Ｐ４間3.1m、Ｐ４-Ｐ５間2.7m、Ｐ５-Ｐ６間2.8m、Ｐ６-Ｐ７間2.8mである。

SA12は、SA10のＰ７を起点として南西方向に延びる。長さは3.1mである。溝の幅は0.2m前後、深さは0.1m程である。以上、SA09・10・12の３条は軸線方向や配置状況をみれば同時期に一連の施設として、あるいは有機的な関係を保って個々に併存していた可能性もある。

SA30は、SA09の南東5.1mに位置し、柱穴３本（Ｐ17 ～Ｐ19）で構成される。Ｐ17-Ｐ19間の距離は3.0m、Ｐ17-Ｐ18間1.25m、Ｐ18-Ｐ19間1.75mである。柱穴の規模は、Ｐ17で径0.22m、深さ0.18mである。柱列を構成する柱穴堆積土は、４遺構とも黒褐色（10YR2/2 ～ 2/3、3/2）系のシルト質土であり、ｂグループに近い土色を示している。

**④SK03土坑**（第11図）

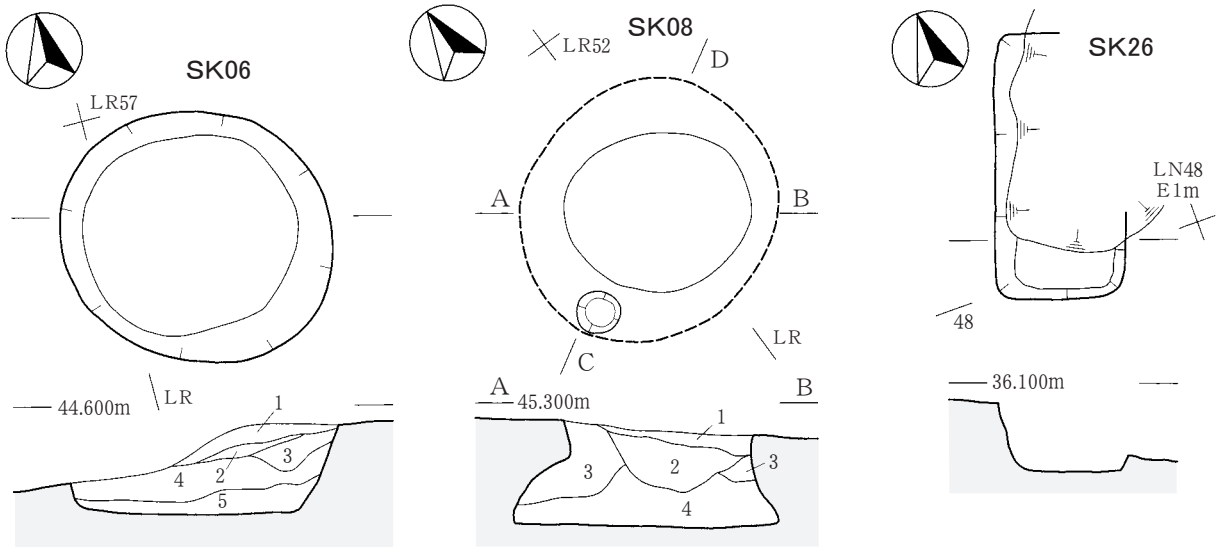
Ａ区のSI02南西側で検出された。南北方向の長さ0.75m、幅0.68mの略円形を呈する。確認面からの深さは0.2mである。堆積土は２層に分けられるが、砂質地山土を主とする人為的堆積であり、シルト質の第Ⅱ・Ⅲ層由来の土は含まれない。２層中より近代以降の磁器片が出土していることから、近代～現代の土坑の可能性が高い。

**⑤SK06土坑**（第６・14図）

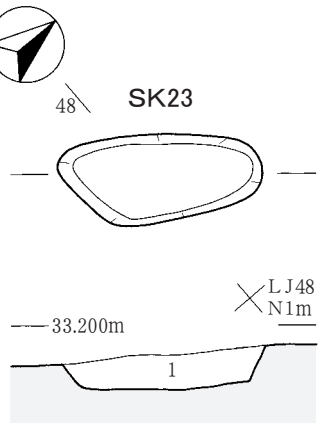
Ａ区の北端部で検出された。長さ1.45m、幅1.35mの円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.47mである。堆積土は１～５層に分けられるが、基本的には砂質地山土を埋め戻した人為的堆積を示している。出土遺物はない。

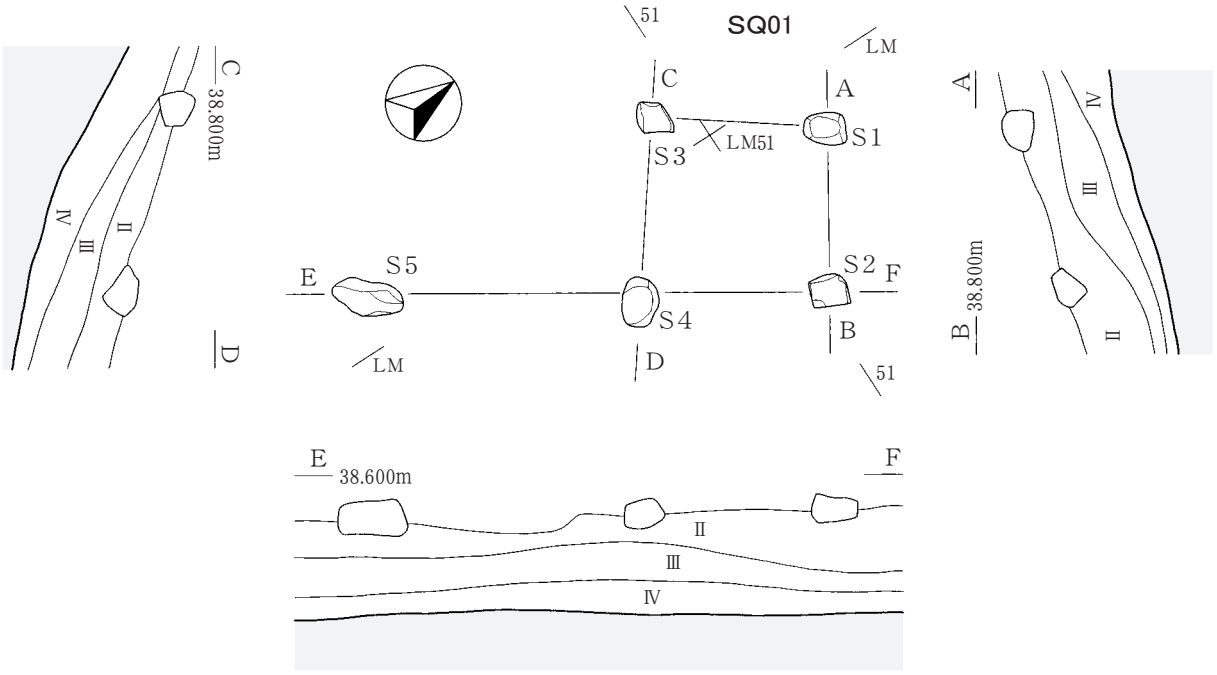
**⑥SK08土坑**（第14図、図版５下）

Ａ区中央東寄りで検出された。規模は確認面での長さ1.0m、幅0.85m、底面では径1.3 ～ 1.4mのそれぞれ円形を呈する。確認面からの深さは0.55mであり、いわゆるフラスコ状の掘り込みである。




SK06
1：褐色(10ＹＲ4/6)砂質地山土を主とする
2：にぶい黄褐色(10ＹＲ4/3)地山土含まず
3：黄褐色(10ＹＲ5/8)砂質地山土の二次堆積、基盤の礫を含む
4：褐色(10ＹＲ4/4)人為堆積層、しまり弱
5：暗褐色(10ＹＲ3/4)基盤の礫含む、しまり弱
SK08
1：暗褐色(10ＹＲ3/3)シルト質土
2：黒褐色(10ＹＲ4/3)シルト質土、地山土含まず
3：黄褐色(10ＹＲ5/6)砂質地山土の二次堆積・ブロック
4：にぶい黄褐色(10ＹＲ4/3)人為堆積層、炭化物少量含む、しまり弱
SK23
1：暗褐色(10ＹＲ3/3)シルト質土、砂質地山土斑状に含む




0　(1：40)　2m

第14図　Ａ・Ｃ・Ｆ区の土坑・配石遺構

堆積土は１～４層に分けられるが、最下層（４層）はにぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）に炭化物が斑状にやや多く含まれており、人為的埋土の様相を呈している。１～３層も地山粘土ブロックの再堆積を主とする。出土遺物はない。

**⑦SK11土坑**（第11図）

Ａ区南東隅部で検出された。土坑の東側はＣ１段形成に伴い削平され、南側は調査区外に及ぶ。このため規模･形状は不明瞭であるが､現存する長さ（北東－南西）2.5m､幅1.55mの不整方形状を示す。底面は凹凸があり平坦ではない。確認面からの深さは0.2 ～ 0.25mである。出土遺物はない。

（２）西側丘陵西向き斜面部（Ｂ区）

Ｂ区では段築以外に検出された遺構はない。出土遺物には、鉄滓が１点（図版17- ２）出土しているのみである。

（３）西側丘陵東向き斜面部（Ｃ区）

Ｃ区で検出された遺構は、Ｃ１段平坦面、Ｃ５段面上、Ｃ６段面下位の３か所にある。

**①SN05A・B焼土遺構、SI05C竪穴建物跡、SA13柱列**（第10・15図、第16図14、図版８）

Ｃ区の最上位であるＣ１段平坦面から４遺構が検出された。Ｃ１段の平面形状、遺構の検出状況と重複、堆積土の観察から次のような場の変遷が想定される（重複のないSA13を除く）。

〔旧〕Ｃ１段の造成（Ａ区平坦面端部を１ｍ前後の段差が生じるように削平→下方へ盛土・整地か）→SI05Ｃ竪穴建物の構築・使用→SI05Ｃ竪穴建物の廃棄・埋め戻し→地滑りか意図的な削平か（土砂の流失）→ Ｃ１段の再造成（盛土・整地）→SN05Ａ・Ｂ焼土面の形成〔新〕

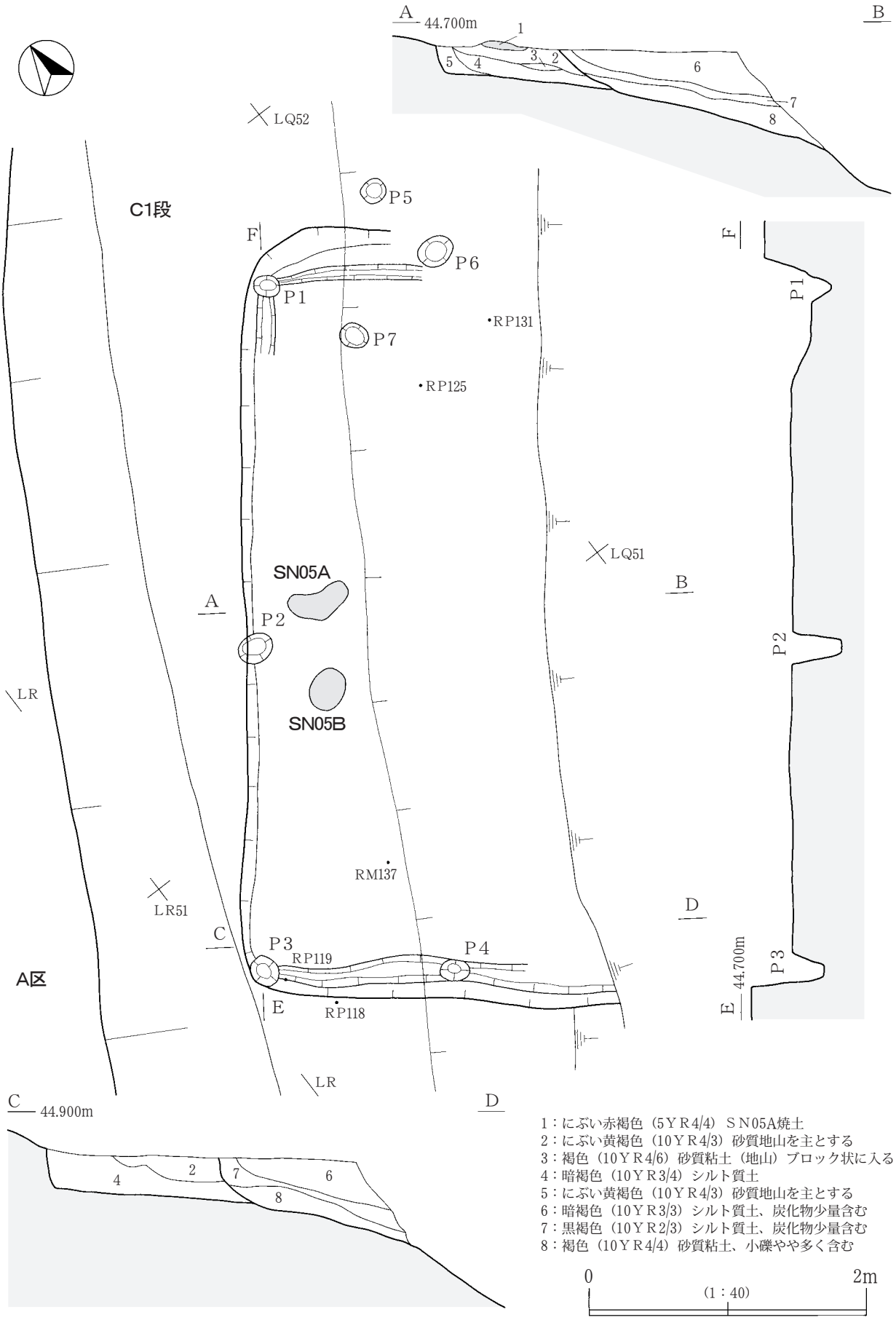
Ｃ１段の造成を竪穴構築前としたのは、①Ｃ１段の平面形状がSI05Ｃの掘り込み形状に近似・相似すること、②仮に逆の場合を想定するとSI05ＣはＡ区面から掘り込まれていたことになり、そうすると竪穴の深さは１ｍを超す（Ａ区端部の地山面からSI05Ｃ床面までの深さは1.35m）ことは、Ａ区竪穴や当該期の他集落跡での実例には認められないからである。

SI05Ｃは、長軸5.6m、短軸は残存部（南西壁面）2.7mである。軸線方向はＡ区のSI02・SI04とほぼ同一であり、特にSI04南西側壁面とSI05Ｃ北東側壁面は同一線上にのる。壁面間の距離は9.3ｍである。堆積土は１～７層に分けられるが、SI05Ｃに伴うのは２～４層のみであり、１層はSN05Ａに、５～７層は Ｃ１段の再造成（盛土・整地）に係ると推測する。

床面上には壁溝と柱穴が確認できるが、カマド・焼土面は認められない。壁溝は北西壁面で明瞭ではないが、他２壁面下で検出された。幅0.1 ～ 0.15m、深さ0.12mである。柱穴は、壁溝内を含む隅部にある。北西壁面では両隅とその中央の３本が配置される。規模は径0.2 ～ 0.25m､深さ0.15 ～ 0.37ｍである。

SN05Ａ・Ｂは、SI05Ｃ竪穴埋没後に形成された焼土面である。Ａは長さ0.45m、幅0.2mの不整楕円形、Ｂは長さ0.3m、幅0.25mの略円形を呈する。

出土遺物は、土師器甕３点（42ｇ）、羽口１点（15ｇ）、鉄滓１点（17ｇ）である。遺物の出土層序を検討すれば、土師器（RP118・119・125）はSN05Ａ・Ｂに、羽口（RP131）と鉄滓（RM137）はSI05Ｃにそれぞれ伴う。甕３点の胎土はSI04の②タイプに近似する。第16図14は火熱を受




第15図　SN05A・B焼土遺構、SI05C竪穴建物跡

けており、器面調整の観察はできない。羽口は小片であるが残存部から計測すれば外径5.4㎝、厚さが1.2㎝であることから、内径は3.0㎝程になる。

ＳＡ13柱列は、Ｃ1段の南西側で検出された。柱穴４本（Ｐ30 ～Ｐ33）で構成されるが、調査区外南側に延びていた可能性もある。Ｐ30-Ｐ33間の距離は3.9ｍである。各柱穴はＰ32・33で径・深さとも0.15ｍ前後、Ｐ30・31で径0.2 ～ 0.25ｍ、深さ0.25ｍである。

**②SQ01配石遺構**（第６・14図）

Ｃ５段面上、表土直下の第Ⅱ層中で検出された。人頭大の礫５個（Ｓ１～５）で構成される。礫の大きさはＳ１～４とも大礫を加工して立方体状に仕上げており、長さ20㎝前後、幅15 ～ 18㎝、厚さ13 ～ 15㎝、重さ７～９㎏と近似した数値である。いずれも平坦な面を上にして置かれており、火熱を受けている。Ｓ５は長さ34㎝、幅16㎝、厚さ15㎝、重さ約12㎏とやや大型であり、礫の加工痕は明瞭ではないが平坦な面を上にして検出された。礫間の距離は、Ｓ１-Ｓ２間とＳ１-Ｓ３間が0.9ｍ、Ｓ２-Ｓ44間とＳ３-Ｓ４間が1.0ｍ、Ｓ４-Ｓ５間は1.5ｍである。礫の形状や配置から、本遺構は１間四方（３尺間、Ｓ１～Ｓ４）あるいは１間×２間の小建物（祠等か）の礎石であったのかもしれない。遺物は認められないが、検出面を考慮すれば近世以降の比較的新しい段階と推測される。

**③SK26土坑**（第６・14図）

Ｃ６段（現代の盛土層）除去後に検出された。規模は南北方向の長さ1.4ｍ、幅0.7ｍの隅丸長方形を呈するとみられるが、杉大木根が土坑内に入り込んでおり部分的な調査に留まった。底面までの深さは0.35ｍである。出土遺物はない。

（４）Ａ～Ｃ区遺構外出土遺物

遺構外出土の遺物は、古代の土師器と中世・近世の銭貨・煙管、及び近代以降の陶磁器類、時期不明の鉄製品・鉄滓がある。鉄製品は29点を確認したが、錆や錆膨れ等により形状の復元できない個体が多く、かつ古代から現代のものが混在している可能性も高く、本項では陶磁器類と共に報告を省略する。

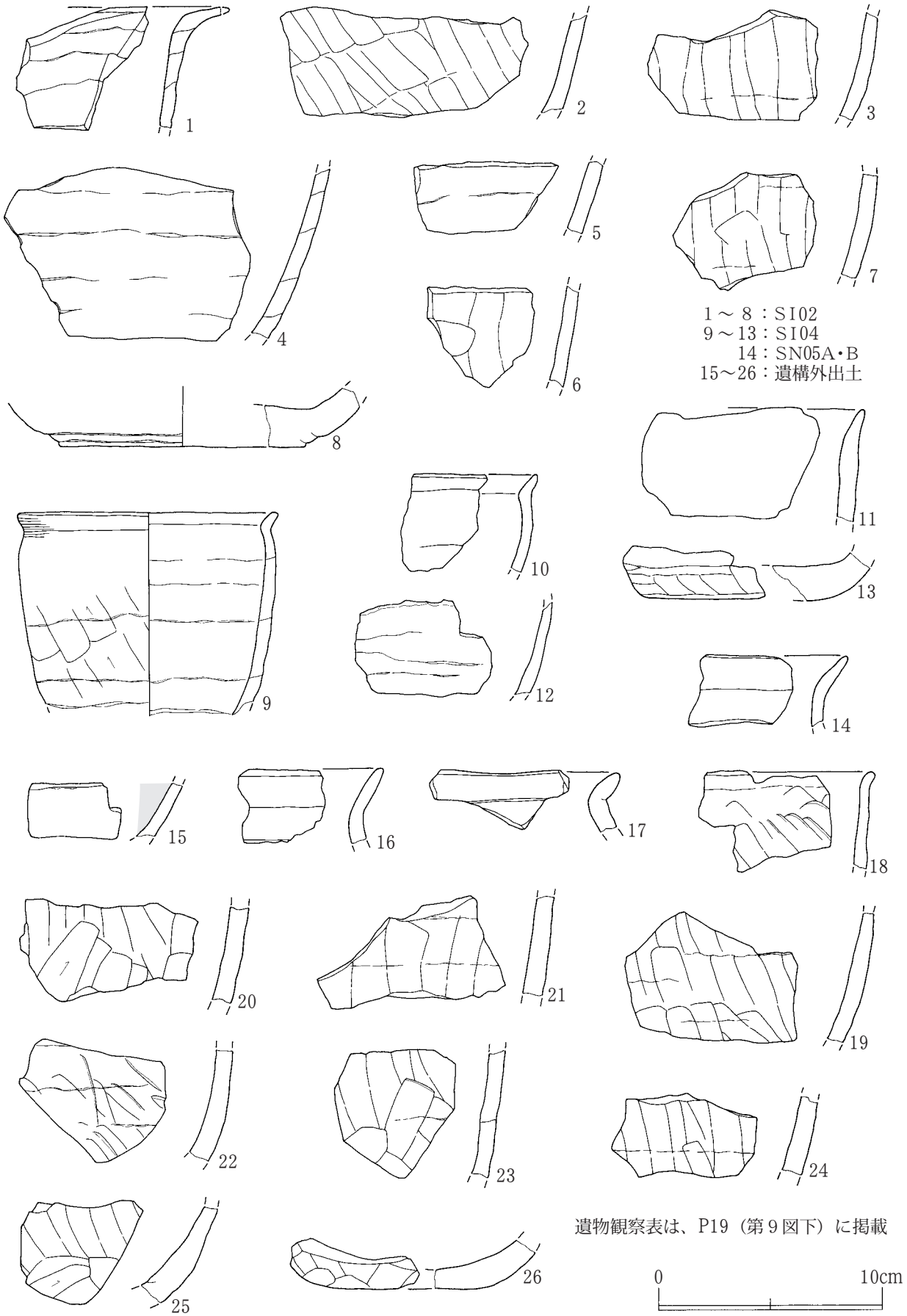
①土師器（第16図15 ～ 26、図版16）

土師器は43点（715g）出土しており、Ａ区12点（170g）、Ｃ区31点（545g）である。43点中１点のみがＣ区出土の坏であり、他は甕とみられる。唯一の坏は、小片であるが非ロクロ成形、内面ナデのち黒色処理される。いわゆるミガキ調整を施さずに黒色処理をしている。器厚は５㎜で外面の色調は、にぶい黄橙色を呈する。

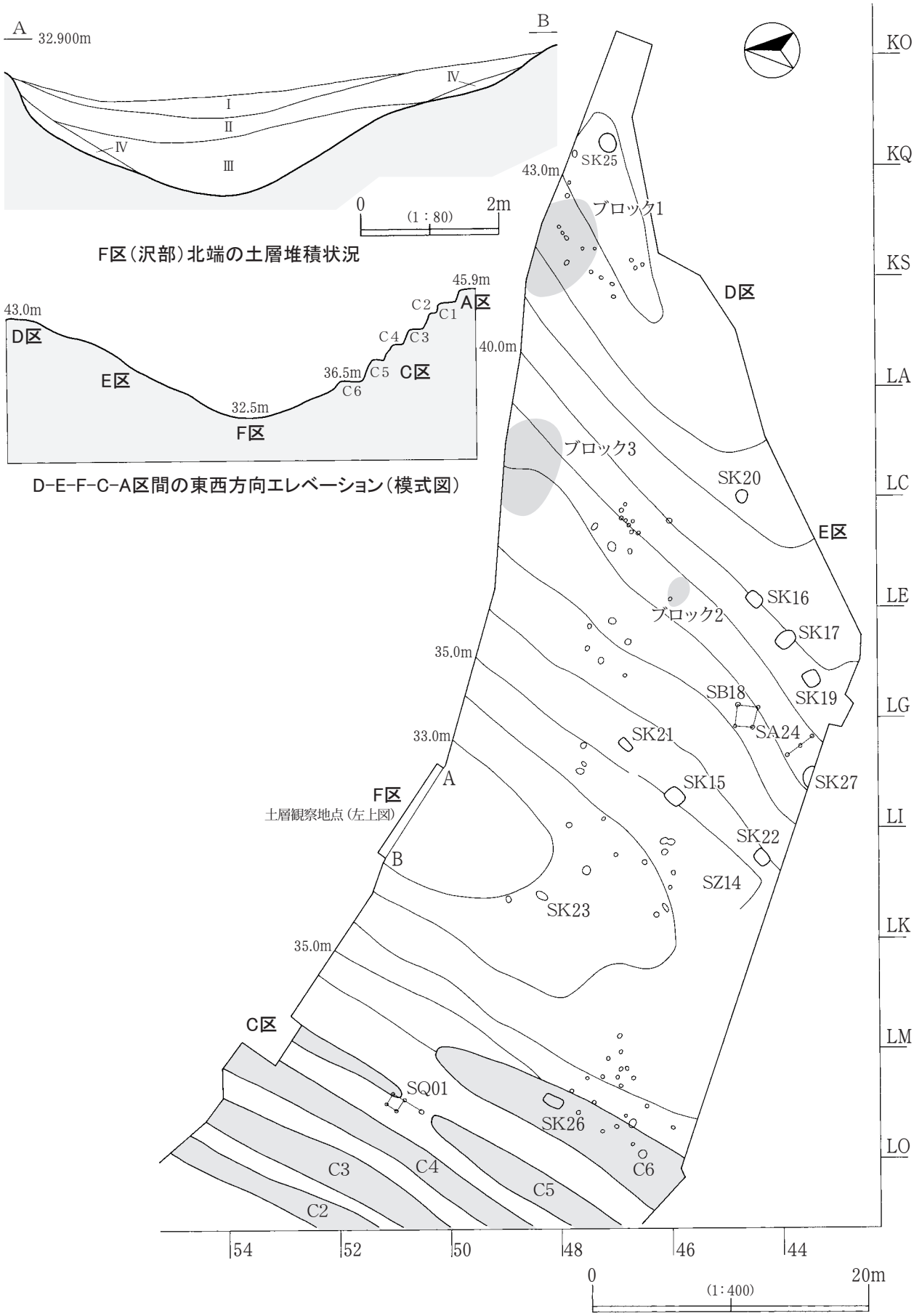
甕は胎土と焼成・色調から３タイプに分けられる。①胎土に径３～５㎜の砂粒を多く含む。焼成は良好で橙・赤褐色系の色調を示す（20・21、23 ～ 26）。②胎土に径３～５㎜の砂粒を多く含む。焼成はやや不良で、にぶい黄褐・にぶい黄橙・にぶい褐色系の色調を示す（18・19・22）。③胎土に１㎜未満の細砂粒を多く含む。焼成はやや不良で、色調は②に近似する（16・17）。底部片には器厚18㎜を示すものが含まれる。器面調整は外面縦方向のケズリあるいはナデ、内面は横方向のナデが主体を占める。

②鉄滓（図版17：１～５）

鉄滓は５点(530g)出土した。Ｂ区１点、Ａ区４点である。Ｂ区出土遺物は、この鉄滓１点のみである。




**第16図　A・C区出土遺物（土師器）**




第17図　東側丘陵部～沢部（D～F区）の遺構配置図

１は半割された破面（図版右側面）が明瞭に観察される椀形鍛冶滓、２も破砕・分割（図版左側面）された鉄滓である。３は磁着することから含鉄鉄滓、４は流動滓の可能性がある。

③銭貨・煙管（図版17：９・10・12～14、16～18）

銭貨はＡ・Ｃ区から５点出土している（９・10・12～14）。９は聖宋元寳（初鋳1101年）の模鋳銭であり、これをもって中世期に残された遺物であると断定することはできない。残り４点のうち判読可能な２点は寛永通寳である。

煙管は３点確認され（16～18）、いずれもＡ区出土である。

３　東側丘陵部～沢部（Ｄ～Ｆ区）の遺構と遺物（第17図）

Ｄ～Ｆ区から検出された遺構は、テラス状遺構１基、掘立柱建物跡１棟、柱列１列、土坑10基、柱穴様ピット72基である。

土坑のうちの６基については、遺構の形態や配置、人骨・銭貨（寛永通寳等）等の出土から近世に造られた土坑墓であることが明確であるが、他遺構については出土遺物が一切認められず時期不明である。

（１）テラス状遺構・掘立柱建物跡・柱列・土坑

**①SZ14テラス状遺構**（第18・19図、図版９）

Ｅ区南西側斜面最下位、Ｆ区との境界部で検出された。テラス状遺構としたのは、斜面地をＬ字（長方形）状に削平することで平坦面を造り出す整地地業と推定したからである。これが竪穴建物跡であった可能性も残されるが、遺構の立地、壁面の状況、柱穴配置、カマド・焼土面が未確認であることから本名称を使用した。

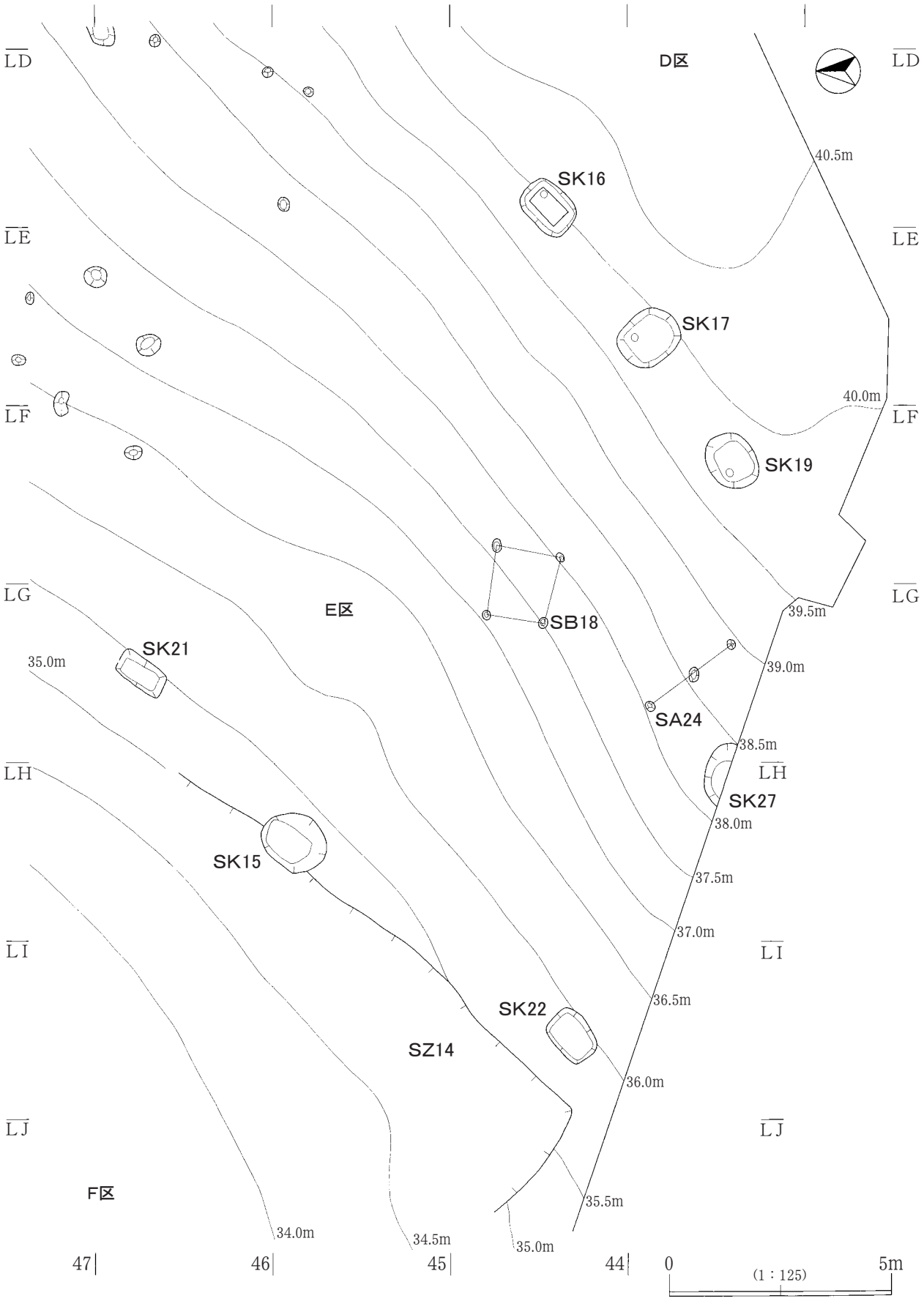
遺構は２辺（壁面）の掘り込みからなり、ＳＫ15と重複しこれに切り込まれている。長軸方向は北東－南西を示し、これは等高線（標高35.0m）に沿っている。確認された長さは11.8mである。対する短軸は南側壁面の一部を検出したに留まり、長さ2.9mである。長軸方向の壁面は２段に掘り込まれたような形状を示し（第17図のエレベーション図参照）、床面寄りの内側には一部壁溝も確認された。床面までの掘り込みの深さは、南東隅部で0.56m、北東端部で0.45mである。壁直下には一辺あるいは長さ0.2～0.4mの柱穴が４基（Ｐ１～Ｐ４）認められた。また、床面上には３基の土坑（Ｐ５～Ｐ７）が検出された。３基は堆積土層の確認状況からＰ５は本竪穴に伴う施設とみられるが、Ｐ６・７は不明瞭である。Ｐ５は長さ0.7m、幅0.5m、深さ0.4mである。

**②SB18掘立柱建物跡**（第18・20図）

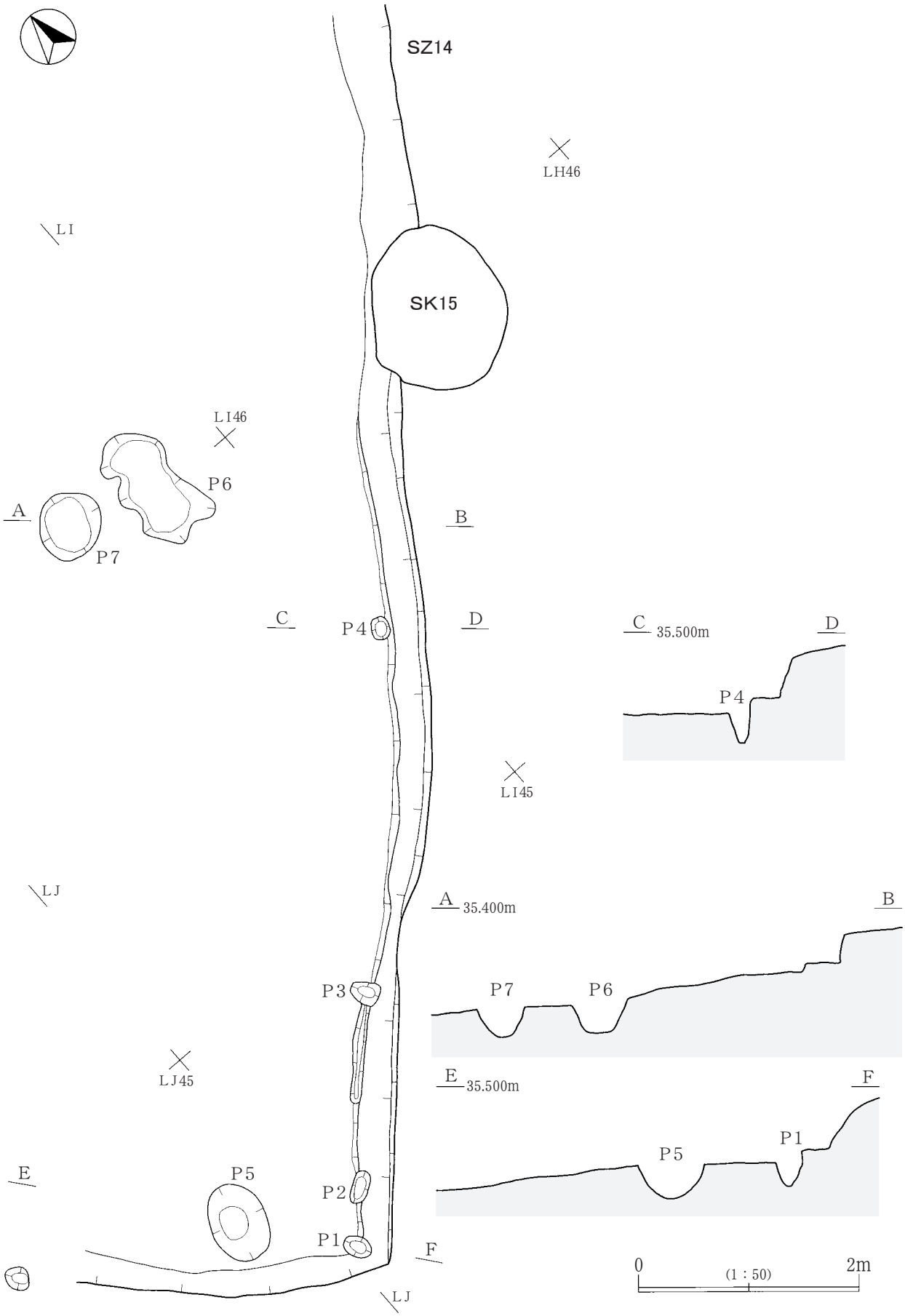
Ｅ区斜面中位、ＳＡ24の北東約４ｍで検出された。略円形を呈する柱穴４基（Ｐ１～Ｐ４）で構成される１間×１間の建物跡である。柱間距離は、Ｐ１-Ｐ２とＰ２-Ｐ３で1.5m、Ｐ３-Ｐ４で1.3m、Ｐ４-Ｐ５で1.6mである。各柱穴の規模（長さ×幅×深さｍ）は、Ｐ１で0.3×0.22×0.24m、Ｐ２で0.24×0.18×0.3m、Ｐ３で0.28×0.2×0.33m、Ｐ４で0.23×0.17×0.22mである。

**③SA24柱列**（第18・20図）

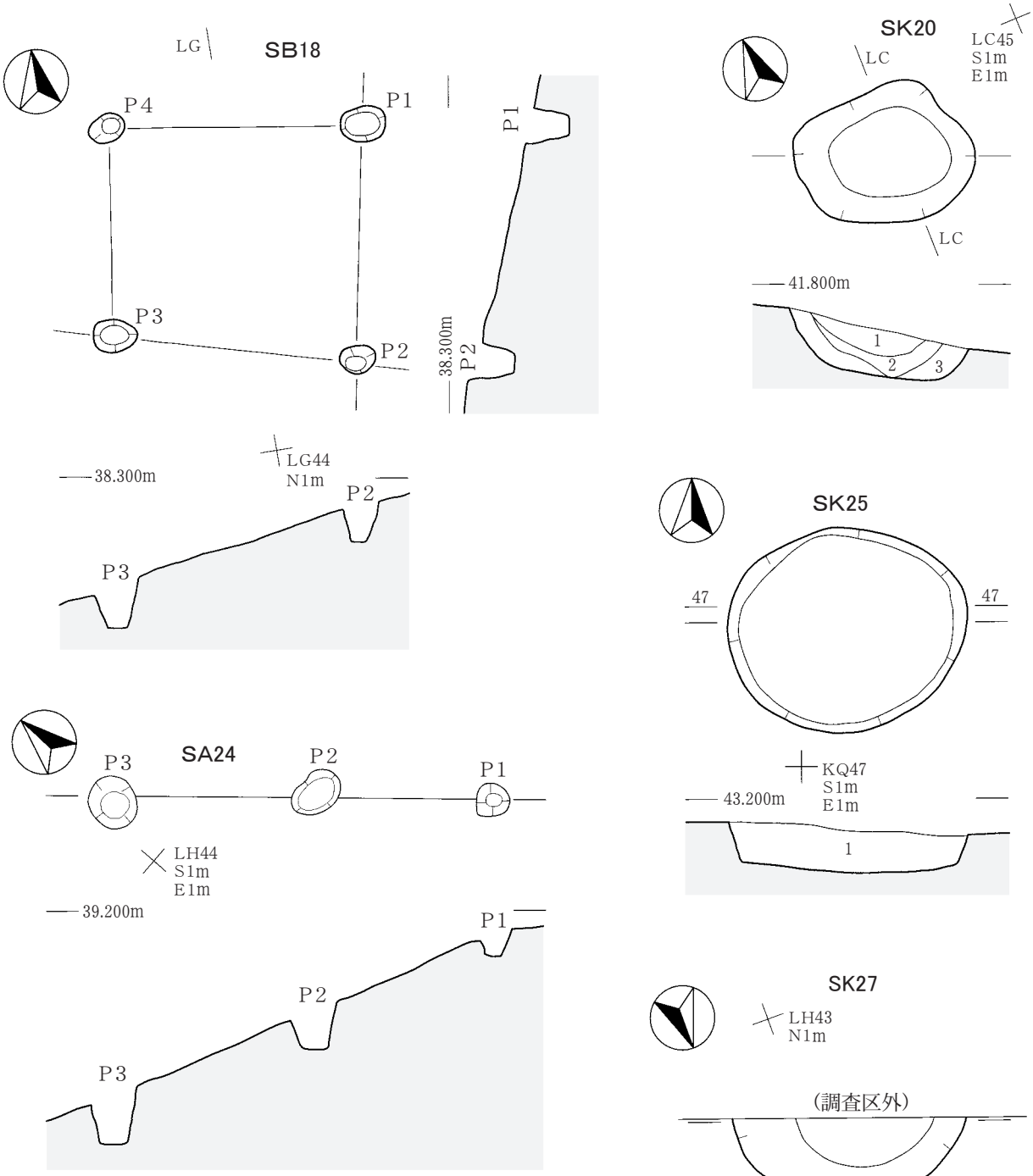
Ｅ区斜面中位、SK27の北東約２ｍで検出された。柱穴３基（Ｐ１～Ｐ３）で構成され、等高線に直交する配置を示す。Ｐ１-Ｐ３の柱間距離は2.35m（Ｐ１-Ｐ２間1.1m、Ｐ２-Ｐ３間1.25m）である。各柱穴の形状･規模（長さ×幅×深さｍ）は、Ｐ１で略円形、0.2×0.2×0.17m、Ｐ２で楕円形、0.35




第18図　東側丘陵部西向き斜面部（E区）の遺構配置図




第19図　SZ14テラス状遺構




SK20
1：黄褐色（10ＹＲ5/6）砂質粘土を主とする人為的堆積層
2：黒褐色（10ＹＲ2/2）シルト質土を主とする
3：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質土と砂質粘土層の混合土

SK25
1：暗褐色（10ＹＲ3/3）地山粘土とシルト質土（第Ⅱ層か）の混合土

SK27
1：暗褐色（10ＹＲ3/4）シルト質土
2：黒褐色（10ＹＲ2/2）地山土を比較的多く含む
3：褐色（10ＹＲ4/4）地山土の二次堆積層

0　(1：40)　2m

**第20図　Ｄ・Ｅ区の掘立柱建物跡・柱列・土坑**

×0.25×0.31m、Ｐ３で円形、0.35×0.3×0.36mある。柱穴底面標高は、上位のＰ１と最下位のＰ３では1.15mの差が認められる。

**④ＳＫ20土坑**（第20図）

Ｅ区斜面最上部で検出された。東西方向の長さ1.15m、幅0.85mの略楕円形を呈する。確認面からの深さは0.45mである。堆積土は３層に分けられ、最上位の１層は地山粘土の純層であることから、ある時期に人為的に埋め戻されたと推測される。

**⑤SK23土坑**（第14・17図）

沢部であるＦ区で検出された。南北方向の長さ1.1m、幅0.5mの不整楕円形を呈する。深さは0.18mである。堆積土は暗褐色シルト質土単層であり、人為的に埋め戻されたと推測される。

**⑥SK25土坑**（第17・20図）

調査区東端、Ｄ区で検出された。東西方向の長さ1.5m、幅1.3mの円形を呈する。確認面からの深さは0.28mである。堆積土は暗褐色シルト質土１層であり、人為的に埋め戻されている。

**⑦SK27土坑**（第18・20図）

Ｅ区斜面中位、調査区南端で検出された。遺構の南半は調査区外に及ぶ。現況での規模は、東西1.45m、南北0.5mである。第Ⅲ層面から掘り込まれ、深さは0.75mである。堆積土は３層に分けられた。

（２）土坑墓

土坑墓はＥ区から６基検出された。うち、３基（SK16・17・19）は斜面上位で、残り３基（SK21・15・22）は斜面最下位でそれぞれが等高線に沿うように確認された。上位の３基は標高39.5～40.0mに、下位の３基は標高35.0～36.0mにまとまり、両者間は約13mの間隔がある（第18図参照）。

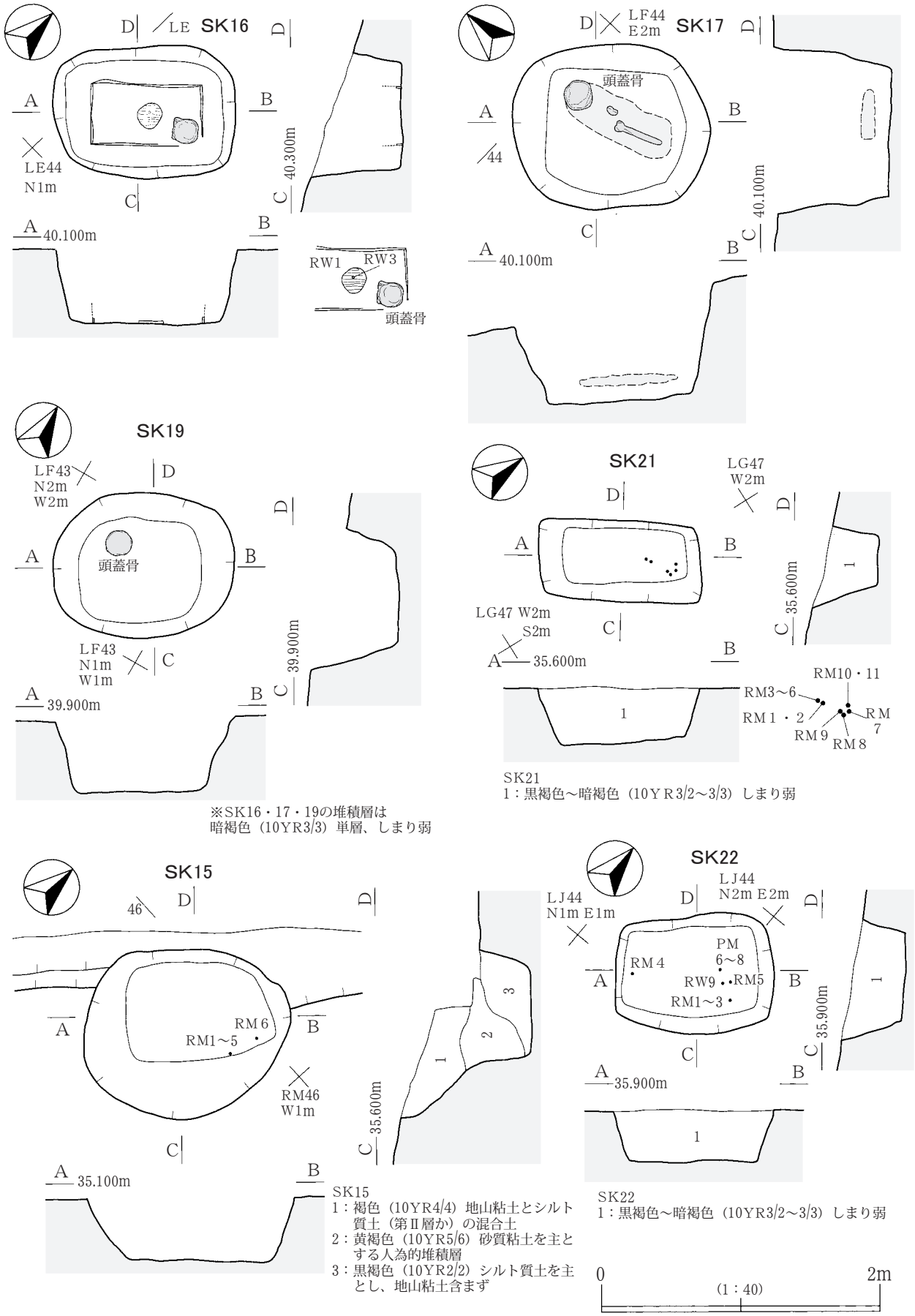
なお、出土遺物の詳細な情報は第３表に、出土人骨の分析（骨同定・炭素窒素同位体分析）については、第５章第２節にまとめている。

**①SK15土坑**（第21図、図版12上）

斜面下位の中央部で検出された。北東側に位置するSK21とは５m、南西側のSK22とは7.5mの距離をおいている。SZ14の東側壁面を切り込んで構築される。規模は、上面での長さ1.55m、幅1.2mの楕円状を呈する。底面での長さは1.05m、幅0.75m、確認面から底面までの深さは0.95mである。堆積土は３層に分けられた。いずれも人為的埋土である。遺物は土坑内北東部、壁寄りの底面直上の２か所から銭貨６点が出土した。一つは５点が固着状態で見つかり（RM１～５）、13㎝離れた位置から１点（RM６）が単独で確認された。判読された３点は寛永通寶（古寛永）である。銭貨以外の遺物は認められなかった。

**②SK16土坑**（第21図、図版10・11）

斜面上位側の北東部で検出された。規模は、上面での長さ1.3m、幅0.95mの隅丸長方形を呈し、長軸方向は等高線に平行となる。底面には長さ0.8m、幅0.45mの長方形を示す木棺側板（厚さ10㎜程）の痕跡が認められた。木棺内底面中央には底板の残欠（RW１）も確認された。確認面から底面までの深さは0.55mであり、木棺埋設部はここより0.1m掘り下げている。堆積土は暗褐色シルト質土単層であり、植物根を多く含み土に締まりがない。木棺の北東隅部には頭蓋骨が認められ、埋葬頭位が北東であったことが推測される。


SK16
LE
LE44
N1m
40.300m
40.100m
RW1
RW3
頭蓋骨
SK17
LF44
E2m
頭蓋骨
44
40.100m
SK19
LF43
N2m
W2m
頭蓋骨
LF43
N1m
W1m
39.900m
SK21
LG47
W2m
LG47 W2m
S2m
35.600m
RM10・11
RM3～6
RM１・２
RM９
RM８
RM７
※SK16・17・19の堆積層は
暗褐色（10YR3/3）単層、しまり弱
SK21
1：黒褐色～暗褐色（10ＹＲ3/2～3/3）しまり弱
SK15
46
RM６
RM1～5
RM46
W1m
35.100m
35.600m
SK15
1：褐色（10YR4/4）地山粘土とシルト質土（第Ⅱ層か）の混合土
2：黄褐色（10YR5/6）砂質粘土を主とする人為的堆積層
3：黒褐色（10YR2/2）シルト質土を主とし、地山粘土含まず
SK22
LJ44
N2m E2m
LJ44
N1m E1m
PM
6～8
RM４
RW9
RM5
RM1～3
35.900m
SK22
1：黒褐色～暗褐色（10YR3/2～3/3）しまり弱
0
2m
(1：40)

**第21図　近世の土坑墓**

**第3表　近世墓出土遺物一覧**

| 図版 | 番号 | 遺構名 | 遺物番号 | 種　別 | 名　称 | 細別 | 径 | 厚 | 重量 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 12 | 1 | ＳＫ15 | ＲＭ1 | 銭貨 | 寛永通寶 | 古寛永 | 24.5 | 1.4 | 2.5 | RM １～５、５枚固着出土 |
| | 2 | ＳＫ15 | ＲＭ2 | 銭貨 | 寛永通寶 | 古寛永 | 24.5 | 1.1 | 2.2 | うち、RM1・2のみ分離 |
| | | ＳＫ15 | ＲＭ3 | 銭貨 | 判読不能 | - | | 1.4 | | RM3 ～ 5固着状態で撮影 |
| | 3 | ＳＫ15 | ＲＭ4 | 銭貨 | 判読不能 | - | | | 7.5 | |
| | 4 | ＳＫ15 | ＲＭ5 | 銭貨 | 判読不能 | - | | | | 4は３の裏面 |
| | 5 | ＳＫ15 | ＲＭ6 | 銭貨 | 寛永通寶 | 古寛永 | | | | |
| 11 | 1 | ＳＫ16 | ＲＷ1 | 木片 | 長(148)×幅(129)×厚10 | | | | | ３の銅製品が密着 |
| | 2 | ＳＫ16 | ＲＭ2 | 銅製品 | 不明 | - | 21.5 | 1.2 | 1.6 | |
| | 3 | ＳＫ16 | ＲＭ3 | 銅製品 | 不明 | - | 23.3 | 1.6 | 3.2 | 1の木片上に載る |
| | 4 | ＳＫ16 | ＲＭ4 | 銅製品 | 不明 | - | 20.6 | 1.3 | 1.4 | |
| | 5 | ＳＫ16 | ＲＭ5 | 鉄製品 | 鉄釘か | | | | | |
| 13 | 1 | ＳＫ17 | ＲＭ1 | 銭貨 | 寛永通寶 | 古寛永 | 24.5 | 1.3 | 3.2 | |
| | 2 | ＳＫ17 | ＲＭ2 | 銭貨 | 寛永通寶 | 新寛永 | 23.5 | 1.7 | 2.7 | 木質付着 |
| | 3 | ＳＫ17 | ＲＭ3 | 銭貨 | 寛永通寶 | 新寛永 | 22.9 | 1.3 | 2.1 | |
| | 4 | | | | | | | | | 4は3の裏面、木質付着 |
| 12 | 1 | ＳＫ19 | ＲＭ1 | 鉄製品 | 鉄釘か | - | 長(65)×幅16×厚3 | | | 木質付着 |
| | 2 | ＳＫ19 | ＲＭ2 | 鉄製品 | 鉄釘か | - | 長(60)×幅11×厚5 | | | 木質付着 |
| | 3 | ＳＫ19 | ＲＭ3 | 鉄製品 | 鉄釘か | - | 長(49)×幅5×厚5 | | | |
| 14 | 1 | ＳＫ21 | ＲＭ1 | 銭貨 | 寛永通寶 | 古寛永 | 24.2 | 1.1 | 3.3 | RM1・2、2枚固着 |
| | 2 | ＳＫ21 | ＲＭ2 | 銭貨 | 寛永通寶 | 新寛永 | 23.5 | 1.2 | 2.5 | |
| | 3 | ＳＫ21 | ＲＭ3 | 銭貨 | 寛永通寶 | 秋田銭 | 23.5 | 1.0 | 2.3 | RM3 ～ 6、4枚固着 |
| | 4 | ＳＫ21 | ＲＭ4 | 銭貨 | 寛永通寶 | ？ | 24.0 | 1.0 | 3.0 | |
| | 5 | ＳＫ21 | ＲＭ5 | 銭貨 | 寛永通寶 | ？ | 22.5 | 1.1 | 2.5 | |
| | 6 | ＳＫ21 | ＲＭ6 | 銭貨 | 寛永通寶 | 新寛永 | 22.3 | 1.1 | 2.2 | |
| | 7 | ＳＫ21 | ＲＭ7 | 銭貨 | 寛永通寶 | 新寛永 | 23.0 | 1.5 | 2.5 | |
| | 8 | ＳＫ21 | ＲＭ8 | 銭貨 | 寛永通寶 | 新寛永 | 24.1 | 1.1 | 1.7 | |
| | 9 | ＳＫ21 | ＲＭ9 | 銭貨 | 寛永通寶 | 新寛永 | 23.2 | 0.9 | 1.2 | |
| | | | ＲＷ10 | 木片 | 長(70)×幅(27)×厚0.8 | | | | | 木片上に銭貨圧痕 |
| | 10 | ＳＫ21 | ＲＷ11 | 木片 | 長(32)×幅(24)×厚0.5 | | | | | |
| 15 | 1 | ＳＫ22 | ＲＭ1 | 銭貨 | 判読不能 | - | | | | 布付着 |
| | | ＳＫ22 | ＲＭ2 | 銭貨 | 判読不能 | - | | | | RM1 ～ 3、3枚固着 |
| | 2 | ＳＫ22 | ＲＭ3 | 銭貨 | 判読不能 | - | | | | 2は1の裏面 |
| | 3 | ＳＫ22 | ＲＭ4 | 銭貨 | 寛永通寶 | ？ | 25.0 | 1.2 | (1.9) | |
| | 4 | ＳＫ22 | ＲＭ5 | 銭貨 | 寛永通寶 | ？ | 24.9 | 1.5 | (2.0) | |
| | 5 | ＳＫ22 | ＲＭ6 | 銭貨 | 寛永通寶 | 新寛永 | 25.1 | | | 布付着 |
| | ～ | ＳＫ22 | ＲＭ7 | 銭貨 | 判読不能 | - | | | | RM6 ～ 8、3枚固着 |
| | 7 | ＳＫ22 | ＲＭ8 | 銭貨 | 判読不能 | - | | | | |
| | 8 | ＳＫ22 | ＲＷ9 | 木片 | | 長(39)×幅(34)×0.45 | | | | 銭貨圧痕付着 |

単位は　径・厚mm、重量g

遺物は３点の銅製品（ＲＭ２～４）と鉄製品１点（ＲＭ５）が出土した。ＲＭ３は木棺底板（ＲＷ１）上に貼りつくように、他３点（ＲＭ２・４・５）は頭蓋骨西側の堆積土中位より確認された。銅製品の種別は不明であるが、形状から推測すれば銭貨と同じ意図のもとで納められたとみられる。ＲＭ５は鉄釘とみられ、木棺を結合するための部品であった可能性もある。

**③SK17土坑**（第21図、図版13）

斜面上位側の中央部で検出された。北東側に位置するSK16とは3.5m、南西側のSK19とは3.0mの距離をおいている。規模は、上面での長さ1.45m、幅1.2mの楕円形を呈し、長軸方向は等高線に直交する。下面（底面）での長さは1.0m、幅0.9m、確認面から底面までの深さは0.85mである。堆積土の土質・状況はSK16に近似する。土坑内北隅で頭蓋骨が確認され、埋葬頭位は北西側（斜面下位寄り）であったと推測される。

人骨以外の出土遺物には、堆積土中位より３点の銭貨（ＲＭ１～３）があり、いずれも寛永通寶であった。２点には木質が付着しており（ＲＭ２・３）、銭貨は木棺上に置かれていた可能性がある。

**④SK19土坑**（第21図、図版12下）

斜面上位側の南西部で検出された。規模は、上面での長さ1.3m、幅1.05mの楕円形を呈し、長軸方向は等高線に平行する。下面（底面）での長さは0.9m、幅0.75m、確認面から底面までの深さは0.65mである。堆積土の土質・状況はSK15・16に近似する。土坑内北西隅で頭蓋骨が確認され、埋葬頭位は南西もしくは北西であったと推測される。

遺物は３点の鉄製品（RM１～３）があり、銭貨の出土はない。鉄製品は釘状を示し、２点（RM１・２）には木質が付着していることから、SK16RM５と同様に木棺を結合するための部品であった可能性が高い。

**⑤SK21土坑**（第21図、図版14）

斜面下位側の北東部で検出された。規模は、上面での長さ1.15m、幅0.6mの長方形を呈し、長軸方向は等高線に平行する。下面（底面）での長さは0.9m、幅0.4m、確認面から底面までの深さは0.45mである。堆積土は暗褐～黒褐色シルト質土単層であり、植物根を多く含み土に締まりに欠ける。人骨の出土はなく、土坑内の北東部寄りから銭貨９点と木片２点が発見された（RM１～９、RW10・11）。銭貨はいずれも寛永通寶であり、古寛永と新寛永が混じる。ＲＭ３は秋田・久保田藩で鋳造された銭である。銭貨の１点（RM９）は木片（RW10）上に密着して確認され、RW１とした木片も銭貨と同形に残存していることから、銭貨の一部は木棺上に置かれていたと推測される。

**⑥SK22土坑**（第21図、図版15）

斜面下位側の南西部で検出された。規模は、上面での長さ1.15m、幅0.85mの隅丸長方形を呈し、長軸方向は等高線に平行する。下面（底面）での長さは0.95m、幅0.65m、確認面から底面までの深さは0.45mである。堆積土の土質・状況はＳＫ21に近似する。人骨の出土はなく、土坑内の北東部と南西部から銭貨８点と木片が確認された（RM１～８、RW９）。銭貨は３点固着が２か所（RM１～３とRM６～８）、１点単独が２か所（RM４・５）である。３枚固着のものはいずれも布で覆われており、布袋に銭貨を入れて収めた可能性がある。一方で木片（RW９）には銭貨の圧痕が明瞭に残されており、木棺上に置かれていた銭貨も存在していたことになる。なお、RM６～８で確認された布糸目は１㎝あたり13本であった。

（３）Ｄ～Ｆ区遺構外出土遺物

本区域内における遺構外の出土遺物は、縄文時代の土器・石器、古代以降とみられる鉄滓、砥石、近世の銭貨である。

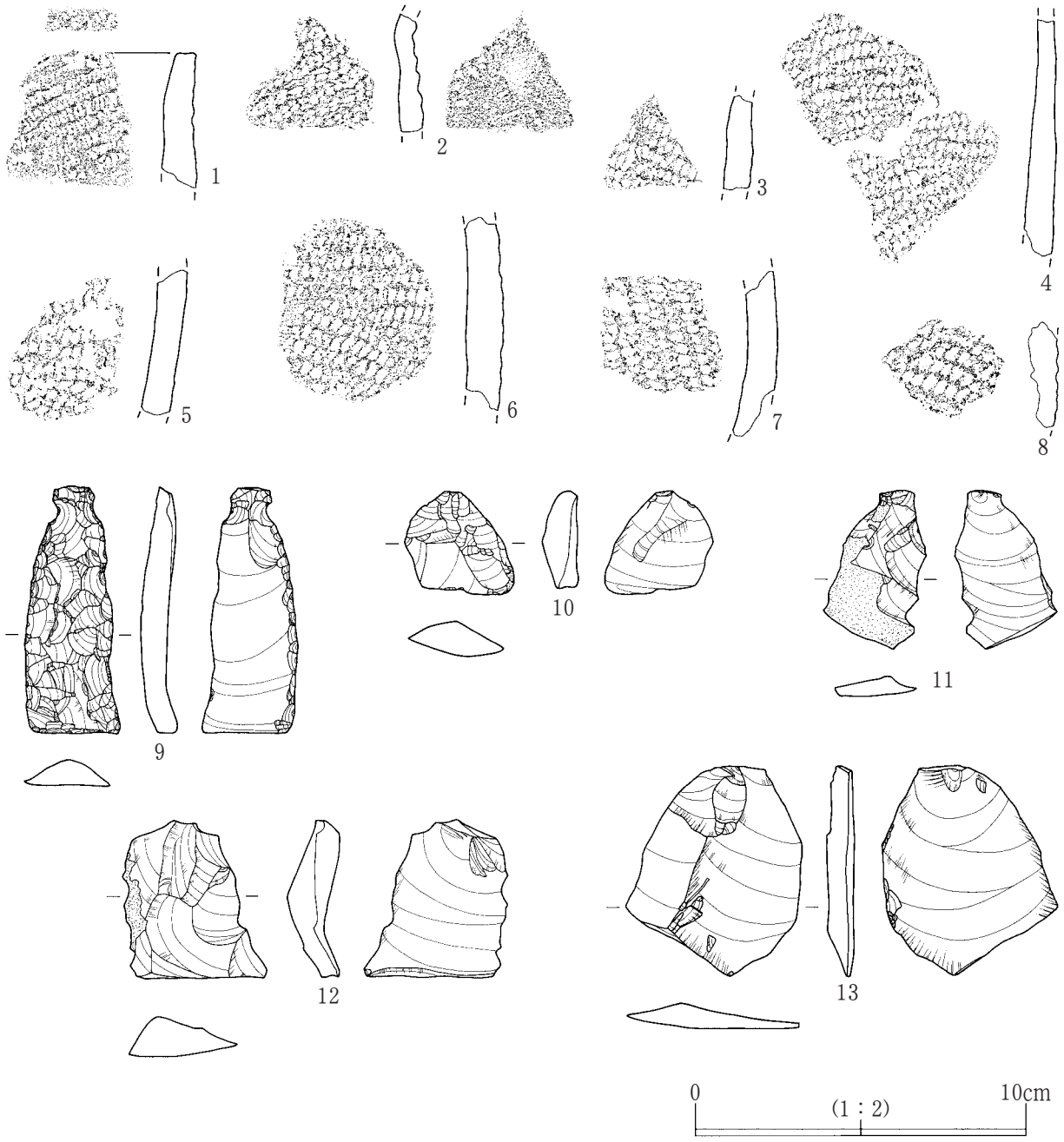
①縄文時代の遺物（第22図、図版18）

縄文時代の遺物は、土器片12点、石器・剥片15点である。土器は小破片のみであり、定型的な石器は１点のみである。点数は少ないものの、その分布域は、Ｄ～Ｅ区の３か所にまとまる（ブロック１～３、第17図参照）。土器片の文様・調整等は第22図下の観察表にまとめた。

〔ブロック１〕調査区東端部、Ｄ区からＥ区斜面上位（KR・KS47・48グリッド周辺）で土器片２点、石器・剥片３点が点在して確認された。１・２は胎土に少量の繊維を含み、２の縄文は末端の一部がループ状にも観察される。

９は縦型の石匙である。剥片を含めた石器類の石材は全て珪質頁岩である。

〔ブロック２〕Ｅ区斜面中位、標高38～39m程のLE46グリッド杭を中心とする径3.5m程の範囲内




| 番号 | 地区 | グリッド | ブロック | 遺物番号 | 種　別 | 施文、特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | Ｄ区 | 表採 | 1 | - | 縄文土器 | 外:0 段多条縄文（ＲＬ）、口唇部縄文回転施文か、内:ﾅﾃﾞ、少量の繊維含む |
| 2 | Ｄ区 | ＫＱ 47 | 1 | ＲＰ 175 | 縄文土器 | 外:複節縄文（ＬＲＬ）、内:縄文、胎土に繊維含む |
| 3 | Ｅ区 | ＬＤ 46 | 2 | ＲＰ 160 | 縄文土器 | 外:単節縄文（ＬＲ）、内:ﾅﾃﾞ、胎土緻密、焼成やや良好 |
| 4 | Ｅ区 | ＬＤ 45 | 2 | ＲＰ 165･166 | 縄文土器 | 外:単節縄文（ＬＲ）、内:ﾅﾃﾞ、胎土に径 1㎜の砂粒やや多く含む |
| 5 | Ｅ区 | ＬＤ 45 | 2 | ＲＰ 170 | 縄文土器 | 外:単節縄文（ＬＲ）、内:ﾅﾃﾞ、胎土に径 1･2㎜の砂粒多量に含む、外面にタール状付着物あり<br>焼成不良、５～８:同一個体か |
| 6 | Ｅ区 | ＬＤ 45 | 2 | ＲＰ 172 | 縄文土器 | |
| 7 | Ｅ区 | ＬＤ 45 | 2 | ＲＰ 171 | 縄文土器 | |
| 8 | Ｅ区 | ＬＤ 45 | 2 | ＲＰ 169 | 縄文土器 | |
| 番号 | 地区 | グリッド | ブロック | 遺物番号 | 器　種 | 法量（長×幅×厚㎝、重量ｇ） |
| 9 | Ｄ区 | ＫＳ 48 | 1 | ＲＱ 174 | 石匙 | 7.5 × 2.6 × 0.7㎝、21g |
| 10 | Ｅ区 | ＬＢ 48 | 3 | ＲＱ 164 | 剥片 | 3.1 × 3.3 × 1.1㎝、8g |
| 11 | Ｅ区 | ＬＢ 48 | 3 | ＲＱ 173 | 剥片 | 5.0 × 3.2 × 0.6㎝、7g |
| 12 | Ｅ区 | ＬＡ 47 | 3 | ＲＱ 167 | 剥片 | 4.8 × 4.4 × 1.3㎝、20g |
| 13 | Ｅ区 | 表採 | 3 | - | 剥片 | 6.5 × 5.3 × 0.8㎝、23g |

**第22図　Ｄ・Ｅ区出土遺物（縄文土器・石器・剥片）**

から土器片10点が確認された。５～８は胎土に粒径の大きな小礫を多く含み、内面のナデ調整が比較的雑になされる共通点があることから同一個体とみられる。

〔ブロック３〕Ｅ区斜面中位、ブロック２の北東約12mの範囲（LB・LC48グリッド周辺）から剥片12点が確認された。剥片の石材は全て珪質頁岩である。

各ブロックの形成時期は、土器片を観察する限りでは、ブロック１が前期初頭～前葉、ブロック２が後期前葉と類推される。ブロック３は剥片のみであり時期不詳であるが、石質と風化度合いはブロック１の石器・剥片に類似することから前期段階の可能性がある。また、ブロック１・３については、分布の中心が調査区外北側に及んでいると推測される。

②古代以降の遺物（図版17：６・７・11・15）

古代以降の遺物には、鉄滓１点、砥石１点、銭貨２点があり、Ａ・Ｃ区で確認された土師器は出土していない。

鉄滓はＥ区ＳＺ14テラス状遺構の外南側出土である（６）。磁着することから含鉄鉄滓とみられる。砥石はＦ区ＬＫ50グリッド出土であり、近辺では遺構の検出はない。７に示した上面を欠くが他の５面には磨面が認められる。現況での重量は183gである。

銭貨は寛永通寶１点、鉄銭１点である。11はＥ区の土坑墓であるSK22の西側約0.8m（SZ14寄り）で確認された寛永通寶である。出土地点周辺は近代以降の撹乱（不燃物の投棄）が認められる区域であり、銭貨はもともとSK22に副葬されていた可能性もある。11はＥ区斜面中位、SB18の北西側（LG45グリッド）から出土した鉄銭である。

**第23図　和田丘陵部北東側に残る段築**
北向き斜面部で観察される段築、
左手上部が和田公園（東→）〔20110414撮影〕

**第24図　発掘調査後に行われた工事で露頭した地層**
和田公園側から撮影。左手前が西側丘陵部（Ｂ区）、右手奥が東側丘陵部（Ｄ・Ｅ区）、中央の沢部（Ｆ区）が凹状にわずかに残る。Ｄ・Ｅ・Ｆ区では基盤層である笹岡層の砂岩〔Ｓｓｓ〕が広く分布し、Ｂ区側には同層下位の酸性凝灰岩〔Ｓｔｆ〕が認められる。後者は白色系の色調を示し、前者（褐色系）と明瞭に識別できる。第７図参照。〔20110414撮影〕

# 第５章　自然科学的分析

## 第１節　土壌のテフラ検出と鉱物分析
## －ＳＩ04竪穴建物跡カマド袖部掘形から検出された試料をもとに－

### １　はじめに

黒沼下堤下館跡は、秋田県秋田市河辺北野田高屋字黒沼下堤下に所在する遺跡である。調査では、古代の竪穴建物跡等が検出され、カマド袖部芯材の掘形底部から少量の白色を呈する砂質土壌が検出された。この建物跡は遺物が少なく、時期が明確でないため、この白色を呈する砂質土壌がテフラである場合には、建物跡の時期を判断する目安になると考えられた。

ここでは、この白色を呈する砂質土壌について、テフラ検出および鉱物組成を調べ、テフラの可能性について検討した。なお、火山ガラスが少量得られたことから、火山ガラスの屈折率測定も行った。

### ２　試料と方法

試料は、竪穴建物跡SI04のカマド袖部芯材の掘形底部から検出された白色を呈する砂質土壌２試料である（表１）。試料No.1は、塊状浅黄色土（５Ｙ7/4）混じり黄褐色土（2.5Ｙ7/4）、試料No.2は塊状浅黄色土（５Ｙ7/3）混じりオリーブ褐色土（2.5Ｙ4/6）である。分析の対象は、両試料とも塊状浅黄色土であるが、周りの褐色土も混在していた。

**表１　堆積物の採取位置とその特徴**

| 試料No. | 遺構 | 位置 | 堆積物の色調 | 堆積物の特徴 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | ＳＩ04 | カマド | 塊状浅黄色土（5Ｙ7/4）混じり黄褐色土（2.5Ｙ7/4） | 粘土質シルト |
| 2 | | | 塊状浅黄色土（5Ｙ7/3）混じりオリーブ褐色土（2.5Ｙ4/6） | シルト質粘土 |

各試料は、自然含水状態で約10g程度について、恒温乾燥機中で乾燥した後、秤量して含水率を求めた。分析試料は、自然含水状態で10～30g以上を秤量した後、1φ（0.5mm）、2φ（0.25mm）、3φ（0.125mm）、4φ（0.063mm）、の4枚の篩を重ね、振とう機を用いて流水下で湿式篩分けを行った。各篩残渣は、乾燥した後秤量して粒度組成を求めた。このうち4φ残渣（粒径0.125～0.063mm）については、重液（テトラブロモエタン、比重2.96）を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。重鉱物および軽鉱物は、簡易的に水浸プレパラートを作製し、偏光顕微鏡下で鉱物粒子を同定・計数して鉱物組成を求めた。なお、重鉱物は、斜方輝石（主に紫蘇輝石）、単斜輝石（主に普通輝石）、普通角閃石、磁鉄鉱（チタン鉄鉱を含む）、その他不明粒子に分類した。また、軽鉱物は、石英、長石、雲母、火山ガラス、不明粒子に分類・計数した。なお、火山ガラスは、町田・新井（2003）の分類基準に従って６タイプに分類した。

また、火山ガラスについて屈折率測定を行った。測定は、横山卓雄ほか（1986）等に従って、温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率を測定し、その結果の範囲（レンジ）および平均値を示した。

３　結果

以下に、各試料の篩分けした結果、4φ残渣中の軽鉱物と重鉱物の組成、火山ガラスの含有率とその形態的特徴、火山ガラスの屈折率測定結果等について述べる。

［試料No.1］

篩分けした結果、4φ篩残渣以上の岩砂率は22.79%であり、粘土分が多かった。なお、4φ残渣の割合は21.05%と高かった。4φ残渣中の軽鉱物と重鉱物では、重鉱物の割合が極端に低かった（表２）。4φ残渣中の軽鉱物組成では、丸い形状をした非晶質の褐色あるいは黒褐色粒子が多く（図版１ａ）、火山ガラスの含有量は14.73%と非常に低かった。火山ガラスの形態では、バブル（泡）型の平板状ガラスとＹ字状ガラスの割合が高かった。重鉱物組成では、普通角閃石や磁鉄鉱が多く検出された（表３）。火山ガラスの屈折率測定では、範囲1.4999-1.5024、平均1.5012であった（図１）。

その他の特徴としては、軽鉱物中において放散虫化石や海綿動物の骨格の一部である骨針化石が含まれていた（図版１ｆ）。

**表2　堆積物の含水率、岩砂率および粒度組成**

| 試料No. | 湿潤重量 (g) | 乾燥重量 (g) | 含水率 (重量%) | 含砂率 (重量%) | 砂粒分の粒度組成（重量g） | | | | 砂粒分の粒度組成（重量%） | | | | 4φ篩残渣（重量g） | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 1φ | 2φ | 3φ | 4φ | 1φ | 2φ | 3φ | 4φ | 軽鉱物 | 重鉱物 |
| 1 | 11.89 | 9.08 | 23.67 | 22.79 | 0.31 | 0.11 | 0.38 | 1.91 | 3.42 | 1.21 | 4.19 | 21.05 | 0.125 | 0.007 |
| 2 | 29.62 | 24.40 | 17.63 | 10.36 | 0.46 | 0.21 | 0.78 | 1.62 | 1.89 | 0.86 | 3.20 | 6.64 | 0.138 | 0.003 |

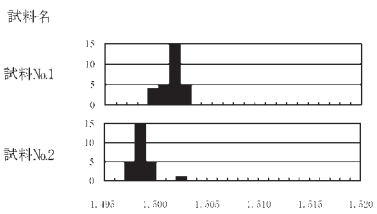
**表３　堆積物中の軽鉱物および重鉱物組成（上段：個数、下段：個数%）**

| 分類群 / 試料No. | 軽鉱物（粒数） | | | | | | | | | | | | 重鉱物（粒数） | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 雲母 | 石英 | 長石類 | 火山ガラス | | | | | | | 不明粒子 | 合計 | 単斜輝石 | 斜方輝石 | 普通角閃石 | 磁鉄鉱 | ｶﾝﾗﾝ石 | 不明粒子 | 合計 |
| | | | | バブル（泡）型 | | 軽石型 | | 急冷破砕型 | | 合計 | | | | | | | | | |
| | | | | 平板状 | Ｙ字状 | 繊維状 | スポンジ状 | フレーク状 | 塊状 | | | | | | | | | | |
| 1 | 0 | 10 | 73 | 15 | 15 | 6 | 1 | 1 | 0 | 38 | 137 | 258 | 25 | 13 | 47 | 46 | 0 | 71 | 202 |
| 2 | 0 | 4 | 66 | 5 | 6 | 6 | 6 | 0 | 0 | 23 | 124 | 217 | 19 | 10 | 48 | 83 | 0 | 53 | 213 |
| 分類群 / 試料No. | 軽鉱物（%） | | | | | | | | | | | | 重鉱物（%） | | | | | | |
| | 雲母 | 石英 | 長石類 | 火山ガラス | | | | | | | 不明粒子 | 合計 | 単斜輝石 | 斜方輝石 | 普通角閃石 | 磁鉄鉱 | ｶﾝﾗﾝ石 | 不明粒子 | 合計 |
| | | | | バブル（泡）型 | | 軽石型 | | 急冷破砕型 | | 合計 | | | | | | | | | |
| | | | | 平板状 | Ｙ字状 | 繊維状 | スポンジ状 | フレーク状 | 塊状 | | | | | | | | | | |
| 1 | - | 3.88 | 28.29 | 5.81 | 5.81 | - | 0.39 | 0.39 | - | 14.73 | 53.10 | 100.00 | 12.38 | 6.44 | 23.27 | 22.77 | - | 35.15 | 100.00 |
| 2 | - | 1.84 | 30.41 | 2.30 | 2.76 | 2.76 | 2.76 | - | - | 10.60 | 57.14 | 100.00 | 8.92 | 4.69 | 22.54 | 38.97 | - | 24.88 | 100.00 |

［試料No.2］

篩分けした結果、4φ篩残渣以上の岩砂率は10.36%であり、粘土分が試料No.1より多かった。4φ残渣中の軽鉱物と重鉱物では、重鉱物の割合が極端に低かった（表2）。4φ残渣中の軽鉱物組成では、試料No.1と同様に丸い形状をした非晶質の褐色あるいは黒褐色粒子が多く（図版２ａ）、火山ガラスの含有量は10.60%と非常に低かった。火山ガラスの形態では、バブル（泡）型ガラスのほか、軽石型ガラスも含まれていた。重鉱物組成では、普通角閃石や磁鉄鉱が多く検出された（表3）。火山ガラスの屈折率測定では、範囲1.4975-1.5022、平均1.4986であった（図1）。

その他の特徴としては、軽鉱物中において放散虫化石や海綿動物の骨格の一部である骨針化石が含まれていた（図版２ａ・２ｄ）。




| 範囲 (range) | 平均 (mean) | 計数 |
|---|---|---|
| 1.4999 - 1.5024 | 1.5012 | 30 |
| 1.4975 - 1.5022 | 1.4986 | 30 |

**図１ 4φ残渣中の火山ガラスの屈折率測定結果**

## ４　考察

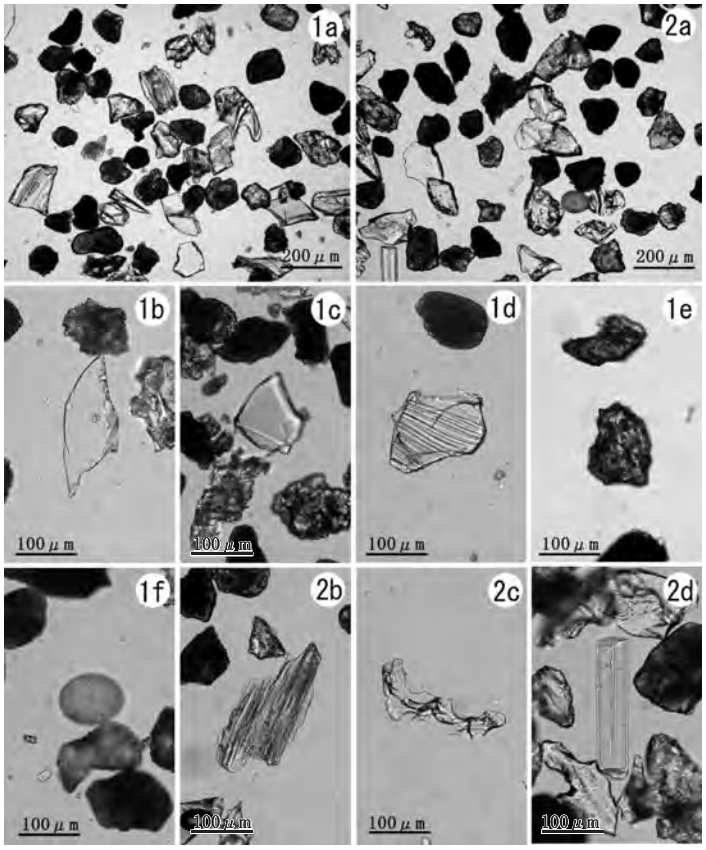
竪穴建物跡SI04のカマド袖部芯材の掘形底部から検出された白色を呈する砂質土壌２試料について、湿式篩分けを行い、鉱物分析の特徴と火山ガラスの屈折率測定を行った。

その結果、試料No.1および試料No.2とも、火山ガラスの割合が低く、軽鉱物中において火山ガラス以外の非晶質の粒子のほか、放散虫化石や骨針化石などが含まれ、少なくとも一次堆積したテフラではないと判断された。なお、試料に含まれていた火山ガラスは、火山ガラスの形態や屈折率の範囲が異なっていた。調査の知見では、SI04は古代の竪穴建物跡と考えられているが、古代に相当するテフラである白頭山苫小牧テフラ（Ｂ-Tm）がバブル型および軽石型ガラスからなり屈折率の範囲1.511-1.522、十和田aテフラ（To-ａ）が軽石型ガラスからなり屈折率の範囲1.496-1.508であることから、いずれのテフラも該当しない。

火山ガラスの屈折率の範囲が比較的まとまった値を示すことから、単一テフラの可能性がある。試料中に放散虫化石や骨針化石を含むことから、第三紀鮮新世（笹岡層など；藤岡ほか，1977）の基盤の海成層の特徴と推定されることから、これら基盤層中のテフラ層（凝灰岩）に由来するものと考えられる。

## ５　おわりに

竪穴建物跡SI04のカマド袖部芯材の掘形底部から検出された白色を呈する砂質土壌２試料について、湿式篩分けを行い、鉱物分析の特徴と火山ガラスの屈折率測定を行った。残念ながら、いずれの試料も火山ガラスは少なく、また一次テフラではなかった。これら火山ガラスは、基盤層中のテフラ層に由来する火山ガラスと推定された。




**図版1　竪穴建物跡SI04カマド袖部底部土壌中の4φ残渣と軽鉱物の顕微鏡写真**

1a.試料No.1の4φ残渣
2a.試料No.2の4φ残渣
1b.バブル型平板状ガラス（試料No.1）
1c.バブル型Y字状ガラス（試料No.1）
1d.軽石型繊維状ガラス（試料No.1）
1e.急冷破砕型フレーク状ガラス（試料No.1）
1f.放散虫化石（試料No.1）
2b.軽石型繊維状ガラス（試料No.2）
2c.軽石型スポンジ状ガラス（試料No.2）
2d.骨針化石（試料No.2）

引用文献

藤岡一男・大沢　農・高安泰助・池辺　穣（1977）秋田地域の地質．地質調査所，p75
町田　洋・新井房夫（2003）新編　火山灰アトラス．336p, 東京大学出版会．
横山卓雄・檀原　徹・山下　透（1986）温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定．第四紀研究，25，21-30.

## 第２節　骨同定・炭素窒素同位体分析

はじめに

黒沼下堤館跡は、梵字川左岸に位置し、近世土坑墓が６基検出され、この内の３基から土葬された人骨が確認された。今回、埋葬された人骨の年齢、性別に関する情報を得るために、人骨の同定、および炭素窒素安定同位体分析を実施した。

Ⅰ.骨同定

1.試料

試料は、SK 16、SK 17、SK 19 で出土した人骨である。

2.分析方法

試料に付着した砂分や泥分を乾いた筆・竹串等で静かに除去する。一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合する。試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。なお、各部位の名称については、図１に示す。

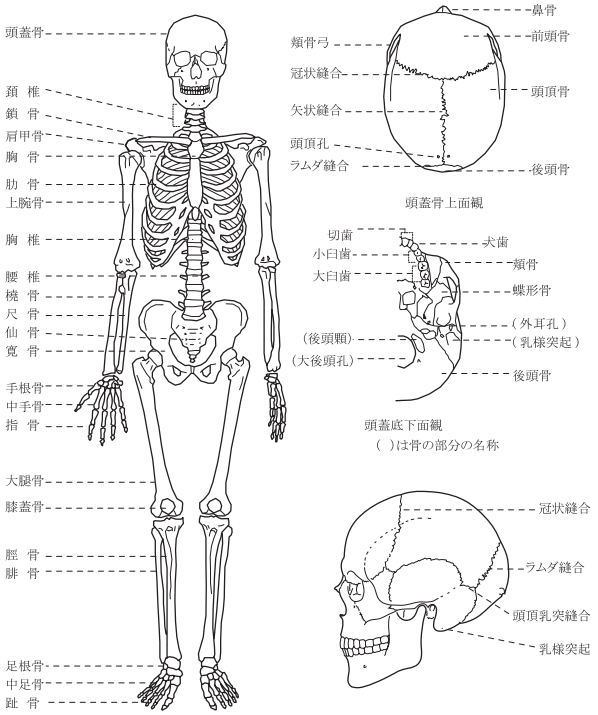



**図1．人体骨格各部の名称**

3.結果および考察

同定結果を表１に、歯式を表２に示す。以下、遺構ごとに埋葬者について記す。なお、年齢に関しては、壮年が 20 ～ 39 歳程度、熟年が 40 ～ 59 歳程度を示す。

SK 16 は、保存状態が悪い。頭蓋骨、左右側頭骨、左上顎骨、蝶形骨、下顎骨、歯牙、第１頸椎、肋骨、右肩甲骨、右上腕骨、右寛骨、大腿骨、脛骨、左踵骨などが確認される。頭蓋骨は、上顎～前頭骨～左右頭頂骨が残る。本人骨は、冠状縫合および矢状縫合の内側が閉じかけていることから、壮年後半～熟年前半と推定される。性別は、四肢骨が華奢で、眉上隆起が発達せず、寛骨の大坐骨切痕の形状から女性と判断される。

SK 17 は、比較的保存状態が良好で多くの部位がみられる。頭蓋骨、右頭頂骨、右側頭骨、下顎骨、第２～７頸椎、第１～12 胸椎、第１～２腰椎、右第１肋骨、肋骨、左鎖骨、左肩甲骨、左上腕骨、左橈骨、左尺骨、指骨（基節骨）、左右寛骨、左右大腿骨、左右膝蓋骨、左右脛骨、腓骨、右踵骨、左右距骨、右内側楔状骨、右外楔側状骨、第１中足骨、中足骨などが確認される。本人骨は、冠状縫合および矢状縫合の内側が閉じかけていることから、壮年後半～熟年前半と考えられる。性別は、眉上隆起・外後頭骨隆起が発達することから男性と判断される。

## 表 1. 骨同定結果 (1)

| 遺構 | 日付 | 種類 | 部位 | 左 右 | 部分 | 数量 | 被熱 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ＳＫ 16 | 101006 | ヒト | 頭蓋骨 | | 上顎～前頭骨～左右頭頂骨 | 1 | | |
| | | | 側頭骨 | 左 | 錐体部 | 1 | | |
| | | | | 右 | 錐体部 | 1 | | |
| | | | 上顎骨 | 左 | 破片 | 1 | | Ｉ１-Ｍ１植立 |
| | | | 上顎歯牙 | 右 | 中切歯 | 1 | | |
| | | | | 右 | 側切歯 | 1 | | |
| | | | 蝶形骨 | | 破片 | 1 | | |
| | | | 下顎骨 | 左 | 破片 | 1 | | Ｍ１- ３植立 |
| | | | 下顎歯牙 | 左 | 第１小臼歯 | 1 | | |
| | | | | 左 | 第２小臼歯 | 1 | | |
| | | | | 左 | 側切歯 | 1 | | |
| | | | | 左 | 犬歯 | 1 | | |
| | | | 第１頚椎 | | 破片 | 1 | | |
| | | | 肋骨 | | 破片 | 1 | | |
| | | | 肩甲骨 | 右 | 破片 | 1 | | |
| | | | 上腕骨 | 右 | 両端欠 | 1 | | |
| | | | 寛骨 | 右 | 破片 | 1 | | |
| | | | 大腿骨 | | 破片 | 2 | | |
| | | | 脛骨 | | 破片 | 1 | | |
| | | | 足根骨 ( 踵骨 ) | 左 | 破片 | 1 | | |
| | | | 足根骨 | | 破片 | 2 | | |
| | | | 四肢骨 | | 破片 | 2 | | |
| | | | 不明 | | 破片 | 13.8g | | |
| ＳＫ 17 | 101006 | ヒト | 頭頂骨 | 右 | 破片 | 1 | | |
| | | | 側頭骨 | 右 | 破片 | 1 | | |
| | | | 下顎骨 | | 左右下顎枝欠 | 1 | | |
| | | | 頭蓋骨 | | 破損 | 1 | | |
| | | | | | 破片 | 3 | | |
| | | | 第２頚椎 | | 破片 | 1 | | |
| | | | 第３頚椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第４頚椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第５頚椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第６頚椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第７頚椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第１胸椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第２胸椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第３胸椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第４胸椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第５胸椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第６胸椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第７胸椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第８胸椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第９胸椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第 10 胸椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第 11 胸椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第 12 胸椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第１腰椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第２腰椎 | | 破損 | 1 | | |
| | | | 第１肋骨 | 右 | 破片 | 1 | | |
| | | | 肋骨 | | 破片 | 14 | | |
| | | | 鎖骨 | 左 | 両端欠 | 1 | | |
| | | | 肩甲骨 | 左 | 破片 | 1 | | |
| | | | 上腕骨 | 左 | 近位端欠 | 1 | | |
| | | | 橈骨 | 左 | 遠位端欠 | 1 | | |
| | | | 尺骨 | 左 | 遠位端欠 | 1 | | |
| | | | 指骨 ( 基節骨 ) | | ほぼ完存 | 1 | | |
| | | | 寛骨 | 左 | 破片 | 1 | | |
| | | | | 右 | 破片 | 1 | | |
| | | | 大腿骨 | 左 | 近位端欠 | 1 | | |
| | | | | 右 | 遠位端欠 | 2 | | |
| | | | 膝蓋骨 | 左 | 破片 | 1 | | |
| | | | | 右 | 破片 | 1 | | |
| | | | 脛骨 | 左 | 両端破損 | 1 | | |
| | | | | 右 | 骨体・遠位端破損 | 1 | | |
| | | | 腓骨 | | 破片 | 1 | | |
| | | | 足根骨 ( 踵骨 ) | 右 | 破片 | 1 | | |
| | | | 足根骨 ( 距骨 ) | 左 | 破片 | 1 | | |
| | | | | 右 | ほぼ完存 | 1 | | |
| | | | 足根骨 ( 内側楔状骨 ) | 右 | 破損 | 1 | | |
| | | | 足根骨 ( 外楔側状骨 ) | 右 | 破損 | 1 | | |
| | | | 第１中足骨 | | 破片 | 1 | | |
| | | | 中足骨 | | 遠位端欠・近位端破損 | 1 | | |
| | | | 肋骨 / 四肢骨 | | 破片 | 1 | | |
| | | | 不明 | | 破片 | 16.3g | | |

表 1. 骨同定結果 (2)

| 遺構 | 日付 | 種類 | 部位 | 左 右 | 部分 | 数量 | 被熱 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ＳＫ 19 | 101006 | ヒト | 前頭骨 | | 破片 | 1 | | |
| | | | 頭頂骨 | 左 | 破片 | 1 | | |
| | | | | 右 | 破片 | 1 | | |
| | | | 側頭骨 | 左 | 錐体 | 1 | | |
| | | | | 左 | 破片 | 1 | | |
| | | | | 右 | 破片 | 1 | | |
| | | | 後頭骨 | | 破片 | 1 | | |
| | | | 頬骨 | 左 | 破片 | 1 | | |
| | | | 上顎骨 | 左 | 破片 | 1 | | |
| | | | 上顎歯牙 | 右 | 側切歯 | 1 | | |
| | | | 下顎骨 | | 破片 | 1+ | | |
| | | | 頭蓋骨 | | 破片 | 5 | | |
| | | | 上腕骨 | | 破片 | 1 | | |
| | | | 第４中手骨 | 右 | 近位端破損 | 1 | | |
| | | | 第５中手骨 | 右 | ほぼ完存 | 1 | | |
| | | | 大腿骨 | 左 | 両端欠 | 1 | | |
| | | | | 右 | 両端欠 | 1 | | |
| | | | 脛骨 | 右 | 近位端欠 | 1 | | |
| | | | 足根骨（距骨） | 右 | 破片 | 1 | | |
| | | | 足根骨（踵骨） | 右 | 破片 | 1 | | |
| | | | 第１中足骨 | 左 | 破損 | 1 | | |
| | | | | 右 | 遠位端欠 | 1 | | |
| | | | 四肢骨 | | 破片 | 1 | | |
| | | | 不明 | | 破片 | 22.1g | | |

表 2. 出土人骨の歯式

| ＳＫ 16 | 右 | | | | | | | | 左 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | Ｍ３ | Ｍ２ | Ｍ１ | Ｐ２ | Ｐ１ | Ｃ | Ｉ２ | Ｉ１ | Ｉ１ | Ｉ２ | Ｃ | Ｐ１ | Ｐ２ | Ｍ１ | Ｍ２ | Ｍ３ |
| 上顎 | | | | | | | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | × | × |
| 下顎 | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ |
| ＳＫ 17 | 右 | | | | | | | | 左 | | | | | | | |
| | Ｍ３ | Ｍ２ | Ｍ１ | Ｐ２ | Ｐ１ | Ｃ | Ｉ２ | Ｉ１ | Ｉ１ | Ｉ２ | Ｃ | Ｐ１ | Ｐ２ | Ｍ１ | Ｍ２ | Ｍ３ |
| 上顎 | × | ◎ | ◎ | × | × | ◇ | × | × | × | × | ◇ | ◇ | × | ◎ | ◎ | × |
| 下顎 | | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | |
| ＳＫ 19 | 右 | | | | | | | | 左 | | | | | | | |
| | Ｍ３ | Ｍ２ | Ｍ１ | Ｐ２ | Ｐ１ | Ｃ | Ｉ２ | Ｉ１ | Ｉ１ | Ｉ２ | Ｃ | Ｐ１ | Ｐ２ | Ｍ１ | Ｍ２ | Ｍ３ |
| 上顎 | | | | ○ | | | | | × | ◇ | ◎ | ◎ | × | × | ◎ | ◎ |
| 下顎 | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | × | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ |

凡例）◇：歯槽開放　◎：植立　○：遊離

ＳＫ 19 は、保存状態が若干悪く、接合も十分にできない。前頭骨、左右頭頂骨、左右側頭骨、後頭骨、左頬骨、左上顎骨、右上顎歯牙、下顎骨、頭蓋骨、上腕骨、右第４中手骨、右第５中手骨、左右大腿骨、右脛骨、右距骨、右踵骨、左右第１中足骨などが確認される。本人骨は、冠状縫合および矢状縫合の内側が閉じかけていることから、壮年後半～熟年前半と考えられる。性別は、眉上隆起・外後頭骨隆起が顕著でなく、前頭骨縫合が存在すること、四肢骨が華奢であることなどから女性的である。

## Ⅱ．炭素窒素同位体分析

### 1. 試料

試料は、ＳＫ 16、ＳＫ 17、ＳＫ 19 で出土した人骨の内、部位不明の破片である。ＳＫ 16 が 2.39g、ＳＫ 17 が 1.58g、ＳＫ 19 が 4.69g を使用し、コラーゲン抽出後に同位体分析を実施した。

### 2. 分析方法

#### (1) コラーゲン抽出

試料は骨であるためコラーゲン抽出（ＣＥｘ）を行う。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、

ブラシ等を使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。試料をビーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。

水酸化ナトリウム溶液（0.2 N）を試料と超純水の入ったビーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで１時間ごとに水酸化ナトリウム溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉砕用セルに入れ、粉砕する。リン酸塩除去のために試料を透析膜に入れて１Ｎの塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、沈殿物を凍結乾燥させる。沈殿物を超純水に入れて、90℃で保湿した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。

（2）炭素・窒素安定同位体比測定

抽出したコラーゲンの炭素・窒素安定同位体比（$\delta^{13}$C、$\delta^{15}$N）の測定を行う。測定は、ガス化前処理装置に Flash EA1112（Thermo Fisher Scientific 社製）、安定同位体比質量分析計に DELTA V（Thermo Fisher Scientific 社製）を用いる。

3. 結果および考察

結果を表３に示す。炭素と窒素の安定同位体比（$\delta^{13}$C、$\delta^{15}$ N）は、標準試料からの偏差として示され、単位は千分率（‰）である。各人骨の$\delta^{13}$C は -19.94 ～ -23.11‰（平均 -21.12‰）、また$\delta^{15}$N は 0.87 ～ 9.27‰（平均 6.38‰）を示す。

**表3. 炭素・窒素安定同位体比**

| 遺構 | δ 13C（‰） | δ 15N（‰） |
|---|---|---|
| SK16 | -19.94 | 8.99 |
| SK17 | -23.11 | 0.87 |
| SK19 | -20.30 | 9.27 |
| 平均 | -21.12 | 6.38 |

南川（2000,2001）および Yoneda ほか（2002）によって縄文時代、弥生時代、続縄文時代、古墳時代および擦文時代の人骨より得られた安定同位体比のデータがある。縄文時代のデータは、北海道沿岸、東北地方沿岸、関東地方沿岸、関東地方内陸、中部地方内陸、近畿地方沿岸、中国地方沿岸、中国地方内陸および九州地方沿岸の９地域 17 遺跡から出土した人骨の安定同位体比である。また、弥生、続縄文、古墳および擦文の各時代のデータは、北海道、中国地方、四国地方および九州地方の４地域６遺跡から出土した人骨の安定同位体比である。なお、１遺跡で複数人骨の安定同位体比が得られている場合は、それらの平均値である（表４）。また、これらのデータと今回分析を行った本遺跡試料の安定同位体比を図２に示す。ところで、人骨コラーゲンと利用食物との間で同位体分別が起きることが知られており、米田ほかによると$\delta^{13}$C で 4.5‰、$\delta^{15}$N で 3.5‰、人骨コラーゲンが利用食物と比べ高い値を示すとされる（Yoneda et al.,2002）。これを踏まえて、図３に人骨の安定同位体比を利用食物の安定同位体比に補正した結果を示す。図中の円で示された利用食物の安定同位体比分布範囲は、米田らの論文（Yoneda et al.,2002；米田 ,2004）に拠る。これによると、縄文時代、北海道では海獣など海産物に強く依存し、本州内陸部では草食動物やＣ３植物など陸産物に依存していた傾向が読み取れる。

これらによると、SK 16・SK 19 とSK 17 で大きな違いがみえる。すなわち、壮年後半～熟年前半の女性ないし女性の可能性があるSK 16 とSK 19 は縄文時代関東東北沿岸部のデータに近く、草食動物や海生魚類を中心とした食物摂取があった可能性が高い。これに対して、壮年後半～熟年前半の男性であるSK 17 はやや離れた場所に位置し、Ｃ３植物など植物質を主体とした摂取であった可能性がある。このような食性の違いが何に起因するのか、今後の検討課題であり、興味深い点である。

**表4. 比較対象の炭素・窒素安定同位体比**

| 遺跡または集団名 | 地域 | | 時期 | 安定同位体比（‰） | | 備考 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | δ13C PDB | δ15N AIR | | |
| 北黄金貝塚 | 北海道沿岸 | 北海道 | 縄文早～前期 | -14.2 | 18.2 | 平均,n:9,10 | 南川2001 |
| 臼尻B | | | 縄文中期 | -14.3 | 16.8 | 平均,n:2 | 南川2001 |
| 高砂貝塚 | | | 縄文晩期中葉 | -14.2 | 17.1 | 平均,n:22,21 | 南川2001 |
| 中沢浜貝塚 | 東北沿岸 | 岩手県 | 縄文後期 | -16.5 | 10.3 | 平均,n:7 | 南川2001 |
| 大洞貝塚 | | 宮城県 | 縄文後期 | -16.4 | 12.6 | 平均,n:5 | 南川2001 |
| 三貫地貝塚 | | 福島県 | 縄文後期 | -18.3 | 8.6 | 平均,n:18,17 | 南川2001 |
| 古作貝塚 | 関東沿岸 | 千葉県 | 縄文後期 | -17.7 | 10.5 | 平均,n:20 | 南川2001 |
| 加曽利南貝塚 | | | 縄文後期 | -18.7 | 8.7 | 平均,n:7 | 南川2001 |
| 加曽利北貝塚 | | | 縄文後期 | -18.9 | 8.8 | 平均,n:3,5 | 南川2001 |
| 冬木 | 関東内陸 | 茨城県 | 縄文後期 | -20.1 | 7.3 | 平均,n:7 | 南川2001 |
| 栃原岩陰 | 中部内陸 | 長野県 | 縄文早期 | -19.9 | 7.1 | 平均,n:6 | Yoneda et al.2002 |
| 北村 | | | 縄文後期 | -20.6 | 6.2 | 平均,n:5 | 南川2001 |
| 羽沢 | | 岐阜県 | 縄文後期 | -18.5 | 10.5 | 平均,n:10 | 南川2000 |
| 佃 | 近畿沿岸 | 兵庫県 | 縄文後期 | -19.3 | 10.1 | 平均,n:1 | 南川2000 |
| 津雲貝塚 | 中国沿岸 | 岡山県 | 縄文後期 | -15.9 | 12.7 | 平均,n:8 | 南川2001 |
| 寄倉岩陰 | 中国内陸 | 広島県 | 縄文後期 | -19.3 | 8.7 | 平均,n:11,10 | 南川2001 |
| 轟 | 九州沿岸 | 熊本県 | 縄文前期 | -16.3 | 13.1 | 平均,n:15,16 | 南川2001 |
| 有珠 | 北海道 | 北海道 | 続縄文 | -13.3 | 18.1 | 平均,n:8,9 | 南川2001 |
| 末広 | | | 擦文中期 | -13.9 | 16.7 | n:1 | 南川2001 |
| 土井ヶ浜 | 中国沿岸 | 山口県 | 弥生前・中期 | -18.5 | 10.5 | 平均,n:5,4 | 南川2001 |
| 松山東山 | 四国 | 愛媛県 | 古墳時代 | -20.1 | 11.6 | 平均,n:4 | 南川2001 |
| 西多賀 | | 徳島県 | 古墳時代 | -18.3 | 10.7 | n:1 | 南川2001 |
| 北部九州甕棺 | 九州 | 福岡県 | 弥生 | -19.6 | 12.6 | 平均,n:5,4 | 南川2001 |

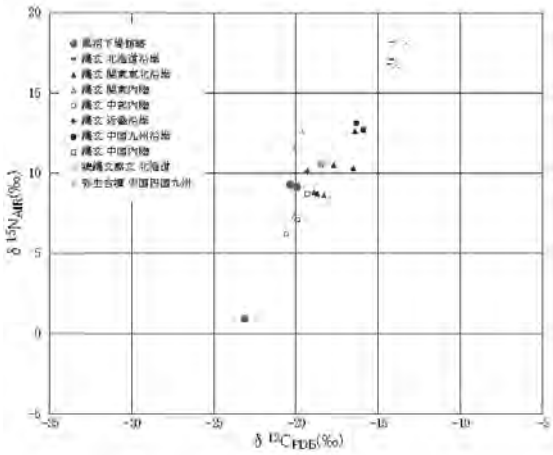



**図 2. 人骨の炭素・窒素安定同位体比**

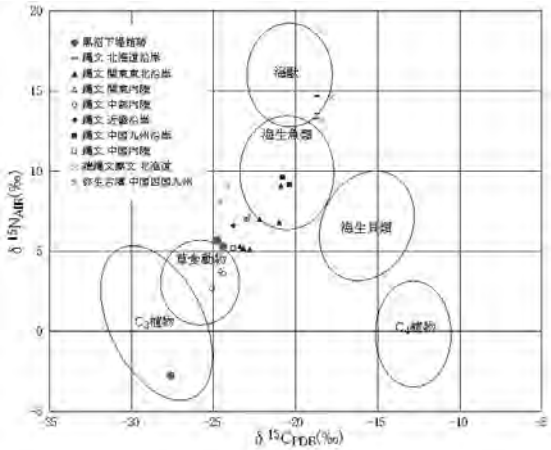



**図 3. 植物利用推定に補正した炭素・窒素安定同位体比**

引用文献

南川雅男 ,1993, アイソトープ食性解析法 , 第四紀試料分析法 , 東京大学出版会 ,404-414.

南川雅男 ,2000, 先史人は何を食べていたか . 考古学と化学をむすぶ , 東京大学出版会 ,195-221.

南川雅男 ,2001, 炭素・窒素同位体分析により復元した先史日本人の食生態 . 国立歴史民俗博物館研究報告 ,86,333-357.

南川雅男 ,2003, 炭素・窒素同位体による食性分析 . 環境考古学マニュアル , 同成社 ,283-292.

Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa ,2002, Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44（2）, 549-557.

米田穣 ,2004, 炭素・窒素同位体による古食性復元 . 環境考古学ハンドブック , 朝倉書店 ,411-418.

**図版１　出土骨**

1. 脳頭蓋(SK16)　2. 右上腕骨(SK16)　3. 大腿骨(SK16)
4. 大腿骨(SK16)　5. 脛骨(SK16)　6. 脳頭蓋(SK17)
7. 下顎骨(SK17)　8. 左上腕骨(SK17)　9. 左橈骨(SK17)
10. 左尺骨(SK17)　11. 右大腿骨(SK17)　12. 右大腿骨(SK17)
13. 右脛骨(SK17)　14. 左脛骨(SK17)　15. 前頭骨(SK19)
16. 右頭頂骨(SK19)　17. 左頭頂骨(SK19)　18. 後頭骨(SK19)
19. 左側頭骨(SK19)　20. 右側頭骨(SK19)　21. 上顎骨(SK19)
22. 右大腿骨(SK19)　23. 左大腿骨(SK19)

# 第６章　総括

平成20年に新発見された黒沼下堤下館跡は、丘陵斜面部において階段状の人工地形（段築）が複数かつ広域に認められたことから中世城館跡として登録された。平成22年には国道13号拡幅事業に伴い、推定範囲50,800㎡の館跡の北東部4,650㎡を対象に発掘調査が実施された。

その結果、縄文時代（前期・後期）の土器・石器、古代（平安時代）の竪穴建物跡・柱列等、近世（江戸時代）の土坑墓等が検出された。

その一方で段築の形成時期については、一部で古代に遡る例（Ｃ１段）も確認できたが、遺跡全域に広がりをもつ段築が全て古代であるのか、中世期の遺構・遺物は未発見ではあるものの多くは中世に属するのか定かではない。近世以降の可能性も否定できない。いずれにしろ、今回の調査結果をもって黒沼下堤下館跡が「中世城館跡」であったのか否かについての判断はできない。

本章では、調査により得られた遺構・遺物について、縄文時代、古代、近世にわけてまとめる。

## １　縄文時代

縄文時代の明確な遺構は確認できなかったが、西側丘陵頂部（Ａ区）のSK06・08は断面形状や堆積土を考慮すれば、該期のフラスコ状（袋状）土坑であった可能性がある。

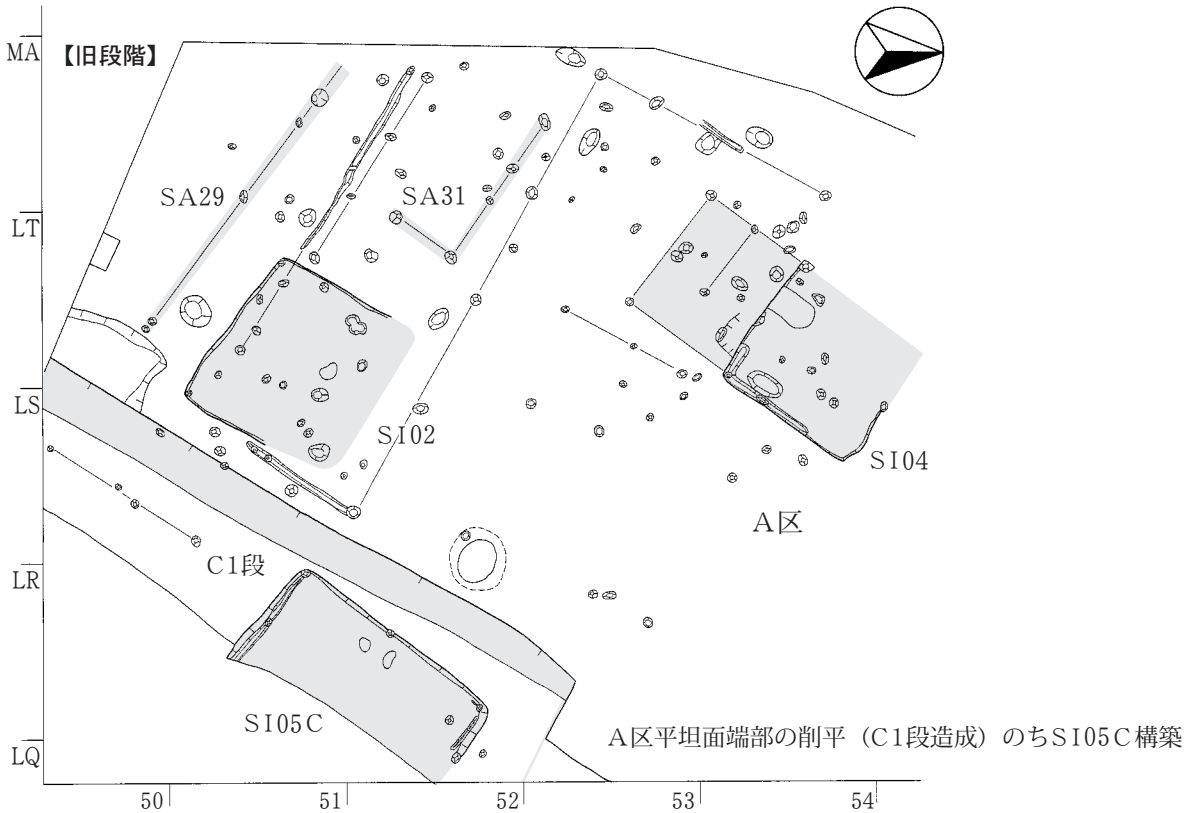
遺物は東側丘陵部（Ｄ・Ｅ区）でのみ少量確認され、前期初頭～前葉と後期前葉の２時期における場の利用が予想された。第３図幅中に所在する遺跡で当該期の遺構・遺物が確認された遺跡は次のとおりである。なお、遺跡名の次の（番号）は秋田市遺跡番号を示し、第１表と対応する。

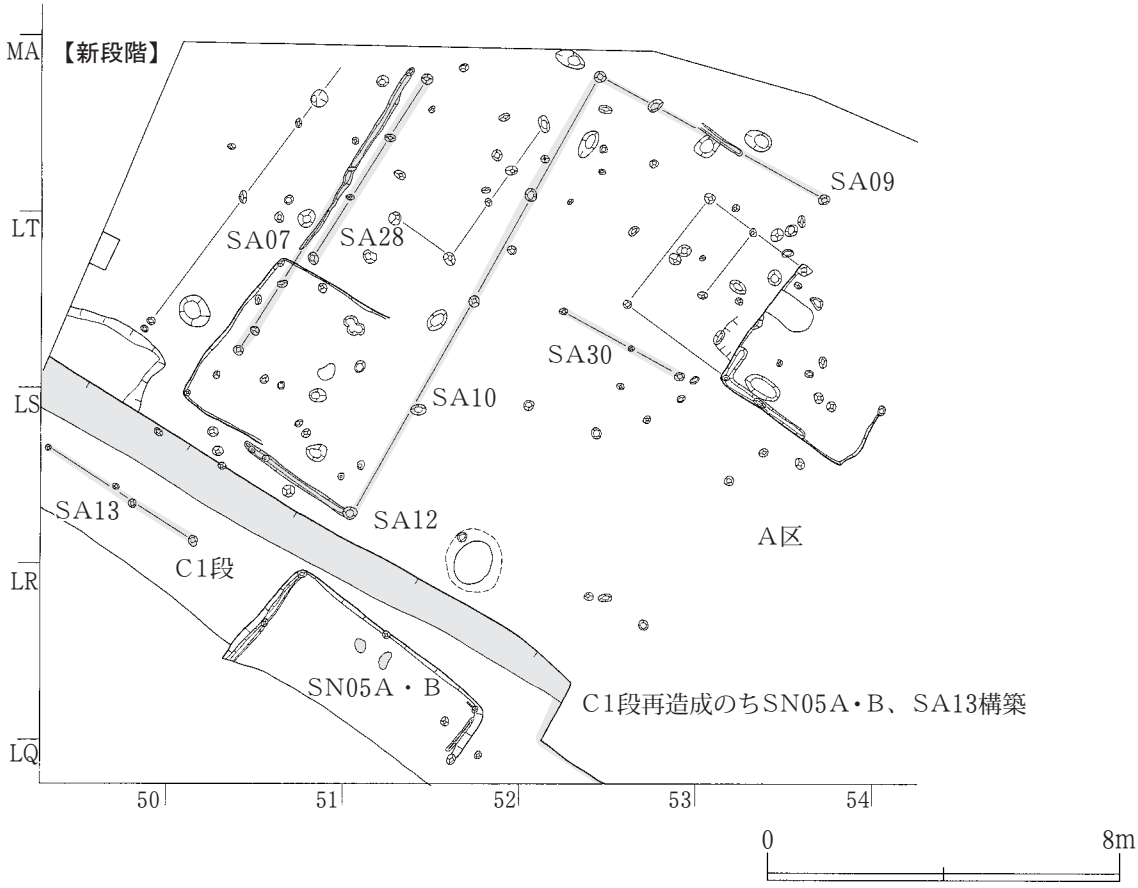
〔前期初頭～前葉〕坂ノ上Ｂ遺跡（292）では早期末～前期初頭、大木１式・２ａ式・２ｂ式の前期前葉段階の土器片が出土・採集。石坂台Ⅰ遺跡（397）、岱Ⅲ遺跡（428）、虚空蔵大台滝遺跡（433）でも少量ではあるが該期の土器片が出土。その他、前期ではあるものの詳細時期が不明な例として、館ノ下館跡（271）では前期の土器片と共に、主に米代川流域に分布する肩パット型の岩偶も採集されている。

〔後期初頭～前葉〕石坂台Ⅷ遺跡（417）で竪穴建物跡１棟、井戸尻台Ⅰ遺跡（424）で焼土・土器埋設部（立石あり）を伴う４本柱の建物跡１棟、駒坂台Ⅱ遺跡（421）で土器を埋設した石組炉１基、湯ノ沢Ｅ遺跡（317）で土器埋設の石組遺構１基、大杉沢遺跡（285）で土坑７基と土器埋設遺構２基それぞれ検出されている。また、地蔵田遺跡（311）でも前葉期の土坑と土器、鐸形・環状土製品が見つかっている。その他に、該期の土器は風無台Ⅰ遺跡（393）、石坂台Ⅰ遺跡（397）、石坂台Ⅸ遺跡（418）、奥椿岱遺跡（475）でも出土している(1)。

## ２　古代

古代の遺構には、Ａ区SI02・04竪穴建物跡とその周辺の柱列、及びＡ区東側で一段下る狭い平坦面（Ｃ1段）に位置するSI05Ｃ竪穴建物跡や焼土面・柱列がある。これらの遺構は、重複や軸線方向から３時期の変遷が想定される。また、遺物は認められないものの、遺構の立地・形状・規模や他遺跡での検出例（虚空蔵大台滝遺跡SZ1770等）(2) から類推すれば、Ｅ区最下位で検出されたSZ14テ




**第25図　A・C区（C1段）遺構変遷図**

**第4表　和田丘陵地・御所野台地・戸島段丘地における発掘された古代集落跡・墓地**

| 番号 | 遺跡名 | 立　地 | 標高 | 竪穴 | 建物 | その他の遺構 | 出土遺物 | 時　期 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 514 | 黒沼下堤下館 | 和田丘陵地 | 46 | 3 | - | 柱列、焼土遺構、テラス状遺構 | 土師器、羽口、鉄製品、鉄滓 | 10c後半～11cか | 竪穴・掘立柱併用建物跡 |
| 269 | 諏訪ノ沢 | 和田丘陵地 | 34 | 3 | - | 製鉄炉、土坑 | 土師器、須恵器、羽口、砥石 | 9c後～10c | 鉄生産工房集落 |
| 363 | 古野 | 和田丘陵地 | 17 | 2 | - | 土坑 | 土師器、須恵器、土製支脚 | 10c前 | |
| 282 | 下堤B | 御所野台地 | 37 | 3 | - | 土坑 | 土師器、須恵器 | 9c中～10c前 | |
| 283 | 下堤A | 御所野台地 | 41 | 4 | - | - | 土師器、羽口 | 9c後～10c前 | |
| 284 | 下堤C | 御所野台地 | 41 | 32 | - | 竪穴遺構・土坑、方形溝状遺構 | 土師器、須恵器、鉄製紡錘車・鉄鎌、羽口 | 8c後～10c中 | |
| 285 | 大杉沢 | 御所野台地 | 40 | 1 | - | 土坑、古墳周溝か | 土師器、鉄滓、羽口 | 10c中～後か | 砂底土師器甕あり |
| 286 | 下堤D | 御所野台地 | 43 | 3 | - | - | 土師器 | 9c後～10c前 | |
| 293 | 坂ノ上E | 御所野台地 | 40 | 1 | - | 製鉄炉・炭窯 | 須恵器 | 9c後（or13c） | 竪穴は工房か |
| 294 | 坂ノ上F | 御所野台地 | 40 | 2 | 14 | 柱列、土坑 | 土師器 | 9c後 | |
| 301 | 深田沢 | 御所野台地 | 50 | 6 | 8 | 竪穴遺構、土坑 | 土師器、須恵器、砥石 | 9c中～10c初 | 竪穴・掘立柱併用建物跡 |
| 302 | 野形 | 御所野台地 | 52 | 3 | - | 土器焼成遺構 | | 9c後～10c初 | |
| 309 | 秋大農場南 | 御所野台地 | 31 | 1 | - | - | 土師器 | 9c後～10c初 | |
| 310 | 地蔵田A | 御所野台地 | 30 | 5 | 3 | 土坑、火葬墓２基 | 土師器、須恵器 | 9c後～10c | 石組カマドあり |
| 314 | 湯ノ沢B | 御所野台地 | 32 | 1 | - | | 土師器、須恵器 | 9c後～10c前 | |
| 318 | 湯ノ沢F | 御所野台地 | 33 | - | - | 土坑墓40基 | 土師器、須恵器、鉄製品（馬具・直刀）、銅製品（帯金具）、石製品（丸鞆・巡方）、漆皮箱、銭貨（隆平永寶） | 9c後 | |
| 433 | 虚空蔵大台滝 | 御所野台地 | 46 | | 41 | 堀、土塁、切岸、テラス状遺構、鍛冶炉、土坑 | 灰釉陶器、銅製小塔、把手付土器、かわらけ小皿 | 11c中～後 | 古代末の居館跡、後三年合戦関連遺跡か |
| 419 | 河辺松木台Ⅲ | 戸島段丘地 | 40 | 5 | - | 焼土遺構、土坑 | 土師器、鉄滓、羽口 | 9c中～後 | 旧松木台Ⅲ遺跡 |
| 423 | 戸島上野Ⅰ | 戸島段丘地 | 42 | 9 | 11 | 土坑、溝跡（柵列） | 鉄鋤・刀子・鉄釘・鉄滓、土鈴、土師器 | 9c末～10c前 | 旧上野遺跡、石組カマドあり、砂底土師器甕あり |
| 428 | 岱Ⅲ | 戸島段丘地 | 30 | 1 | - | | 土師器 | 9c末～10c前 | 砂底土師器甕あり |

番号は、第１表の遺跡番号に対応する

ラス状遺構もＡ区・Ｃ１段の遺構と同時期であった可能性もある。

Ａ区・Ｃ１段遺構の構築時期は、遺物組成からみて上限を10世紀後半、下限は明瞭ではないものの、３時期変遷を考慮して11世紀代と想定する。上限時期の設定は、荒いケズリ調整を残す非ロクロ整形の土師器甕が主であり、坏類は土師器小片の１点（第16図15）のみであること、中世期の遺物を一切含まないことを根拠とする。

（１）Ｃ１段の形成時期は古代である

Ｃ１段面に位置するSI05Ｃ竪穴建物跡は、第４章で報告したように遺構の検出状況や軸線方向、出土遺物から同段形成後に構築されたと判断した。すなわち、竪穴構築に先立って削平を伴う地形改変が古代において成されたが、遺跡全域の削平面（＝段築）全てが古代における造成と断定することができない。それでも、中世城館に特徴的に見られる大規模な地形改変（切岸や段築等）が遅くとも11世紀後半段階において実施されていたことは、本遺跡の西約3.5㎞に位置する虚空蔵大台滝遺跡、横手盆地内の横手市陣館遺跡[3]の事例が明瞭に示している。陣館遺跡は後三年合戦(1083 ～ 1087年)に登場する金沢柵推定地のひとつとされ、丘陵斜面地には７段の階段状地形（段築）が残されている。うち、頂部から４段目の段築・盛土層から11世紀中～後半期の土師器坏が出土しており、最下層には国内最古の可能性もある鉄鍋が埋納されていた。黒沼下堤下館跡は、前２遺跡に先行するものであり、11世紀段階に認められる段築形成の粗形がここに求められる可能性を指摘しておきたい。

（２）集落構成員の出自は米代川流域以北か

Ａ区SI04竪穴建物跡の形状・構造や出土遺物を見る限りでは、本遺跡集落の構成員は米代川流域あるいはそれ以北の地域に出自を求めることができると想定する。それは、①建物構造が竪穴部と掘

立柱部が接続して一体となる「竪穴・掘立柱併用建物」であること、②石組あるいは石芯のカマドであること、③棒状礫の出土を根拠とする。

①竪穴・掘立柱併用建物の確認

東北地方北部を中心とする古代集落内には、カマドをもつ竪穴建物に掘立柱建物が接続する形状の遺構が認められる。文化庁が2010年に発行した『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』(4) には、この種の遺構に対して「竪穴・掘立柱併用建物」の名称を与えている。

竪穴・掘立柱併用建物は、宮城県を除く東北５県と新潟県の約70の遺跡で550棟を超す検出例がある。その95％以上の建物は、カマドの設置された竪穴壁面側に掘立柱を接続させる共通点がある。また建物の外側に溝を巡らせたり、周堤を築く事例も存在する(5)。

竪穴部はカマドの存在から居住空間と見られ、掘立柱部は竪穴部の補助的な施設（前小屋）、あるいは何らかの生産活動に係る作業場と推測される。竪穴部の上屋構造は従来までの伏屋式も認められるが、多くは壁立式である特徴をもつ。建物構築の時期は、８世紀後半から11世紀前半代までであるが、９世紀後半から10世紀後半期に集中する。

分布の中心は、青森県中西部の津軽地方（特に青森市域）にあり、全体の約85％の棟数を占める。次いで秋田県北部の米代川流域が10％程である。他地域では青森県下北半島南部（六ヶ所村上尾駮(2)遺跡・発茶沢(1)遺跡、野辺地町向田（35）遺跡(6)）、青森県南東部沿岸（おいらせ町中野平遺跡、八戸市櫛引遺跡・岩ノ沢平遺跡）、岩手県北部の馬淵川中～上流域（二戸市上田面遺跡、浄法寺町飛鳥台地Ⅰ遺跡）、盛岡市周辺の北上川上流域（盛岡市大島遺跡・志波城跡、矢巾町館畑ｂ遺跡等）、秋田平野南部（秋田市深田沢遺跡・黒沼下堤下館跡）、横手盆地中部（大仙市・美郷町払田柵跡、美郷町根子荒田Ⅰ遺跡、横手市田久保下遺跡・大見内遺跡・会塚田中Ｂ遺跡）、山形盆地北部（村山市西原Ｃ遺跡）(7)、福島県会津盆地西部（会津坂下町能登遺跡）(8) でも検出例はあるが、散在あるいは点的な分布に留まる(9)。南限は福島県の中通り地方中南部（西白河郡矢吹町小又遺跡）(10)、西限は新潟県の中部（中魚沼郡津南町大割野谷内田Ｂ遺跡）(11) である。

定型化した竪穴・掘立柱併用建物の成立は８世紀末・９世紀初頭～前半代に求め、起点となった地域は主たる分布域の周縁にあたる横手盆地中部（平鹿郡と北側に隣接する山本郡南部）と想定する。同域内での建物構築時期は、当該期に限定されるのに対し、分布の中心である津軽地方や米代川流域では９世紀後半･末を上限とするからである。定型化した併用建物とは、竪穴が壁立式の構造を採り、外観上では掘立柱建物と一体化した外壁（おそらく杉板材）が建て巡らされる建物を指す。併用建物が横手盆地中部で成立しえた背景には、759年（天平宝字３）に雄勝城、９世紀初頭には払田柵が造営され、これに呼応して須恵器生産工人等も招聘され、これら建築技術や各種工人集団の多くは北陸地方から由理経由（現在の由利本荘市）で当地に入ってきたこととみたい。北陸からの技術導入には、近江地方に起源をもつとされる壁立式の竪穴建物が含まれていたはずであり、併用建物成立の大きな鍵の一つである。横手市田久保下遺跡での併用建物は、須恵器工人の作業場（須恵器製作）兼住居としての性格が明瞭であり、工人集団は作業場と居住空間を確保する方策として、竪穴と掘立柱部を合体させた施設を生み出したとも言える。

併用建物とその建築技術は９世紀後半以降、北方の米代川流域、津軽地方に伝えられる。当該域で受け入れられ、分布の中核にまで成長した主因は、これら集落の生業が製鉄・鍛冶や須恵器生産に係

わっていたことに求めることができよう。

本遺跡の併用建物（SI04）構築時期は10世紀後半である。横手盆地で成立した建築技法は、当地では９世紀中頃以降認められないことから、秋田平野南部の併用建物とは、北方に伝えられた技術を保有する集落構成員の南下に伴い構築されたと解することができよう。

横手盆地での竪穴・掘立柱併用建物は消失するものの９世紀後半以降、竪穴部を掘立柱に置き換えた掘立柱＋掘立柱式の建物が散見される。このことから、一棟内に居住空間と作業場を確保した建物は存続していたと推測される。11世紀以降の様相は不明確ではあるが、同種の居住形態は以後も引き継がれ、近世の直屋に繋がる可能性を想定しておきたい。

②石組構造のカマド

竪穴建物内に設置されるカマドは、廃絶時に意図的に破壊される場合が大多数を占めていることから、本体部（甕・甑等の煮沸容器を置く「受け口」周辺、遺構としては「袖部」とも呼ばれる）の構造が不明確な場合もあるが、基本的には粘土積みによるとされる。これは秋田平野や横手盆地の竪穴建物跡で一般的に確認される。ところが、八郎潟東岸北部、米代川流域、津軽地域の古代集落では本体部に石・礫を利用した石組構造をもつ事例が一定数認められ、煙道部まで一体的に石を並べる例もある。いわば石を多用したカマド構造は北緯40°以北の集落の特徴とみなすことができる。従って、秋田平野内で石組カマドが確認された場合、その集落の構成員は北緯40°以北の地に出自をもつ可能性が高いと想定される。本遺跡周辺（秋田平野南部）における石組構造のカマドは、秋田市地蔵田Ａ遺跡Ａ区４号住居跡、同市の戸島上野Ｉ遺跡SI28竪穴住居跡で確認され、両者とも煙道部を含めた全体が石組構造である。２例とも９世紀末・10世紀初頭～前半代の構築であり、本遺跡例より先行する。

③棒状礫の出土

SI04竪穴建物跡床面からまとまって確認された小礫は、人工的な加工痕が一切認められない自然礫ではあるものの、北海道の古代相当期以降の集落遺跡内から多くの出土例が報告されている「棒状礫」と同類の遺物と推測した。棒状礫は、ゴザなどを編むための「もじり編み」「ゴザ編み」に使用される編物石＝錘石を指す。アイヌ文化では、この錘石を「ピッ（pit）」と呼んでいる[12]。

北海道での棒状礫は、擦文文化期（古代相当）の天塩川口遺跡[13]（天塩郡天塩町）、楠遺跡[14]（中川郡美深町）、穂香竪穴群[15]（根室市）、ニタップナイ遺跡[16]（勇払郡厚真町）、ユカンボシＥ12遺跡[17]（恵庭市）、Ｋ460遺跡[18]（札幌市）、八幡町遺跡ワッカオイ地点[19]（石狩市）、末広遺跡[20]（千歳市）等の竪穴建物跡からまとまって出土している。また、アイヌ文化期（中世～近世相当）のポロモイチャシ跡[21]・二風谷遺跡[21]・イルエカシ遺跡[22]（沙流郡平取町）、富里２遺跡[16]（勇払郡厚真町）、末広遺跡・祝梅川上田遺跡[23]・オルイカ２遺跡[24]（千歳市）等でも竪穴建物・平地住居跡から一括して出土している。

穂香竪穴群の竪穴建物跡（Ｈ-８）では900点以上の出土が報告されている。ニタップナイ遺跡のⅢＨ-06竪穴建物跡では床面上から掘り込まれた小土坑内に79点の棒状礫が残され、完形である31点の平均法量は長さ6.4㎝、重量77.5gと記されている。同竪穴はAMS年代測定の結果、10世紀後半～11世紀前半の時期が示されている。また、富里２遺跡では近世アイヌ文化期の平地式住居跡（ⅢＨ-01）から72点の棒状礫がまとまって出土しており、礫の平均法量は長さ7.2㎝、重さ55.8gと報告

されている。同住居跡出土の炭化物のAMS年代測定では16 ～ 17世紀前半の数値が得られている。

一方、北海道以外では青森県上北郡野辺地町の向田（35）遺跡の竪穴建物跡２棟（第２号、第28号）から棒状礫が出土している[25]。前者12点、後者30点であり、両者とも竪穴内の小土坑内からまとまって確認された。後者例の平均長は8.2㎝、重量は84.4g である。第28号では土師器（坏・甕）、擦文土器、土製支脚、転用硯（須恵器壺を加工して転用）が出土している。青森県内では他に同様の出土例はないそうである[26]。

３　近世

近世に属する遺構は、Ｅ区で検出された６基の土坑墓である。Ｃ区南西側（Ｆ区寄り）で確認されたSK26も遺物の出土はないものの、形状・配置から土坑墓であった可能性がある。

６基の土坑墓は、いずれも楕円形・隅丸長方形の掘り込みをもち、出土人骨とSK16の事例から直方体箱式木棺を埋設した土葬墓と判断され、いわゆる円形の桶形木棺（早桶）を埋設したタイプは認められない。また、配置状況から斜面上位側（SK16・17・19）と下位側（SK15・21・22）の各３基はそれぞれ、家族・親族など血縁関係の強い一族の墓と類推され、調査区外南側（国道建設に伴い削平）にも連なっていた可能性もある。その一方で、人骨の出土した上位側３基については木棺の埋設方法や形状、埋葬頭位に統一性が認められず、これは性別や埋葬時期の差によるのかもしれない。人骨同定分析ではSK16・19が壮年後半の女性、SK17が壮年後半の男性と判定された。

副葬品は木棺を結合するための釘と見られる鉄製品を除くと、銭貨とワッシャー状を呈する２種３点の銅製品（SK16、図版11- ２・３・４）に限られる。

銭貨は、判読可能なものは全て寛永通寶であり、SK15では古寛永（1636 ～ 59年鋳造）のみ、SK17・21では古寛永と新寛永（1697 ～ 1747年、1767 ～ 81年鋳造）が混在する。SK21出土の１点は、「永」字の末尾が上方に跳ねているところに特徴があり、秋田郡川尻村の久保田藩直営鋳銭場で元文３年（1738）から延享２年（1745）まで鋳造され、秋田川尻銭とも称される銭である。鋳銭場は、現在の秋田市川尻にある秋田刑務所の敷地内に位置する（第26図）。

３点の銅製品は形状（環状とＣ字状）と法量から銭貨と同じ役割を担うために納められたのかもしれないが、本来の用途・名称は全く不明であった。被葬者が女性であることから装飾・垂飾品等も視野に入れて類例を調べた。調査の過程で、弘前市教育委員会の岡本康嗣氏から『類聚近世風俗志』[27]のなかに同類型の図絵が認められる旨の情報を得た。これによると、遺物は「半合羽」のボタン（材質は真鍮、銅、水牛角）とされる（第27図）。半合羽は江戸時代に流行した丈の短い外套であり、町人の道中着・旅装束として広く利用されたそうである。仮に遺物が半合羽のボタンとすれば、あの世に旅立ちし易いように半合羽を着用させたと想定される。

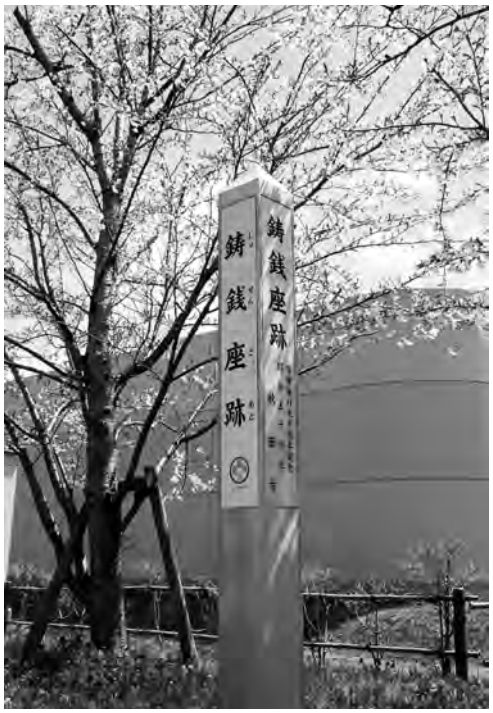
秋田県内で近世墓と判断される遺構は意外と少ない。土坑墓の検出例が多くとも埋葬時期を決定する遺物に恵まれない事例が多く、明確に近世と特定される寛永通寶が副葬される墓を列挙すると以下のとおりである。

【秋田市秋田城跡第10次調査区】　鵜ノ木地区から10基の土坑墓が検出され、詳細は報告されていないが少なくとも１基からは洪武通寶などの中世渡来銭と共に寛永通寶が副葬されていたと記されている[28]。

【男鹿市脇本城跡第12次調査区】 馬乗り場地区南東部から２基の土坑が検出され、それぞれ人為的に埋められた底面付近から板材に乗せられた寛永通寶２点が出土している。人骨の出土は認められないものの、報告では「近世に造られた墓ではないか」としている[29]。

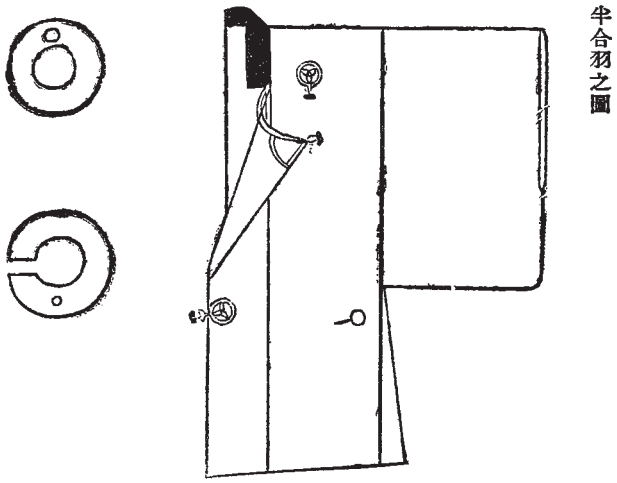
【男鹿市真山遺跡】 明治初年に廃寺となった光飯寺住職の墓地と伝えられる箇所（第Ⅱ区）を調査し、41基の墳墓群を確認している。墳墓には①盛土のみ、②盛土下に土坑を伴う、③盛土の周囲に溝を巡らせるタイプがあり、盛土中や周辺に炭や骨片が含まれる事例もある。盛土内からは 15 ～ 16世紀代の須恵器系陶器（擂鉢）が出土し、炭や骨の放射性炭素年代測定からも14 ～ 16世紀の数値が示されている。しかし、少なくとも３基の盛土内からは寛永通寶、煙管、近世磁器（染付皿）が出土しており、墳墓の一部は近世にも造られたと判断される[30]。

【鹿角市柴内館跡】 14基の土坑墓が検出され、うち12基から人骨が出土した。副葬品には銅鏡、煙管、和鋏、火打ち金、数珠玉、木製櫛、漆器椀、銭貨（寛永通寶・無文銭）等が認められた。埋葬されていた寛永通寶は２～９点であり、７基では６点であった。また、鉄釘や木棺の一部と見られる木片が出土しており、土坑の形状から直方体箱式木棺（長方形）あるいは桶形木棺（円形）であった可能性がある。墓の造営時期は、副葬品から17世紀前半～ 18世紀後半と報告されている[31]。




秋田刑務所敷地内に建てられている「秋田川尻銭」鋳造地を示す標柱。奥に写っているのが刑務所の“塀”である。〔20110429 撮影〕

**第26図 「鋳銭座跡」標柱**




『類聚近世風俗志』から転載、一部改変。

**第27図 半合羽とボタン**

註

1　縄文時代遺跡の引用文献は第１表の文献（p5）を参照。

2　秋田県教育委員会『虚空蔵大台滝遺跡』秋田県文化財調査報告書第416集、2007年。

3　横手市教育委員会『陣館遺跡・金沢柵城跡』横手市文化財町調査報告書第18集、2011年。

4　文化庁文化財部記念物課（編）「竪穴・掘立柱併用建物」『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』、2010年。

5　高橋玲子「平安時代東北地方における掘立柱施設付竪穴住居について」『秋田考古学』第47号、秋田考古学協会、2001年。高橋 学「竪穴住居と掘立柱建物が併列して構築される遺構について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第４号、1989年。

6　青森県教育委員会『向田（35）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第373集、2004年。

7　村山市教育委員会『西原Ｃ遺跡発掘調査報告書』、1996年。

8　福島県教育委員会「能登遺跡」『東北横断自動車道遺跡発掘調査報告10』福島県文化財調査報告書第242集、1990年。

9　津軽地方と米代川流域を除く地域の１遺跡あたりの棟数は、青森県東部沿岸の３遺跡で計17棟、他地域で１遺跡各１～２棟に留まり、全体の10％程である。

10　福島県教育委員会「小又遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告書２』福島県文化財調査報告書第353集、1998年。

11　津南町教育委員会『大割野谷内田Ａ遺跡・大割野谷内田Ｂ遺跡』津南町文化財報告書第53輯、2009年。

12　福田友之「小石（ピッ）の音－ござ編み機のおもり石の発見によせて－」『青森県考古学』第15号、2007年。

13　天塩町教育委員会『天塩川口遺跡』、1976年。

14　北海道埋蔵文化財センター『美深町 楠遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第15集、1984年。

15　北海道埋蔵文化財センター『根室市 穂香竪穴群』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第170集、2002年。

16　厚真町教育委員会『幌内５遺跡（１）・富里２遺跡・ニタップナイ遺跡（２）』、2010年。

17　恵庭市教育委員会『ユカンボシE12・E13遺跡』、2011年。

18　札幌市教育委員会『K460遺跡』札幌市文化財調査報告書ＸＸⅡ、1980年。

19　石狩町教育委員会『石狩・八幡町遺跡ワッカオイ地点発掘調査報告書』、1975年。

20　千歳市教育委員会『末広遺跡における考古学的調査』（続）、千歳市文化財調査報告書ＸⅠ、1985年。

21　北海道埋蔵文化財センター『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第26集、1986年。

22　平取町遺跡調査会『北海道平取町イルエカシ遺跡』、1989年。

23　北海道埋蔵文化財センター『千歳市 祝梅川上田遺跡・梅川２遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第238集、2007年。

24　北海道埋蔵文化財センター『千歳市 オルイカ２遺跡（２）』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第221集、2005年。

25　佐藤智生「向田（35）遺跡第28号住居跡出土の棒状礫について」『向田（35）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第373集、2004年。

26　向田（35）遺跡の調査を担当した佐藤智生氏（青森県埋蔵文化財調査センター）の教示による。

27　原書は、喜田川季荘『守貞謾稿』1853（嘉永６）年（後に、室松岩雄（編）『類聚近世風俗志』國學院大學出版部、1908（明治41）年として公刊。図の引用は、室松岩雄（編）『類聚近世風俗志』名著刊行会、1989年による。）

28　秋田市教育委員会『昭和48年度秋田城跡発掘調査概報』、1974年。

29　男鹿市教育委員会『脇本城跡Ⅲ－第11次・第12次調査報告－』男鹿市文化財調査報告第28集、2004年。

30　男鹿市教育委員会『真山遺跡発掘調査報告書』男鹿市文化財調査報告書第18集、1998年。

31　秋田県教育委員会『柴内館跡』秋田県文化財調査報告書第355集、2003年。

**遺跡遠景**（南東上空→）遺跡は中央奥の小さな独立丘状の森となっている部分、和田丘陵の先端部に立地することが明瞭。その奥が御所野台地。手前の河川は岩見川。〔２枚とも20101001撮影〕

**遺跡調査区近景**（南東上空→）国道13号で分断されているが、左手前の和田公園側とは一連の遺跡である。調査区は段築が明確に観察される西側丘陵部と段築等の改変が認められない東側丘陵部に分かれる。

**調査区近景**（南西上空→）手前が和田公園。西側丘陵部の西側斜面の段築が明瞭に観察される。〔20101001撮影〕

**西側丘陵東側斜面部の調査前状況**（東→）山林伐採後に東側丘陵部より撮影。６段の階段状地形（段築）が整然と認められる。〔20100408撮影〕

**和田公園側から北方を臨む**（南→）
右端中央が調査区のある丘陵部。狭い沖積地内には梵字川が流れ、これと並行して中世宝川古道が北方に延びる。奥の山並みは太平山を含む出羽山地の山々〔20110406撮影〕

**西側丘陵部に残る段築**（南→）
丘陵西向き斜面部、調査区外にも段築は広域に認められる。撮影地点はＢ区トレンチの北側約100m。現在もこの姿は残されている。
〔20100615撮影〕

**和田公園側西端部に残る段築と堀か**（北→）
和田公園側最西端の段築（左）と堀（？）を挟んで独立丘状の地形（右）が観察される。独立丘上は現在は墓地として利用されている。付図に「独立丘」と表示。
〔20110406撮影〕

図版4

**西側丘陵西向き斜面部（B区）の調査前現況**（西→）
段築が明瞭に観察されるものの、左側では地滑りによる土砂の流失が凹状地形として残る。
〔20101006撮影〕

**B区段築部土層堆積状況**（北西→）
上部の平坦面がＢ１段。傾斜地を削平後に盛土している様子が観察される。〔20101012撮影〕

**同上**（北西→）
人が立っているところがＢ３段、盛土厚は70㎝。急傾斜地であることが確認できる。このことからＢ区の掘り下げを伴う調査は１本のトレンチに留めた。〔20101013撮影〕

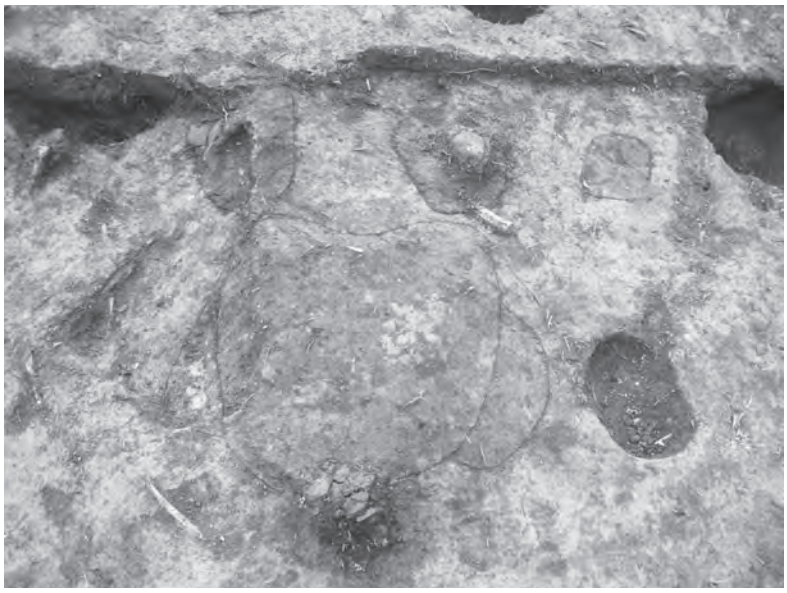
**C区段築部調査後の状況**（東→）
手前の沢部（Ｆ区）から撮影。Ｃ６段は土層観察から現代の畑造成に伴う盛土と判明し、これを除去した。下面からは土坑・柱穴群が確認された。これらの遺構群は出土遺物がなく、時期不明である。〔20101005撮影〕

**A区中央～南側調査後の状況**（北→）
頂部は狭いものの平坦面が形成されている。写真左奥の沖積地との比高は約24m、右奥の林が和田公園の位置する丘陵部にあたる。Ａ区のほぼ全域は畑地として利用されていたが、その後杉が植林された。杉は樹齢50年程であり、畑として利用されていたのは昭和30年代までと見られる。〔20100713撮影〕

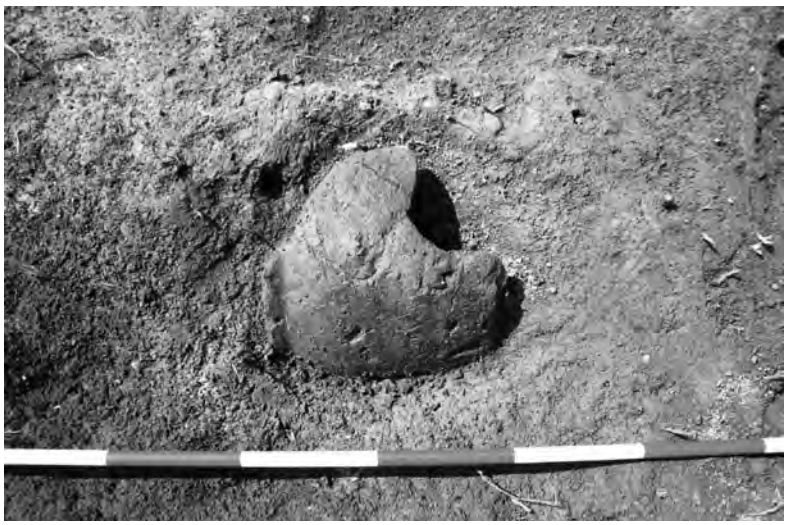
**A区南東部とC1段の遺構**（北→）
中央の平坦面がＡ区、左手前がSK08土坑、奥がSI02竪穴建物跡。左一段下がＣ１段、左端はSI05Ｃ竪穴建物跡。〔20100802撮影〕

**A区SI04竪穴建物跡**（東→）
右側の竪穴部と左側の掘立柱部からなる。掘立柱部は輪郭は不鮮明ながら方形状に土色の違いが観察され、SI04竪穴部とは別の竪穴状の遺構を想定して精査を行っていた。掘立柱部内側に焼土を含む柱穴が確認され、ここでは鍛冶に関連する作業を行っていた可能性を指摘した。〔20100802撮影〕

**同上　竪穴部の状況**（東→）
竪穴部は手前の東壁と左手の南壁のみを確認。他壁は杉の植林と育成に伴い消失か。東壁寄りの小土坑（P５）には土師器片と多くの炭化物、少量の炭化米が認められた。
〔20100802撮影〕



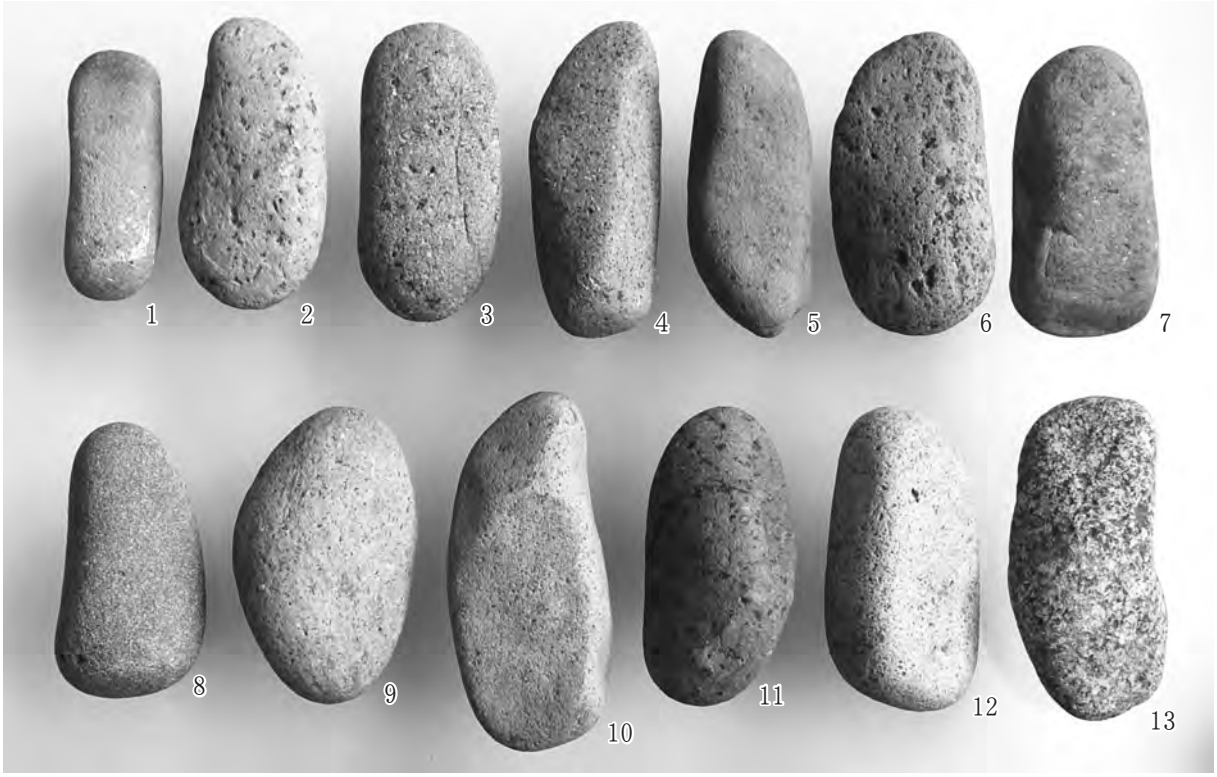
**同上　竪穴部のカマド**（北→）
火床面と周囲の小さな楕円状の掘形のみの確認である。このことからカマド本体は意図的に破壊あるいは撤去された可能性がある。また、掘形は袖部を構成する石を埋設するための掘り込みと想定。掘形内から白色系の砂質土が見つかり、第５章第１節で分析報告。
〔20100804撮影〕



**SI04竪穴部出土の土師器**（東→）
カマド脇出土の土師器甕（RP65）。推定器高が10㎝程の小型甕であり、写真左側が口縁部。〔20100706撮影〕

**同上　竪穴南東部出土の礫**（北→）
左手には同一形状の棒状礫が13点まとまって床面上から出土。右手の扁平でやや大きな礫は床面よりやや浮いた状態で見つかり、竪穴が埋没する過程で入り込んだ可能性もある。〔20100708撮影〕

**下：棒状礫**
自然礫であるが、13点まとまって出土。番号は第13図の遺物番号に対応する。



**A区南側・C1段の調査前状況**
（北東→）
右手がA区、左手前がＣ１段。段築の様子が現況でも明瞭に観察される。奥の林は和田公園側の丘陵部。〔20100615撮影〕

**同上　調査後の状況**（北東→）
上写真とほぼ同一地点から撮影。手前がＣ１段のSI05Ｃ竪穴建物跡。奥のＡ区手前にSK08土坑、背後にSI02竪穴建物跡。土層観察や遺物の出土状況からＣ１段は、古代の竪穴構築に先立って造成されたと推測した。〔20100802撮影〕

**A区南東側・C1段調査後状況**
（北→）
Ａ区縁辺にある溝跡はSA12柱列、一段下がるＣ１段にあるピンポール部がSA13柱列。〔20100804撮影〕

**東側丘陵部調査後全景**（西→）
頂部（Ｄ区）、西向き斜面部（Ｅ区）、手前が沢部（Ｆ区）。古代と見られるＳＺ14テラス状遺構は、Ｅ区下位から、近世の土坑墓はＥ区の上位と下位から検出された。Ｄ・Ｅ区に点在する柱穴群は時期不明。〔20101008撮影〕

**Ｅ区ＳＺ14テラス状遺構**（北→）
竪穴建物跡であった可能性は残るものの、遺構の立地や壁面の状況からみれば斜面地を削平して平坦面を造り出した整地地業と推定した。〔20101005撮影〕

**同上**（西→）
壁面が二重となっており、２時期重複の可能性もあるが、精査した限りでは結論を導くことはできなかった。〔20101005撮影〕

**近世の土坑墓調査後の状況**（西→）
近世の土坑墓はＥ区斜面上位で３基、同下位で３基検出された。奥の高台は戸島段丘地。〔20101008撮影〕

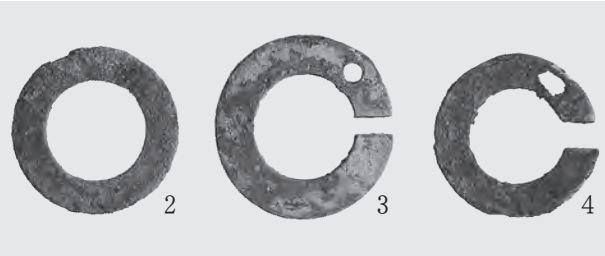
**斜面上位側の近世土坑墓**（北→）
手前がSK16、中央がSK17、奥がSK19。３基とも人骨出土。土坑は整然と並んでいるが、その形状や頭位はバラバラである。右奥が国道を挟んで和田公園のある丘陵部。国道建設に伴い削平された箇所にも近世の土坑墓が存在していた可能性がある。〔20101006撮影〕

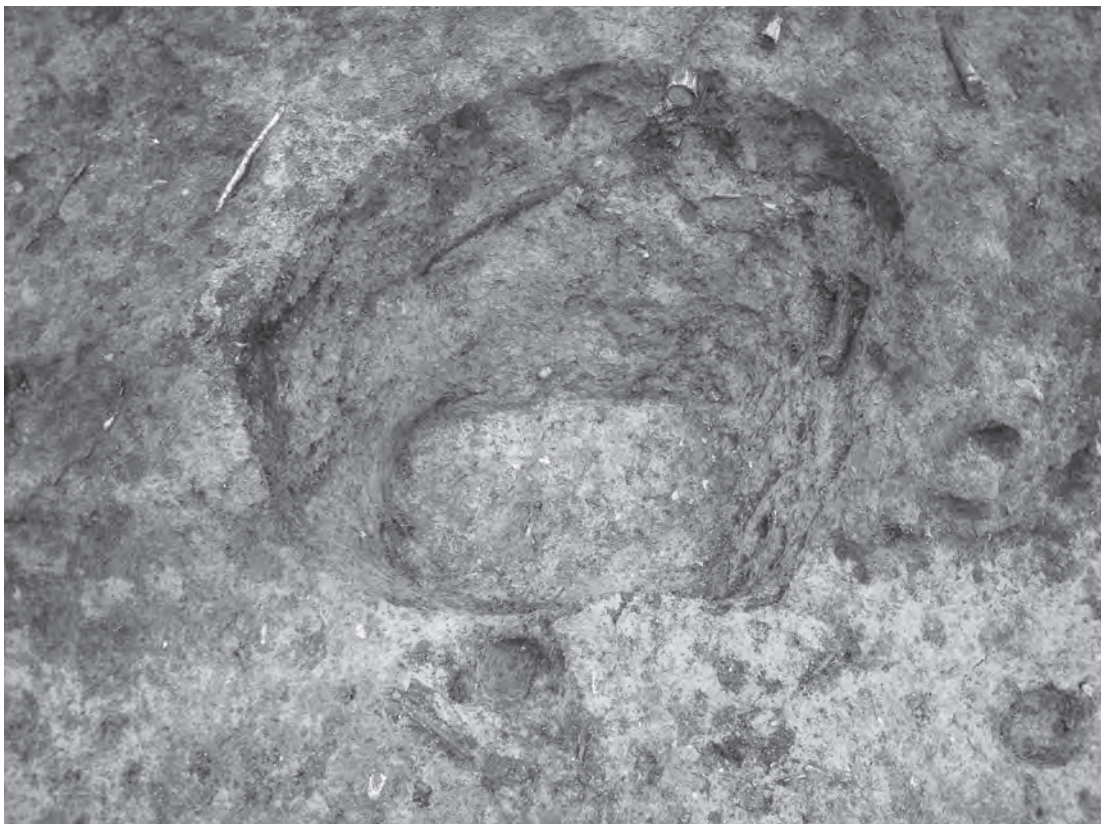
**SK16土坑墓**（北西→）
土坑内に長方形の棺を納めている。左奥に頭蓋骨が残る。埋葬頭位は北東。〔20101005撮影〕

**SK16土坑墓**（北西→）
頭蓋骨収納後の状況。
長方形の棺部分を掘り下げた後に撮影。
〔20101007撮影〕

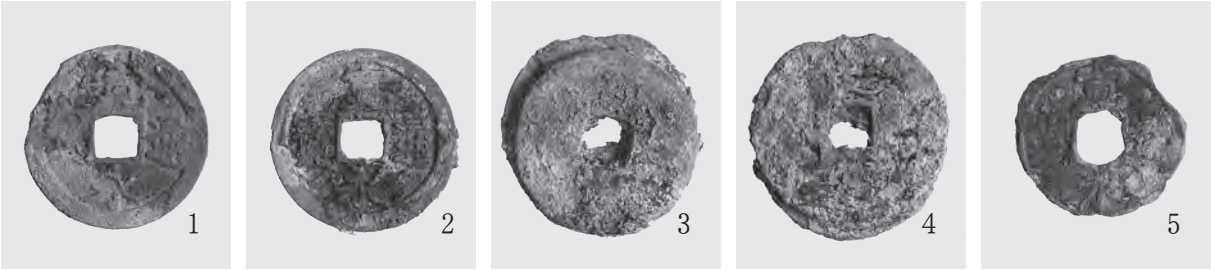
**同上**（北西→）
長方形棺部のクローズアップ写真。底面に木棺の一部（ＲＷ１）が残る。棺の上には「Ｃ」字状青銅製品（ＲＭ３）が貼り付いて出土。銭貨の代用とも想定したが、「半合羽」のボタンであった可能性が高いことが判明（第６章参照）。〔20101007撮影〕

**左下：木棺の一部**（ＲＷ1、原寸の約50％）
**右下：副葬されていた青銅製品**
ＲＭ２・４は底面から浮いた状態で出土。
１：ＲＷ１（上面にＲＭ３）、２～４：ＲＭ２～４
（２～４は原寸）

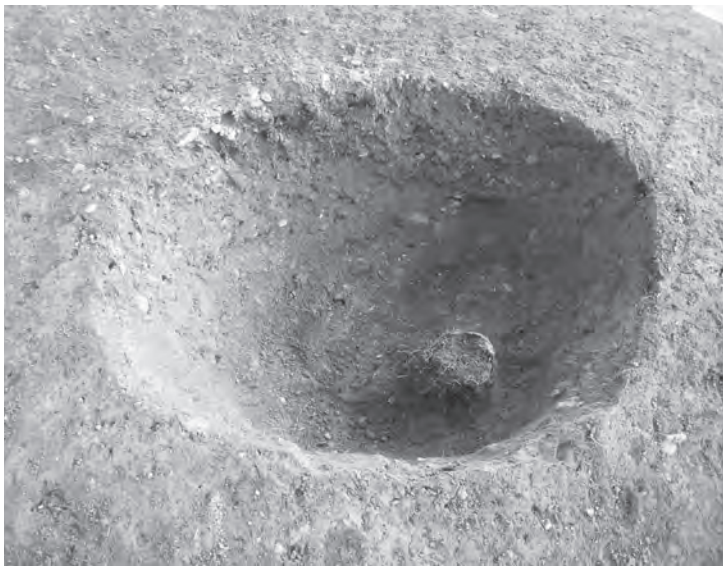




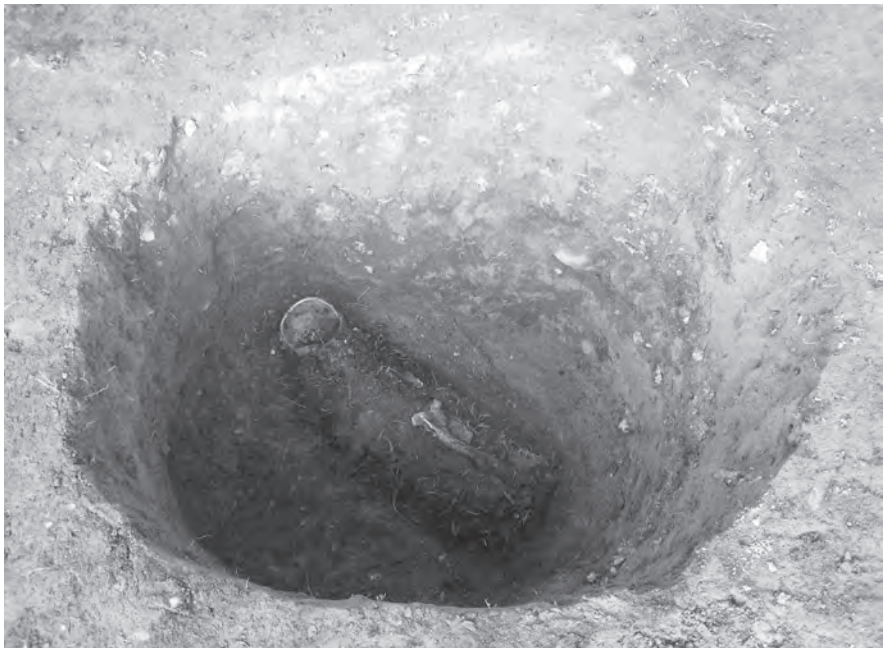
**SK15土坑墓**（西→）
手前が重複するSZ14テラス状遺構壁面。人骨は未確認。〔20101006撮影〕



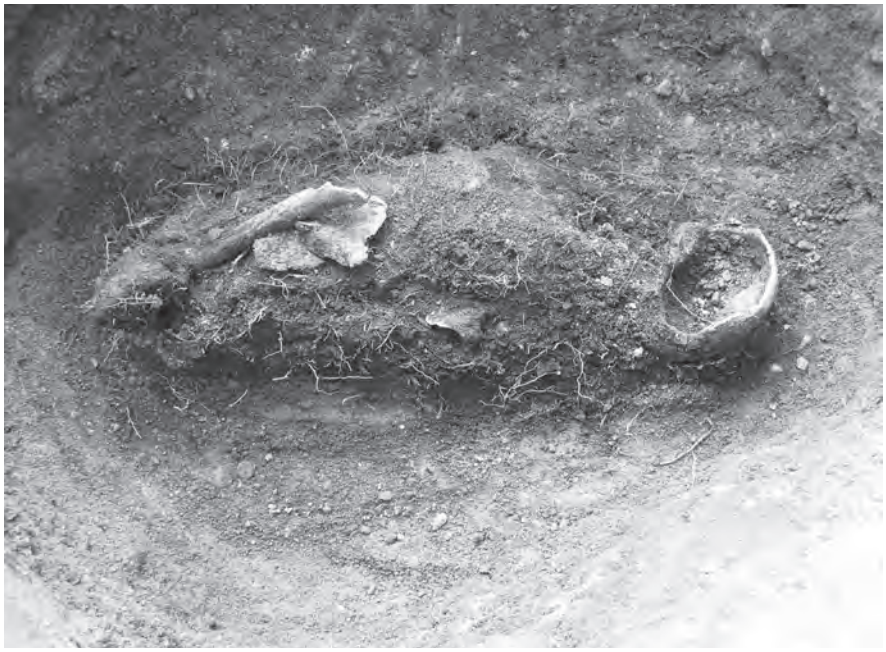

**SK15土坑墓出土の銭貨**　1～4：RM1～5、3は3点（RM3～5）固着、4は3裏面、5：RM6（原寸）



**SK19土坑墓**（北西→）
頭蓋骨のみ確認。推定頭位は北西。
堆積土中から鉄釘3点（RM1～3、
原寸の約70％で表示）出土、銭貨
は未確認。〔20101005撮影〕

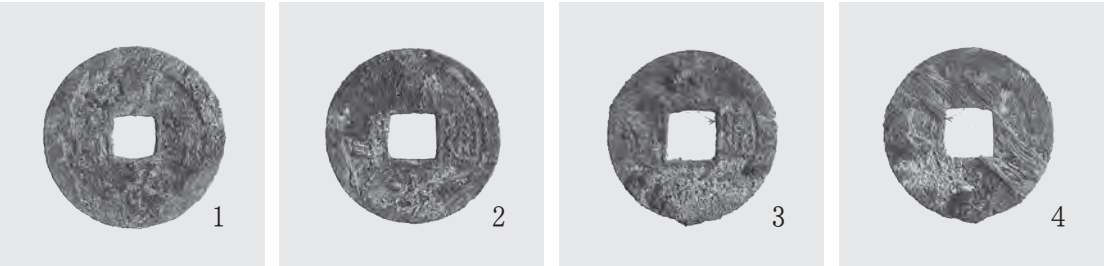


SK17土坑墓（南西→）

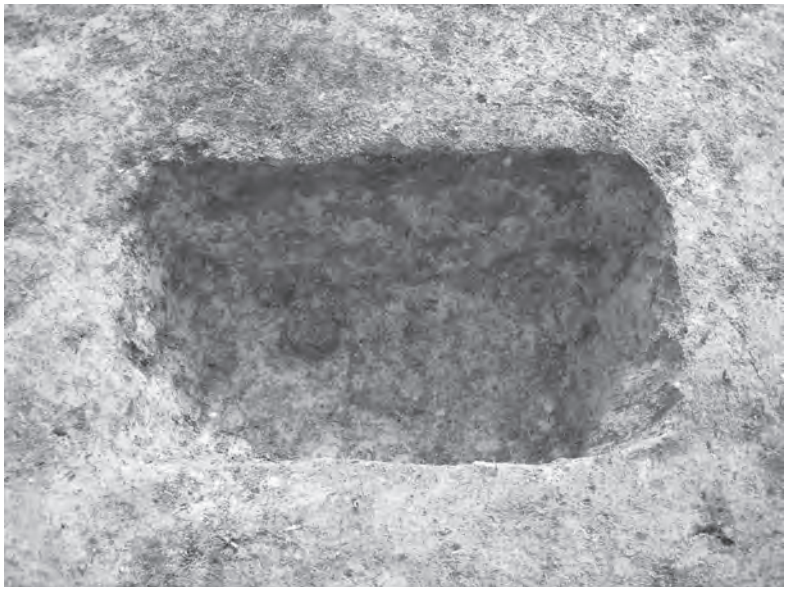


同上　人骨検出状況
（北東→）

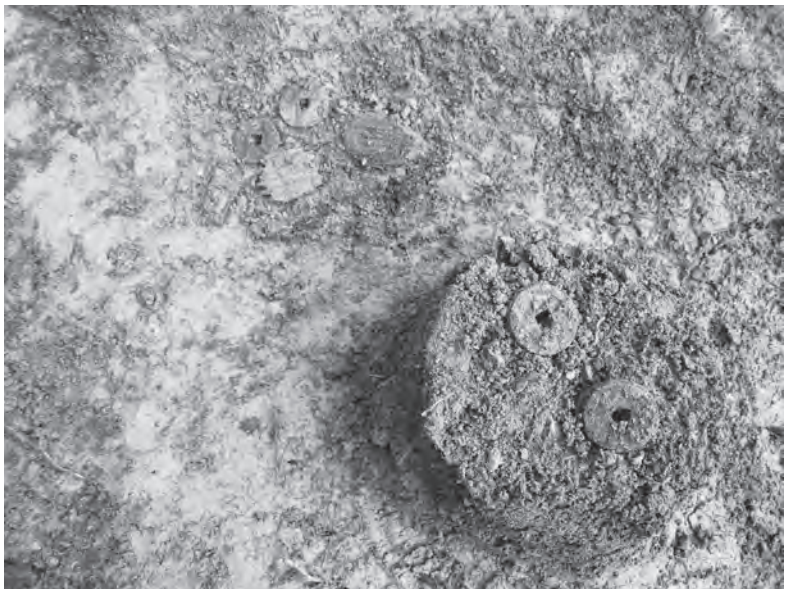
頭蓋骨を含め多くの部位が良好に残されていた。詳細は第５章第２節を参照。頭蓋骨の位置から推定頭位は北西。木棺などの木質部は未確認であるが、副葬されていた銭貨には木質が付着する個体（RM３）もあり、SK16同様に木棺上に置かれていた、あるいは銭貨等が木箱に入れられていた可能性も想定される。〔２枚とも20101005撮影〕



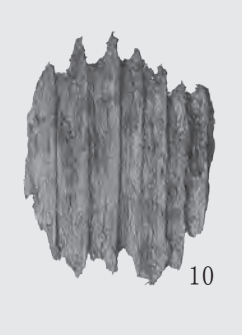

１～３：RM１～３、４：RM３裏面（原寸）



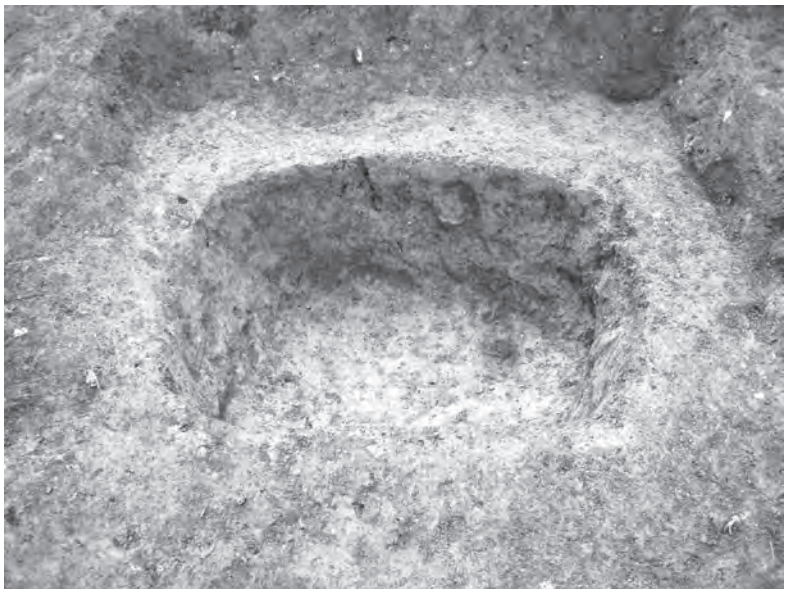
**上：SK21土坑墓**（北西→）
人骨の出土はなし。副葬品は銭貨９点と木棺の一部と見られる木片２点であり、いずれも土坑の北東寄りにまとまっていた。
〔20101007撮影〕



**下：同上　副葬品出土状況**（西→）
写真右手前が銭貨が４点重なって出土したRM３～６。10（RW11）は銭貨と同形の木片であり、銭貨が密着していたことから腐食を免れたものと推測される。９は木片上（RW10）に銭貨（RM９）が置かれた状態で出土した。
〔20101006撮影〕

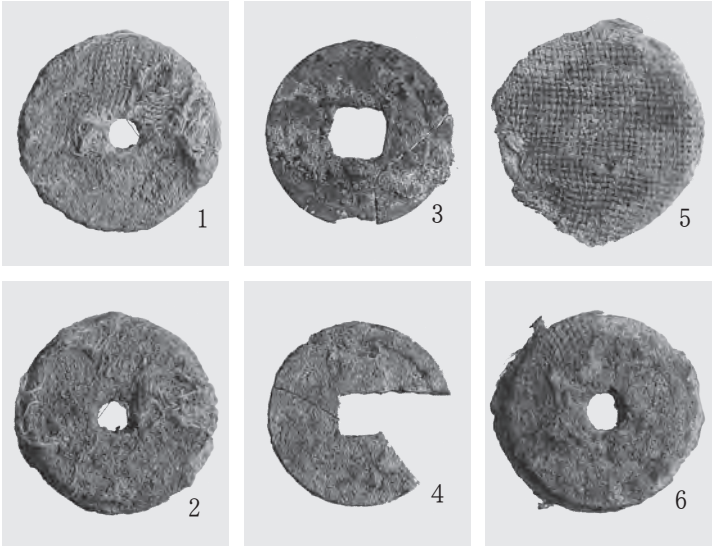


１～８：RM１～８、９：RM９・RW10、10：RW11（原寸）

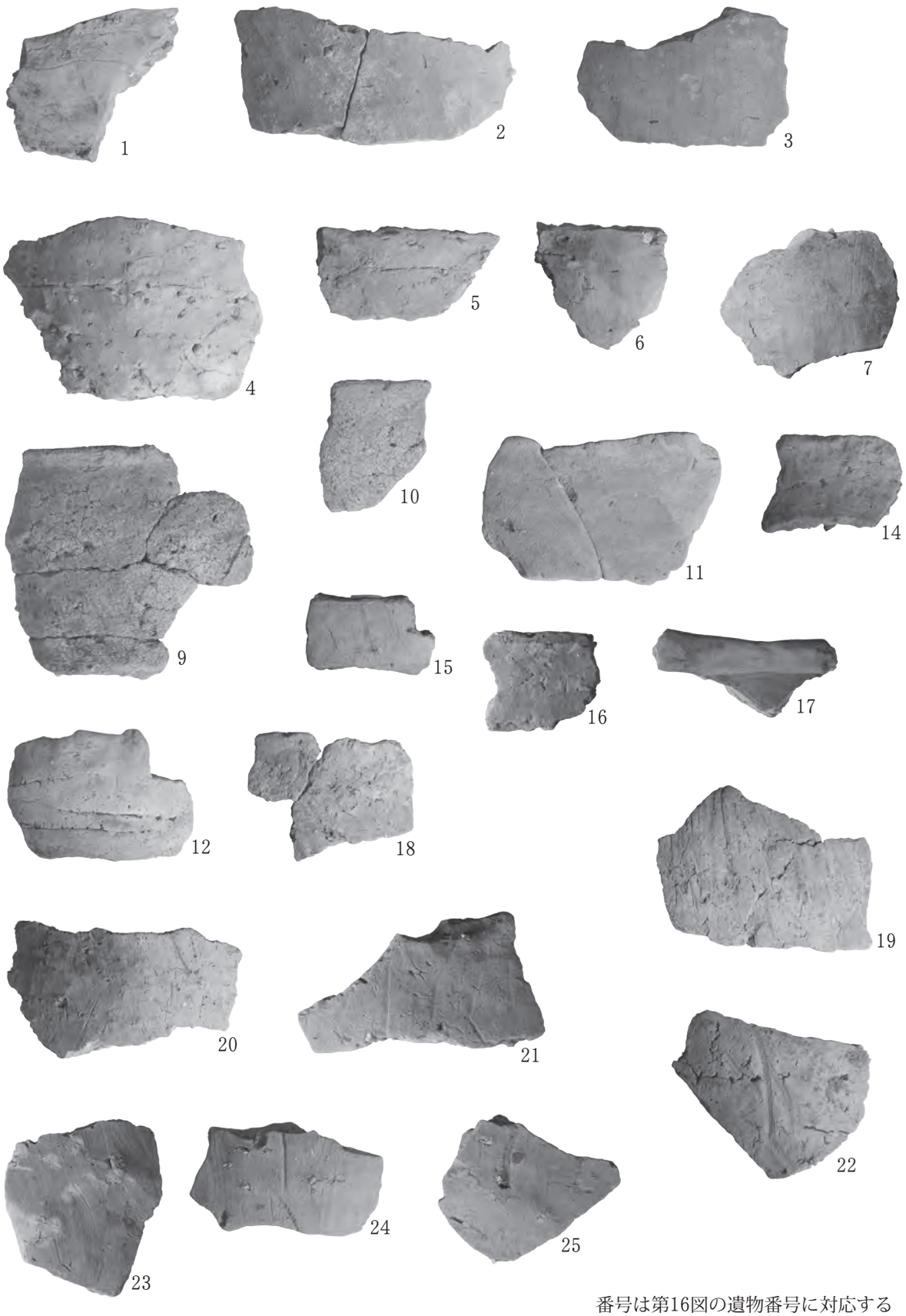


**上：SK22土坑墓**（北西→）
副葬品出土状況。５地点から銭貨８点、木片１点が確認された。８（RW９）は銭貨の圧痕が明瞭に観察され、木棺上に銭貨が置かれていたと類推できる。５（RM６～８）は、銭貨が布で包まれた状態で見つかり、袋のようなものに入れられていた可能性もある。
〔20101007撮影〕

**下：同上　完掘状況**（北西→）
〔20101008撮影〕

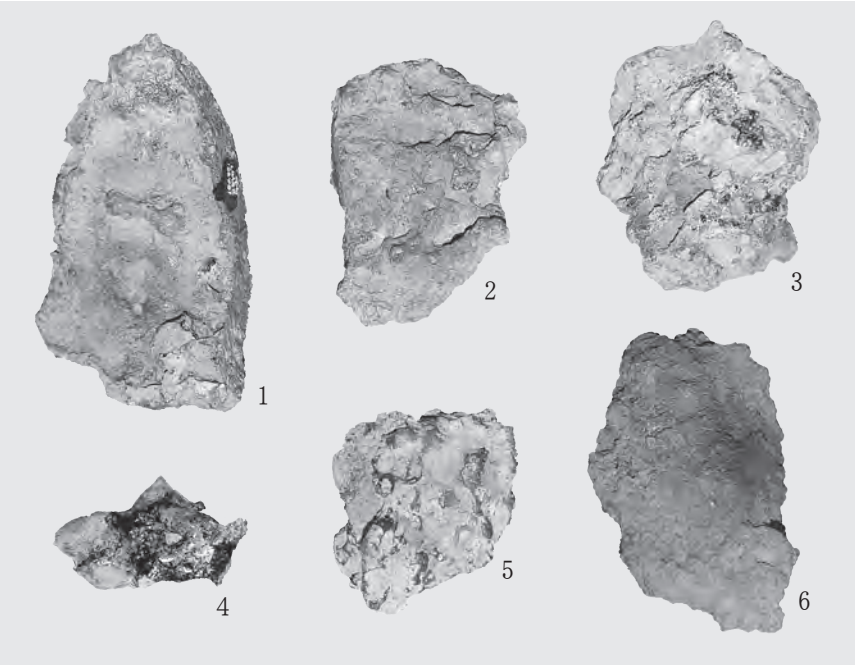


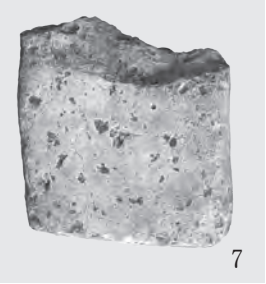

１：RM１～３固着、２：１裏面、３：RM４、４：RM５、５：RM６～８固着、６：５裏面、７：５の布を剥がした状態、８：RW９（銭貨圧痕あり）（原寸）




番号は第16図の遺物番号に対応する
９のみ原寸の42％、他は約50％

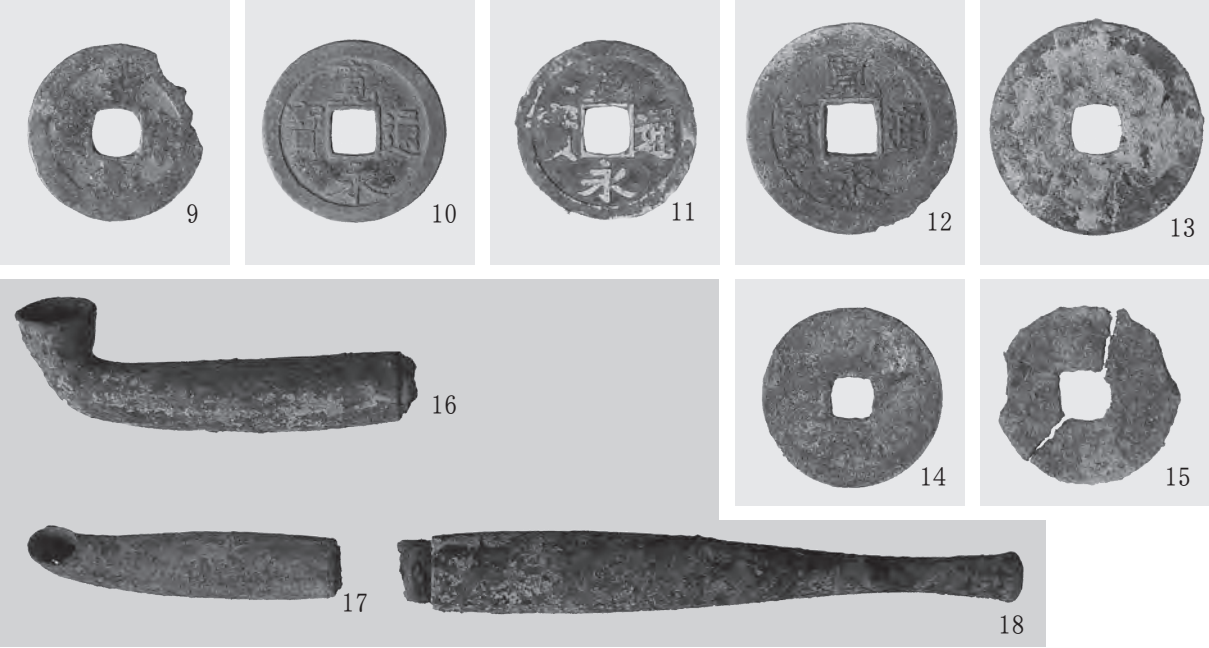
Ａ・Ｃ区出土遺物（土師器）




1：C-2区LQ48
2：B-3区
3：C-3区
4：C-2区LO52
5：C-1区LP52RM128
6：E区SZ14周辺
7：F区LK50
1～6：鉄滓、7：砥石
（1～7：縮尺は原寸の約50％）

遺構外出土遺物（鉄滓・砥石）

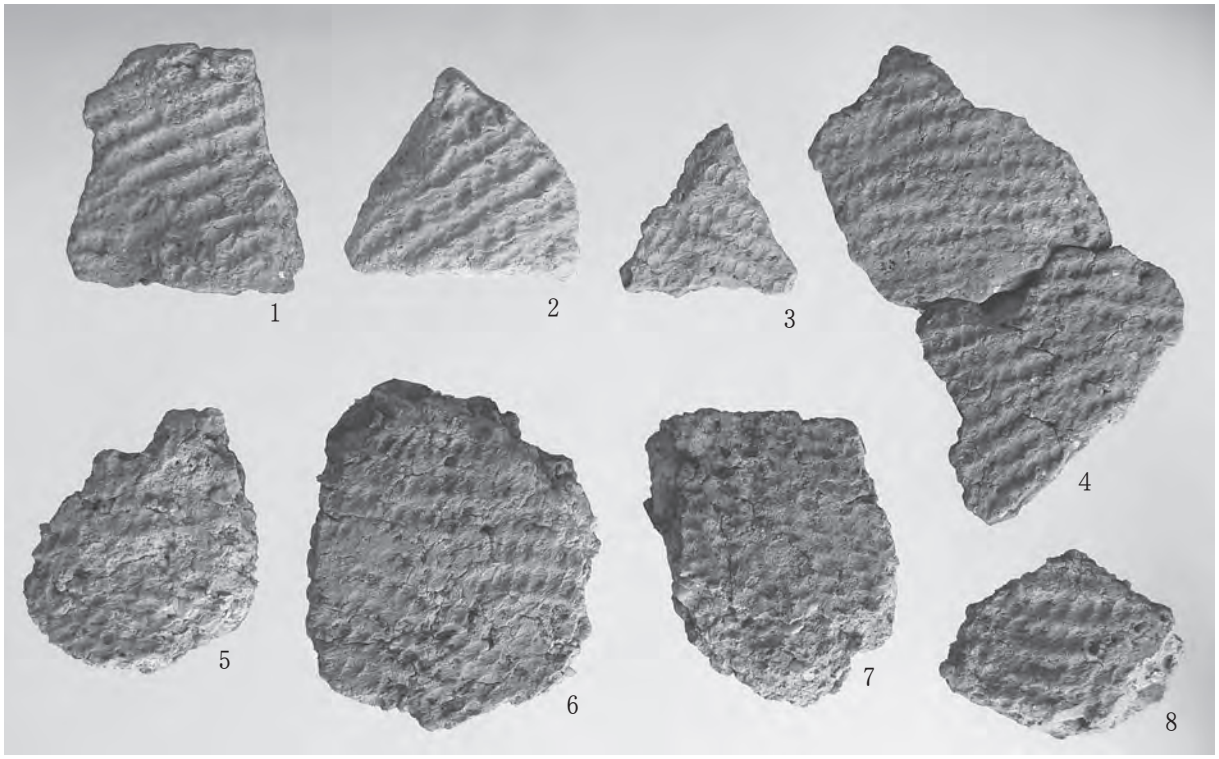



（9～18：縮尺は原寸）

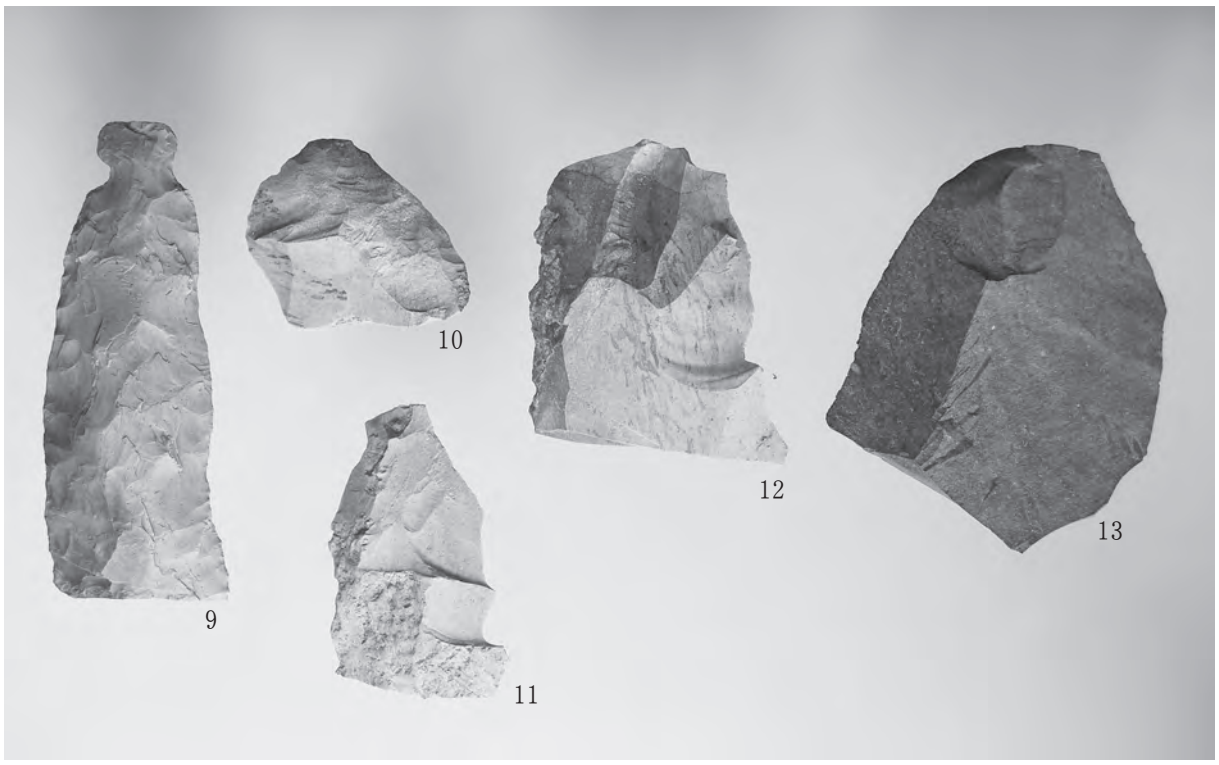
| 番号 | 地区 | グリッド | 遺物番号 | 種　別 | 名　称 | 径 | 厚 | 重量 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 9 | C区 | 表採 | - | 銭貨 | 聖宋元寶 | 23.3 | 0.8 | (2.4) | |
| 10 | A区 | 表採 | - | 銭貨 | 寛永通寶 | 24.4 | 1.1 | 2.6 | |
| 11 | E区 | L I 44 | R M12 | 銭貨 | 寛永通寶 | 23.6 | 1.1 | 2.0 | S K22西約80cm |
| 12 | A区 | L Q55 | R M61 | 銭貨 | 寛永通寶 | 28.0 | 1.0 | 4.0 | 波銭（背） |
| 13 | A区 | L S54 | R M101 | 銭貨 | 判読不能 | 28.5 | 1.0 | 3.8 | |
| 14 | C区 | L Q50 | R M142 | 銭貨 | 判読不能 | 23.9 | 1.2 | 2.8 | |
| 15 | E区 | L G45 | - | 銭貨 | 判読不能 | 23.5 | 1.7 | 2.8 | 鉄銭 |
| 16 | A区 | L P52 | R M122 | 銅製品 | 煙管 | | | | 雁首（羅宇残存） |
| 17 | A区 | L R55 | R M111 | 銅製品 | 煙管 | | | | 雁首（羅宇残存） |
| 18 | A区 | L Q55 | R M70 | 銅製品 | 煙管 | | | | 吸口（羅宇残存） |

径・厚 mm
重量 g

遺構外出土遺物（銭貨・煙管）




**縄文土器**（原寸の約84％に縮小）




**石器・剥片**（原寸の約84％に縮小）

（番号は、第22図の遺物番号に対応する）

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | くろぬましもつつみしたたてあと |
| 書名 | 黒沼下堤下館跡 |
| 副書名 | 一般国道13号河辺拡幅事業に係る埋蔵文化財文化財発掘調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 秋田県文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第470集 |
| 編著者名 | 高橋　学 |
| 編集機関 | 秋田県埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒014－0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20　　TEL　0187-69-3331 |
| 発行年月日 | 西暦2011年７月 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 黒沼下堤下館跡<br>（くろぬましもつつみしたたてあと） | 秋田県秋田市河辺北野田高屋字黒沼下堤下83－1外<br>（あきたけんあきたし かわべきたのだこう やあざくろぬましもつつみした） | 05201 | 1－514 | 39°<br>39′<br>13″ | 140°<br>13′<br>15″ | 20100614<br>～<br>20101015 | 4,650㎡ | 一般国道13号河辺拡幅事業に係る事前発掘調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 黒沼下堤下館跡 | 遺物散布地 | 縄文時代 | 竪穴建物跡４棟（古代）、掘立柱建物跡１棟（不明）、柱列10条（古代）、焼土遺構２基（古代）、土坑15基（縄文・古代・近世・近世以降）、配石遺構１基（近世以降）、段築10か所（古代以降）、柱穴群（不明） | 縄文土器、石器 | 縄文時代前期・後期 |
| | 集落跡 | 古代 | | 土師器、羽口、鉄滓、炭化米 | 10世紀後半代 |
| | 墓地 | 近世 | | 人骨、銭貨（寛永通寶）、銅製品（半合羽ボタンか）、鉄製品（釘） | 近世 |


要約

遺跡は階段状の人工地形（段築）が明瞭に認められることから中世城館として登録され調査に至った。その結果、中世の明確な遺構・遺物は確認できなかった。検出された遺構は、古代の竪穴建物跡４棟・柱列10条、近世の土坑墓６基等である。

古代の竪穴建物には「竪穴・掘立柱併用建物」が１棟（SI04）含まれる。また、SI04には北海道の擦文あるいはアイヌ文化期の遺構内から多くの出土例が報告されている“もじり編み”に使用した「棒状礫」が13点まとまって発見された。同様の事例は本州では青森県内で１例のみであり、秋田県内では初見である。

近世の土坑墓は６基確認され、うち３基からは土葬された人骨が出土した。副葬された銭貨は寛永通寶が主体を占めるが、１点は久保田藩で鋳造された「秋田川尻銭」であることが判明し、土坑墓のうち１基は同銭貨の鋳造時期である18世紀前半以降の埋葬であることが明らかとなった。副葬品のひとつ、ワッシャー状を示す銅製品は、近世に流行した半合羽のボタンであった可能性がある。

秋田県文化財調査報告書第470集
**黒沼下堤下館跡**
－一般国道13号河辺拡幅事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書－

印刷・発行　平成23年７月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802　大仙市払田字牛嶋20番地
電話(0187)69-3331
FAX(0187)69-3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580　秋田市山王三丁目１番１号
電話(018)860－5193
印　　刷　株式会社　三森印刷